

ポテト好きの氷川さん

主催

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはポテト好きな彼女との物語

※私の他作品と繋がっています。色々混ぜていますますがよろしくおねがいします。

目次

プロローグ	1
バイト	7
英語	14
ライブ	20
放課後	28
心配事	35
どたばた!?!おかしなお菓子教室	40
テニス	50
学食	58
胸の違い	66
制裁	76
種目決め	87
対面	94
体育祭	102
七夕	110
代理戦争	121
変化	127
氷川家	136
将来	145
お出かけ	154
看病	165
悶絶	174
氷の川に幸せを	184

ポテト好きの氷川さん

193

その後

ポテトの日

202

プロローグ

壁に貼り出された成績表を後ろの方から見つめる。自分の名前を見つけるのは簡単だ。いつも一位か二位のどっちかだからな。今回はどっちなのか見てみると一位の下に、一ノ瀬幸村の文字を見つける。

(今回もなんとか死守できたか)

運動は得意な方ではない。これといった特技もない。だから勉強だけは誰にも負けたくない。その一心で勉強をやっている。正直言って勉強は得意な方ではない。だけどこの瞬間の達成感は気持ちがいい。

そのまま自分の教室に戻っている途中に一人の生徒とすれ違う。無視だ無視。彼女に関わるとろくなことにならない。

「ずいぶんと余裕そうな顔ですね」

今日こそは何を言われても反応しない。常に何も考えるな。そのまま横を通り過ぎていく。

「なんで無視するんですか」

歩く速度を上げる。

「私の話を聞きなさい」

更に速度を上げる。やばいこれ以上はきつくなってくる。

「もう無理」

結局昇降口付近まで来て捕まってしまった。

「やつと捕まえました」

「だからなんでいつもテストが終わるごとにストーカー被害に合わなきやいけないんですか」

「あなたが私を無視するのがいけないんでしょう」

いやいや、話を聞くなら聞くで今回はどのくらい勉強をしたのか、いつ頃からテスト範囲をやり始めたなど、小一時間ほど詰め寄ってくる。

「ですから、毎回言ってるでしょう。距離感つてもものがないんですよ。だからいつまでもぼっちなんですよ」

「なっ、ひとりぼっちなのはあなたも一緒でしょう」

「全くデリカシーがないな。本当に顔以外最悪な人だ」

「それはあなただってそうでしょう。その整った顔立ち以外最悪です」

そのまま、ホームルームの時間になるまで言い争っていた。

やっと放課後だ。結局あのまま言い争いをしていたらチャイムが

鳴り急いで教室に戻ったら、クラスの奴らからまたやってるよ、なんて目線が飛んできた。そのまま家に帰ることはなく近くのファーストフード店による。テストが終わったからと言って勉強を休むことはない。気を抜けばすぐに彼女に抜かれてしまう。いつもならホットコーヒーを頼むだけなのだが、今日は一位も取れたことだし少し奮発して期間限定の超濃厚チーズポテトも頼んだ。

そのまま、隅っこの席に座って教科書と参考書を広げる。よし、まずは間違えたところの復習をやろう。そう意気込んで耳にイヤフォンを差し込もうとしたときにレジの方から声が聞こえた。

「この期間限定の超濃厚チーズポテトのLサイズを2つお願いします」

「すみません。さきほどのあちらのお客様で売り切れとなってしまいました」

「そ、そんな。今日この時を待ち望んでいたのに」

その時その声の主がこちらをすごい目つきで睨んできた。そのまま何事もなかったかのように耳にイヤフォンを差し込もうとすると、目の前の席にトレイが置かれる音とともに誰かが座ってきた。

「ごきげんよう。一ノ瀬さん。こんな場所で奇遇ですね」

「氷川さん。どうしてここに？」

「実は今日のことを謝りたくて」

何を言っているんだ。俺と氷川さんは水と油の関係のはずだ。近くにいるだけですぐに口論になる。

「へ、へえ。そう。やっと自分の行動に謝罪をする気になったんですか」

「はい。その節はすみませんでした」

「いや、考えて見たら自分も悪いところがありました。こちらこそすみませんでした」

「そうですか。やっぱり一ノ瀬さんは優しいですね」

「い、いえそんなことは」

なんだこの気持ち悪い空気は。いつもの氷川さんじゃない気がする。氷川さんをよく見てみるとめっちゃやトレイの上のポテトを見ている。

「もしかして食べたいんですかこれ」

「そ、そんな訳ありません！」

明らかに動揺しているもの鉄仮面が剥がれている。

「そうですか。ならこれさつき食べたんですけどそんなに美味しくなかったから残そうかな」

「そんなもつたいないことはできません。私がいただきます」

「いや、無理に食べなくてもいいんですよ」

「無理なんかしていません。私が自分の意志で食べたいんです！」

「そこまで言うなら、あげますよ」

「ありがとうございます。やっぱり一ノ瀬さんは優しい人ですね」

まるで麺を啜るかのような勢いでポテトを食べていく。

「好きなんですかポテト？」

「そんなことはありません。言いがかりはよしてください」

そんな事を言っているが明らかにいつもの鬼の風紀委員の面影はなくなっていた。

翌日学校に行くと自分の席に見知った顔があった。

「なんでここにいますか。氷川さん」

「やっときましたかーノ瀬さん。遅いですよ」

「もしかして自分の席の場所を忘れたとか」

「やっぱりあなたは私を馬鹿にしているわね」

「そんなことないですよ」

「それよりもついてきてください」

「嫌です」

「なんですぐに拒否するんですか!」

「どうせ校舎裏に呼び出してランチするんでしょう」

「あなたは私のことを何だと思っているんですか」

「やばい人」

「その考えから改める必要がありそうね」

「それで、本当のところ何のようですか?」

「ここじゃあれなんで、場所を変えましょう」

そう言っって教室を出ていく氷川さんについていく。

「で、何があったんですか?」

「昨日のことなんです」

「もしかしなくても、ポテトが好きなことを黙っていてほしいとか

じゃないですよね」

「そ、それは」

やっぱりそうか。明らかにポテトの話になると、途端に口数が少なくなる気がする。それにしてもポテトが好きだなんてやっぱり意外だな。氷川さんなら「あんな体に悪い物は食べたくありません」とか言いそうなのに。

「別にいいじゃないですか。ポテトが好きでも。隠すことなんかありませんよ」

「だから別に私はポテトが好きだなんて言っていないません」

「そうですか、なら別に言いふらしても構わないんですね」

「だめです!」

びつくりした。いきなり大声出すなんて氷川さんらしくない。

「でも好きなんですよね」

「別に好きじゃないです。だいたいなんですかいきなり。私は昨日の話をしようとしただけですのになぜ私がポテトが好きという話になっっているんですか。だいたい一ノ瀬さんはいつもそうです。私を毎回毎回バカにしてくるような言い方をしてきて有る事無い事言うて最低ですね。」

「その言い方だとやっぱり好きなんじゃ」

「す・き・じゃ・あ・り・ま・せ・ん」

「は、はい。氷川さんはポテトが決して好きではないですよ。わかっています」

「わかればいいのです」

「それじゃ結局何の用事なんですか?」

「何でもありません!」

そう言っつて氷川さんはズンズンと音がするような足踏みで教室に戻って行った。

「なんなんだよ一体」

少し時間がたったあとに教室に戻った。

そして授業中明らかにこちらを見てくる。氷川さんの席は一番前の席なので振り返るとすぐに分かる。目が合うとさつと前の方に向き直る。

「氷川さん。どうかしたんですか？」

すると、先生から声をかけられる。

「いえ、なんでもありません」

「そう。ならいいのだけど」

それからは後ろを振り返ることはなくなったが背中がずっとそわそわしている。やっと授業終了のチャイムが鳴ると氷川さんはすぐに自分の席の方まで急ぎ足で来る。

「言ってますんよね」

「何をですか？」

「ですからさっきのことです」

「何のことか言ってくれなきやわかりませんよ」

「まあ、一ノ瀬さんのことですから話し相手もいませんよね」

「……………それは氷川さんもですよね」

「……………。この話はやめましょうか」

「そうですね。お互いのためにやめましょう」

それからお互い気まじくなくなり氷川さんは自分の席に戻って行った。

これが氷川さんとの不思議な日常の始まりだった。

バイト

今日は土曜日。普通の高校生だったら、家に引きこもるか友達と出かけるか、はたまた彼氏または彼女と出かけるかそんな休日の過ごし方だろう。

だけど自分はそうではない。段々と暑くなってきた商店街を歩き目的地の喫茶店まで足を運ぶ。店のドアを開け厨房裏まではいっていく。

「いつも時間ぴったりだな。幸村」

自分にその声をかけてきたのは、この店のマスターである。

「別にいつも通りですよ」

「そのいつも通りができることがすごいことなんだぞ」

「ありがとうございます」

そのままロッカー室に入りバイトの制服に着替える。

「マスター今日はどっちをやればいいですか？」

「そうだな昼前まではフロアーにはいつてくれ」

「了解しました」

そうやってフロアーに行くとき先に入っていたつぐみさんが待っていた。

「おはよう。つぐみさん」

「あ、おはようございます。幸村さん」

この子は羽沢つぐみ。この店の看板娘だ。あとめっちゃいい子。

「そういえば幸村さん。この間のテストはどうだったんですか？」

「おかげさまでなんとか今回も一位を死守できたよ」

「わあ、そうなんですか。やっぱり幸村さんはすごいですね！」

「そんな事ないよ。今回もなんとかギリギリだったからね」

そう本当に今回はギリギリだった。氷川さんたら前回自分に負けたから今回はいつも以上に本気を出しますとか言ってたからなあ。だからいつも以上に勉強時間を増やした。ぶっちゃけ氷川さんがそんなことを言わずに勉強をしていたら負けていた気がする。

そんな会話をしているときにドアチャイムがなった。

「いらっしやいませー」

その後は昼のピークの時間になって忙しかった。

疲れた。やっぱり休日の昼の時間帯は混むからあまりシフトを入れたくない。今は昼休憩の時間だ。

「おう、おつかれさん」

マスターがまかないを持ってきてくれる。

「いやーやっぱりこの時間は混みますね」

「そうだな。でも昔ほどではないけどな」

「やっぱり最近できた猫カフェのせいですか？」

「そうだな。やっぱりあの猫カフェができたのが大きいな」

マスターが言う猫カフェというのは比較的最近できたものだ。なんでもその猫カフェのマスターが捨て猫を拾っていくうちに家が狭くなり家を改造して猫カフェにしたらしい。

「でもそろそろ話題性もなくなってきて落ち着くんじやないですか？」

「いや、あそこの猫カフェは猫だけではなく、マスターとその倅の料理も話題をよんでいてリピーターが続出しているらしい」

「そうなんですか」

「まあ、この話はおいておくとして幸村午後は買い出しに行ってくれないか？」

「わかりました」

「おう、よろしくな」

マスターに買い出しのリストを渡されてショッピングモールまでやってきた。

「さて、最初は」

なんでも近頃お菓子教室を開くらしくそのため材料を買ってきてほしいとのことだ。

頼まれたものを買って帰ろうとしたところ、ファーストフード店に入っていく見知った背中が見えた。いや、今の絶対に氷川さんだろ。後を追うように店に入っていった。

いた。氷川さんは奥の席に一人で座ってポテトを食べていた。

「こんにちは。氷川さん」

「ゴホゴホッ。一ノ瀬さんなぜここに？」

「たまたま買い物終わりに氷川さんがここに入ってくるのが見えたので」

「そ、そうですか」

「それで何をしていたんですか」

「別に何も。練習が終わったので休んでいただけです」

「練習？」

「はい」

「なにか習い事でもやっているんですか？」

「いえ、特には」

「じゃあ、何の練習ですか？」

「バンド練習です」

バンド。自分の中のバンドのイメージはもっとキャラキャラした人や、オラオラ系の人がやるイメージ何だけど。

「意外ですね。氷川さんがバンドをやっているなんて」

「そうですか？」

「ちなみになんですけど、なんの楽器をやっているんですか？」

「ギターをやっています」

「ギターですか」

「氷川さん、部活もやっていますよね」

「はい。弓道部に所属しています」

「あと、風紀委員もやっていますよね」

「はい。一年生のときからやっていますね」

バンド活動もやっていて弓道部にも入っていて風紀委員もやっている。それでいてテスト順位も自分と競い合っている。やっぱり氷川さんはやばい人かもしれない。

「そ、そうなんですか。すごいですね」

「……」

「どうしたんですか？」

「いえ、素直に褒められるとは思わなくて」

「いくら自分でも褒めるときは褒めますよ」

「ふふ、ありがとうございます」

初めて氷川さんが笑っているところを見たかもしれない。いつもムツスとした顔でいるからなんだか新鮮だ。

「そろそろ行きますね」

いつも間にかトレイの上に山盛りに乗っていたポテトがなくなっていた。

「そうですか。また学校で」

「ええ、また」

「只今戻りました」

「おう。遅かったな幸村」

「ちよつと知り合いに会ったもので」

マスターが信じられないといった顔で見ってくる。

「幸村。おまえ知り合いなんていたのか！」

「マスターいくらなんでも知り合いぐらいいますよ」

「そうか、成長したなあ。幸村」

「そんな目で見ないでください」

「いやいや、この一年間お前のことを見てきた身としては嬉しい限りだよ」

「そ、そうですか」

「よし！いまからは厨房入ってくれ」

「わかりました」

フロアーのモップをかけ終え、テーブルをふきんで拭く。

「よし終わり！」

「お疲れ様でしたー」

「おう、おつかれさん」

長いバイトの時間を終えて家に帰る。最近はやもすつかり暑くなってきた。それにしても意外だったな。氷川さんがバンドをやっているなんて。

「ただいまー」

「おかえり。ご飯はどうする？」

「後でいいや」

「そう。なら自分で温めてね」

「わかったよ」

やっと自分の部屋に帰ってきた。今日ぐらいは勉強しなくてもいいかな。そのまま机に座りパソコンの電源を入れる。なんとなくバンドで検索をかける。するとトップに出てきたのはガールズバンド特集というサイトだった。

(ガールズバンド?)

勝手なイメージだったがバンドは男の人がやる印象が強いのだが。なんでもココ最近ガールズバンドが流行りらしい。気になっていろいろ調べてみると期待の新人ランキングという物があった。一位はRoseliaというバンドだった。

どうやら実力派の期待の新人らしい。メンバー紹介のページにとんで見る。ボーカルの人はクールで知的なイメージで、ベースの人はどう見てもギャルだ。ドラムの人はまだ中学生らしく、このキーボードの人はどこかで見たような気がする。

そしてギターだが、これ氷川さんだよな。いつものきっちりとした服装ではなくライブ衣装だろうか？服装のせいで違う人に見えるがどう見ても氷川さんだった。

(もしかして双子とか。いや双子だとしても姉妹でギターをするわけないか)

恐る恐るライブ映像をしてみる。気がつく動画の再生が終わっていた。何だ今の感じ。ただ一心に画面を見つめていた。バンド全

体の演奏もすごかったが、素人目で見ても氷川さんの演奏技術はすごかった。

改めてわかった。氷川さんはやばい人だと。

英語

英語。それは体育の次に忌々しい授業だ。なぜかだって？そんな理由はひとつしかないだろう。ペア学習があるからだ。ひとりぼっちにとつてこの授業がどれだけ辛いことか。

「はい。それではペアを組んで発音練習してください」

先生がそう声を掛けるとクラスメイトは椅子を動かして友達同士で集まる。自分はどうというかと椅子を動かさずただ沈黙を貫いていた。この時間がまた長い。もういつそ寝てしまおう。そう思い机に顔を突っ伏したときだった。

「一ノ瀬さん。何寝ようとしているんですか」

「氷川さん」

それは僕と同じくぼっちの氷川さんだった。

「何のようですか氷川さん。悪いですけど自分はこの時間は耐え難いものなので寝ますよ」

「私の目の前で寝ると宣言しましたか。残念ですが一ノ瀬さんを寝させることはできません」

まためんどくさいことになりそうだ。氷川さんは一度決めたことは絶対に覆さない。

「なんでまた。まさか自分と一緒にやるとか言いませんよね」

「おや、察しが良くて助かります。では一ノ瀬さんはユウタの方を呼んでください」

仕方なく教科書を開いて読み始める。ここで下手に反論でもすればそれこそめんどくさいことになる。

「終わりましたね」

「ええ」

周りを見渡してみるとまだみんな楽しくおしゃべりをして時間を潰している。授業が終わるまであと20分はある。あの先生のことだからあとはこのまままで授業を終わるつもりだろう。

「それじゃあ自分は寝るんで氷川さんは自分の席に戻ってください」
「嫌です」

ホント一体何なんだこの人は。ほんとあの日から氷川さんのことがわからなくなった。

「ここで私が自分の席に戻ってしまおうと一人ぼっちに見えるじゃないですか」

「事実なんですからいいじゃないですか」

「それに一番前の席で一人で座っていると先生の目が可愛そうなものを見てくる目線なんです」

たしかにそれはわかる気がする。自分も教卓の前の席になってこんな感じの時間に一人でいると可愛そうなものを見てくる目で見られていた。

「はあ、わかりましたよ。ここにいるのも別にいいですよ」

「ありがとうございます」

やっと会話を切り上げて寝ようと思ったたらまた声が出る。

「なんで寝ようとするんですか!」

「いや、ここにいることは許可したでしょう」

「そうだとしても私が横にいるのに寝ることがありますか普通!」

「なんですか。もしかして話し相手にでもなつてあげればいいんですか」

「周りを見てください。楽しそうに話しているでしょう」

「確かに周りはそうですね。別に自分たちは友達でもないですし、別にいいでしょう」

「一ノ瀬さんはおかしなことを言いますね。私達はすでに友達でしょう?」

氷川さんは当たり前でしようみたいな顔で自分の方を見てくる。

「すいません。いつから自分と氷川さんは友だちになったんでしょうか?」

「それは・・・」

「ほら、言葉に言い表せないなら友達じゃないんですよ」

「こうやって話し合っているだけでももう友達ではないのでしょうか」

「いやそれだけで友だちというには」

「もう何なんですか!私と一ノ瀬さんは友達これでいいじゃないです」

か！」

「・・・わかりましたよ。自分と氷川さんは友達これでいいですか」

「ふふ、ありがとうございます」

そう言って氷川さんは嬉しそうに笑った。

「そういえば氷川さん。ライブの映像見ましたよ」

すると氷川さんは驚いたのか目を見開く。

「私がバンドをやっていることをどこで知ったんですか」

「こないだ自分で言ってたじゃないですか」

そういえば、と顎に手を当てて考える仕草をする。

「それにしてもすごかったですよ。Roseliaでしたっけ。ポーカー、ベース、キーボード、ドラムの人たちもすごかったですけど、氷川さんのギターが一番すごかったです」

「あ、ありがとうございます」

ほんといつもこんな感じで素直になれば可愛いのかなあ。

「それで一ノ瀬さんは私のギターを聞いて具体的にどう感じましたか？」

「具体的にですか？」

具体的と言われてもなあ。音楽の知識なんか全く無いからうまく答えられる自信はない。

「自分の感じたままでもいいんですか？」

「はい。むしろそのほうが参考になります」

「そうですね。自分が聞いた感じだと、見ている人たちを惹きつけられるそんなギターに聞こえました」

「あとはないんですか？」

「あとですか。ライブ衣装の氷川さんはいつもと違って可愛く見えませんでしたよ」

「か、可愛く。全く馬鹿にしないでもらえるかしら！」

「いやホントですって。いつも制服しか見たことなかったですけどライブ衣装は新鮮に見えました」

「そ、そうですか」

そう言っつてうつむいてしまう氷川さん。なんだか気まずい。別に悪いことは言っていないはずなのになあ。

「あ、お世辞じゃないですからね」

「わかったからこの話題はやめて頂戴！」

今度は顔を赤く染めて睨みつけてくる。

「わ、わかりましたよ」

「わかればいいのです」

「今度ライブとかするんですか？」

「そうね今週末にやるわね」

「それってまだチケットありますか？」

「なに。もしかして見に来るつもり？」

「はい。あのライブを生で見れるならぜひ行きたいです！」

「悪いけどチケットならとっくに完売したわよ」

「そ、そんな」

まさかもう完売しているとは。それもそうかあのライブを見たいと思う人はたくさんいると思うし完売しているのも納得だ。

「そんなに来たかったんですか？」

「そりゃあ行きたかったですよ。氷川さんのギターも見えたかったですし」

「そうですか」

正直いつも突っかかってくる氷川さんだけど自分がやると決めたことは妥協は許さない性格だ。だからギターの技術にも妥協は許さないのだろう。

「ご、ごほん」

「どうしたんですか。その嘘がわかりやすい咳は」

「一ノ瀬さんが良ければですけど、このチケットいりますか?」

そう言って氷川さんが手渡してきたのはライブのチケットだった。

「これは」

「ライブのチケットです」

「完売したはずじゃ」

「もし呼びたい人がいるなら渡しなさいとリーダーからもらったのだけれどあいにく渡す相手もいなくて」

「いいんですか?」

「まあ、一人でも観客が増えたほうが私達も嬉しいですから」

「それならありがたくもらいます」

よっし!これでライブに行ける。あの演奏が生で入れるなんてほんとにラッキーだ。

「あ、当日ポテトの差し入れでも持っていきますよ」

「ポテト。はッ。別にポテトの差し入れなんかいいりません。だいたいあんな生産地も不明で何日使っているかわからない油であげた化学調味料まみれのものを差し入れに持ってくるなんて一ノ瀬さんはどうかしています」

「そ、そうですか。余計なことをしようとしてすみませんでした」

「ですが、メンバーの中にそのようなものが好きという物好きな方がいますので持ってきてもらっても構いません」

「いや、ポテトなんてジャンクなものを楽屋に持っていくと氷川さんが怒ってメンバー間の空気が悪くなると思うのでやっぱりやめておきます」

「べ、別に私はそんなことじゃ怒らないわよ」

「え、じゃあ持っていってもいいんですか」

「ええむしろ持ってきて頂戴」

ほんと氷川さんてわかりやすいよな。好きなら好きと早く認めればいいのに。いつもはツンツンしているくせにポテトが好きっていうギャップが有るのが本当に面白い。

「はーい。そろそろ授業も終わるから自分席に戻ってー」

先生の号令がかかり皆自分の席に帰って行く。

「それじゃあ戻りますね。なかなか有意義な時間でした」

「自分もこんなに英語の時間が楽に感じたのは初めてです」

「あ、ポテトの差し入れ忘れなくてくださいよ」

「わかってますよ」

そう言うとき度こそ氷川さんは自分の席に帰っていった。

ライブ

あれから時間が経ち週末の日曜日になった。今日は氷川さんのライブの当日だ。正直言つて昨日は楽しみでなかなか寝付けなかった。まだ午前中なのでずいぶんと余裕がある。

枕元にあるスマホを開く。何でも事前に調べてみたところ Rosselia というバンドはボーカルの人がもともとは一人で活動していたところに段々とメンバーが集つてきたらしい。たしかにこのクールなイメージのボーカルの人なら氷川さんと気が合いそうなのはわかる。

「さてとそろそろ作るか」

ベッドからでてキッチンに向かう。冷蔵庫の中から昨日から水につけこんだじゃがいもを取り出す。それをフライドポテトの大きさにカットしていく。

そうわざわざ氷川さんのために自分はフライドポテトを作つてあげているのだ。まあ本音を言うと氷川さんが食べる量が明らかに多そうなのがして、自分の財布じゃ持たないと薄々わかっていたからだ。少なくとも氷川さんはLサイズのフライドポテトを一分以内に食べきるはずだ。

熱くなった油の中にポテトを入れていく。ちゃんと新しい油を使っているぞ。ざつと一キロのポテトを揚げて終え。次に味付けをしていく。1つ目はオーソドックスにとろけるチーズだ。2つ目はカレー粉をまぶす。3つ目はコンソメ味。4つ目は合うのかわからないがチョコレートソースをかける。5つ目は王道のケチャップをかけていく。

こうして5つの味をしたポテトを作った。これならあのポテト評論家も黙らせることができるだろう。それぞれの味をタッパーに詰めてカバンに入れる。時計と見てみると12時を回ろうとするところだった。そのまま玄関に向かいライブハウスまで向かった。

そろそろ本番ね。いつものようにギターをチューニングして音を確かめる。今日は一ノ瀬さんも来ることだからいつも以上に気合が入る。今日こそは私が一ノ瀬さんを驚きの顔にしてみせる。そう考えたらいつもの以上にギターを持つ手に力が入っていた。

(落ち着いて。いくら一ノ瀬さんが来るといつてもいつもみたいに正確に弾くだけよ)

そう考えると苦手だったフレーズもスムーズに弾けた。

(それにしても一ノ瀬さんはいつ来るのかしら。早くポテトを持ってきてほしいのだけど)

その時今井さんと目が合った。

(あれから、時間は立っただけど湊さんの様子はどう、今井さん)

(うん、見ている感じ大丈夫だとは思うけど、やっぱり本番に近づいていくにつれて、自分を追い込んでいく感じはするね)

(そうですね。いつなら本番前の湊さんは落ち着きがあるのに、今日はどこかそわそわしている感じはあります)

湊さんは落ち着きが無いのかそわそわしている。やっぱりあの男子生徒がなにかしたのは間違いないでしょう。

それにしても男っていうのは本当に最低な生き物ですね。一ノ瀬さんもいつも私にテストで勝って余裕そうな顔で煽ってくるのもなんとなく腹が立ちますし。

それから湊さんの話を聞いているうちに本番に近づきステージ裏に行った。

ここがライブハウスか。思っていたよりも小さい感じがする。なんか起きるとすぐに崩壊して温泉でも湧き出てきそう（偏見）。中は案外きれいだった。すでに受付は開始しており沢山の人がいた。ライブチケットをポケットから取り出し列に並ぶ。やっと自分の番になり月島というスタッフさんにチケットを渡す。

「はい。一回預かるねー」

そう言つてチケットを渡すと、大きな声で言われた。

「えっ！これ関係者チケットじゃない。あなたどこでこれを手に入れたの？」

「どこと言われても普通にもらいましたよ」

「誰に？」

「えっと、氷川さんです」

「紗夜ちゃん!？」

「そんなに意外ですか？」

「Roselliaの関係者チケットなんて今まで出してきた人なんかいないからびつくりしたよ。それにしても紗夜ちゃんが一番最初に男を連れてくるなんて意外だったなあ」

「別に彼氏とかじゃないですからね」

「またまたー。嘘言っちゃって。そうゆうお年頃なのはわかるけど紗夜ちゃんの前で言っちゃだめだぞ☆」

「冷静になって考えてみてください。あの氷川さんが彼氏なんか作るわけ無いでしょう」

「……言われてみればそうかも。ごめんねー変なこと聞いちゃつて。でもホントはどんな関係なの？」

氷川さんと自分の関係。他人に聞かれたときはなんて答えればいいのか。ライバル？それとも犬猿の仲？

「えっと、知り合いですよ」

「そっかそっか。じゃあライブ楽しんできてねー」

まだ他人に面と向かって氷川さんと友達というのはなんかむず痒かった。

「あ、あとこれ氷川さんに差し入れです」

そう言っただけでカバンに入っているポテトのタッパーを差し出す。

「うんじゃあ楽屋のほうに置いておくね」

「お願いします」

そのままライブ会場に入り氷川さんが出てくるのを待った。

ステージに立つ。すると一斉に観客からの視線で視界が埋まる。ふと無意識のうちにその人混みの中から一ノ瀬さんを探す。いた。彼はいるかいないのかわからないような中途半端な位置でステージを見上げていた。
(ほんとうこうしてみると顔だけはいいのよね。その他は最悪だけだ)
)

その時目線があった。目線で前の方に来るように送る。すると意

図がわかったのか彼は渋々といった感じで人をかき分け最前列までやってきた。

「約束通りに来ましたか」

「当たり前ですよ。そもそも自分が氷川さんの演奏を聞きたかったですしね」

「そ、そうですか」

面と向かってそんなことを言われるといくら一ノ瀬さんといえど嬉しく感じてしまう。

「あと差し入れのポテト楽しみにしててください」

「だから私はポテトなんか」

するとその時湊さんから合図がかかる。ギターを握り直して集中する。

「見ていてください。これが氷川紗夜の音です」

「見せてくださいよ。氷川さんの音を」

「いくわよ、みんな。聞いてください、BLACK SHOUT」

ライブ会場はもうすでに人でいっぱいだった。

「まさかここまで人がいるとは」

すると一斉に歓声が上がる。ステージ裏から氷川さんたちが顔を出した。相変わらずあの服装のときだけは可愛げがあるな。するとその時氷川さんと目が合った。目線が早く前まで来なさいと言っているようにしか見えない。渋々人をかき分けて最前列に出た。

「約束通りに来ましたか」

「当たり前ですよ。そもそも自分が氷川さんの演奏を聞きたかったで

すしね」

「そ、そうですか」

そう言っつて氷川さんは少し顔を赤らめた。よくよく氷川さんを見
てみるとうつすら化粧をしているようにも見える。氷川さんも化粧
するんだななんて思った。

「あと差し入れのポテト楽しみにしててください」

「だから私はポテトなんか」

するとその時ボーカルの人から合図がかかり氷川さんがギターを
握り直す。

「見ていてください。これが氷川紗夜の音です」

「見せてくださいよ。氷川さんの音を」

「いくわよ、みんな。聞いてください、BLACK SHOUT」

なんとというか生で聞くと更にすごかった。氷川さんの性格通り、ギ
ターの音は正確でミスがないように見えた。やっぱり何かを全力で
やっている人ってかっこいいな。あの氷川さんがとても今は眩しく
見えた。1曲目2曲目と順調に進んでいたが最後の曲をやろうとし
た瞬間ボーカルの人が急に動かなくなってしまった。何かあったの
だろうか？

氷川さんが声をかけているがまるで聞こえていないように見える。
そのとき会場の入口の扉が勢いよく開いた。すると入ってきた人は
人混みをかき分けて自分の隣まで来た。なんなんだこの人は。もう
チケットは売り切れたはずだろう。

ボーカルの人に話しかけるがまるで聞こえていないらしく棒立ち

のままだった。するといきなり大声で何かを叫んだ。するとボーカルの人は気がついたのかマイクを握り直して歌い始めた。

なるほどこれがリア充兼陽キャと言うやつか。なんだか自分と氷川さんとの関係と明らかに違うのを叩きつけられた気がした。

そのまま3曲目も無事に終わり氷川さんはステージ裏に戻っていった。そのまま楽屋によることもなくまつすぐ家に帰った。

差し入れ、氷川さん喜んでくれるといいなあ。

なんとかライブも無事に終わり楽屋に帰ってきた。途中で湊さんが動かなくなったときは焦ったけどなんとかかかりましたね。それにしても今日のライブはいつも以上にできたというか何でしょう。まあ、とにかくいつも以上に良かったです。

ふっと机を見てみると氷川さんへと書かれた紙とともに5つのタッパーが置かれていた。中を見てみると色んな味をしたフライドポテトが入っていた。

(まさか、一ノ瀬さん手作りで作ってきてくれたのかしら)

その中のひとつを手に取り口に運ぶ。タッパーのほうを見ているといつの間にかポテトがなくなっていました。

(おかしいですね。まだ少ししか食べていないはずなのに)

そのまま次のタッパーに手を伸ばしポテトを口に運ぶ。するとまたしてもいつの間にかタッパーが空になっていた。

(まさかこの私が無意識のうちに食べたというの)

信じたくない。そんな思いで残りのタッパーに手を伸ばすが全部気がついたら空になっていた。

(これは殿堂入りですね)

この日何年ぶりに私の中のポテトランキングに動きがあった。

(一ノ瀬さん。絶対にまた作ってもらいますからね)

心にそう固く決意した。

放課後

ライブから翌日の月曜日。けだるい体を起こして学校に向かう。月曜日の朝は体が重く感じる。それでも行かなければという使命感に体を動かされ学校に行く。

すると校門で見慣れた人影があつた。

「氷川さん。おはようございます」

「おはようございます。一ノ瀬さん」

そのまま横を通り抜けようとする腕を掴まれる。

「どこに行こうというのですか？」

「どこって教室に行くに決まっていますじゃないですか」

「あなたは目の前で持ち物検査をしているがわからないんですか」

「それなら他の風紀委員の人に見てもらうので氷川さんは他の人を見てあげてください」

「いえだめです。一ノ瀬さんの持ち物は私が見ます！」

まったく氷川さんはめんどくさいな。そう言つて自分のカバンを取り上げ中身を確認していく。

「そういうえば昨日のライブすごかったです」

「あ、ありがとうございます」

「やっぱり生で見る迫力は違いますね。生で見るとよりいっそ氷川さんの演奏がすごく見えました」

「そ、そうですか」

「はい。他の人達もすごかったですけどやっぱり氷川さんのギターが自分は一番好きです」

「／／／／／」

「氷川さんのソロパートなんか特にすごかったですよ。聞いていると自然と引き込まれていくというか正直惚れました」

「／／／あ、ありがとうございます／／／」

「どうしたんですか。さっきから下を向いて具合でも悪いんですか？」

氷川さんの顔を覗き込むと顔が真っ赤だった。

「どうしたんですかそんな顔を赤くして！やっぱり具合悪いんですか！」

「……って……い」

「はい？」

「もう教室に行つてなさい!!」

そのままカバンを投げ渡してきた。

「なんですか。心配してあげたのにそんな怒ることないでしょう」

「いいから早く行く!!」

そのままキツと真っ赤になった顔で睨まれたので渋々教室に向かった。

「全く何なんですか一ノ瀬さんは」

まだ顔の熱が引いていない。いつも口を合わせれば喧嘩ばかりしている気がするのに何なのかしら本当に。

「氷川さんのソロパートなんか特にすごかったですよ。聞いていると自然と引き込まれていくというか正直惚れました」

さつき言われたことを思い出してまた顔が暑くなる。

（だいたい何なんですか一ノ瀬さんは。あんな言い方されると私じゃなければセクハラになります！）

（でも、あんな面と向かって人に褒められたのはいつ以来かしら）

小さい頃からいつもそうだった。何かあるごとに日菜と比べられてきた。そしていつも私は日菜に勝てなかった。そのことがだんだ

んと嫌になってきて今となってはあまり話さなくなった。

日菜と比べられたくない。その思いでギターを始めた。ただ譜面通りに弾く。それが私の音だった。そんな機械みたいな音を彼は好きと言ってくれた。

(全く一ノ瀬さんはよくわからない人ですね)

そのまま持ち物検査のため校門に戻った。

やっぱり眠い。こんなに眠いのは月曜日だからなのか。そのまま意識が落ちそうになる。ついに我慢ならずポケットからスマホを取り出す。

なんとなく楽器初心者という単語を検索する。昨日の氷川さんのライブを見ていたら趣味のひとつでも始めてみようかなんて考えていた。初心者に始めやすい楽器ランキングというサイトを開く。すると一番上に出てきた楽器はギターだった。

(やっぱりギターが一番なのかな)

なんでも初心者セットというものが売っているらしくそれでまずは入ってみるのがいいらしい。

(でもどれがいいなんてわからないしな)

やっぱり経験者に聞くのが一番なんだろうか。でもなあ氷川さん朝のことがあってからやけに避けられている気がする。廊下ですれ

違ったときもさつと物陰にかくれるし、英語の時間もいつもなら来るはずなのに今日は席に座ってじっとしているし。

その時昼休みを告げるチャイムが鳴った。そのまま授業も終わりクラスメイトたちは学食に行こうというグループと、友達同士で机を合わせ弁当を広げるグループに分かれる。

肝心の氷川さんと自分はと言うといつも自分の席で一人で食べている。覚悟を決めて弁当を持って席を立つ。そのまま氷川さんの机まで行き教卓の椅子を持ってきて座った。

「い、一ノ瀬さんなぜここに!?!」

「いや、なんとなく氷川さんと食べたい気分だったから来たんですけどだめでした?」

「い、いえ別に構いませんが」

「なら一緒に食べましょう」

「は、はい」

「氷川さん朝のことはすみませんでした」

「朝のことですか?」

「はい。朝のことを怒っていたから今日自分のことを避けていたんですよね」

「そうですよ。あんなこと校門で言われたら誰だって怒ります」

「でも謝ってくれたので許してあげましょう」

「ありがとうございます」

そのまま会話もなく二人で淡々とご飯を食べる。なんでポツチつてご飯を食べるときにしゃべれないのだろうか。

さて、そろそろ聞き出すか。

「氷川さん今日放課後時間ありますか?」

「急にどうしたんですか」

「いやもし時間があれば一緒にでかけてもらおうかと」

すると氷川さんは勢いよくむせ返った。

「大丈夫ですか!」

優しく背中を擦ってあげる。

「きゅ、急になんですか一ノ瀬さんはやっぱりセクハラ野郎でありナ

ンパ師だったんですね!!」

「なんでそうなるんですか!」

「だっていきなり放課後付き合えなんてナンパと変わりませんよ!」

「ですから放課後空いているか聞いたんじゃないですか」

「だとしてもです!」

「それで結局放課後時間はあるんですか?」

「あ、あるにはありますけど」

「なら一緒にでかけてくれますか」

氷川さんの顔を見て真剣な顔で聞く。すると氷川さんはしょうがないと言った感じで答えた。

「はあ、わかりました」

「じゃあ放課後待っていてくださいね」

「もう好きにしてください」

それから放課後になった。氷川さんは同じ教室なのにもかかわらずわざわざ校門に集合というめんどくさい事を言ってきた。

「おまたせしました」

「遅かったですね」

「風紀委員の方に少し顔を出していましたので」

「そうですか」

「……」

「……」

き、気まずい。お互い会話もなく歩いているだけだがなぜこんなに空気が重いんだ。

「そ、それで一ノ瀬さんはどこに行きたいんですか？」

ついに沈黙に耐えきれなくなったのか氷川さんが口を開く。

「えつと楽器店の方に行こうかと」

「急にどうしたんですか。楽器に興味でもできたんですか？」

「はい。昨日の氷川さんの演奏を聞いていたら自分もなにか楽器でも始めたいなと思いきと調べて見た結果ギターを始めてみようかなと。でも最初は何を買ったらいいのかわからなくて氷川さんに選んでもらおうかと言うわけです」

「なるほどそう言うことでしたか」

氷川さんは納得したようにつぶやく。

「……」

「……」
「ここが楽器店。実際に来てみるのは初めてだ。」

「ほら入りますよ」

氷川さんは通いなれているのか軽い足取りで入っていく。その後を追いかけるようについていった。

「まずはここの中から決めたほうが良いと思います」

氷川さんに連れてこられたのは初心者用の楽器コーナーだった。

「おすすりめとかはあるんですか？」

「初心者セツトはそれほど差はないので、デザインで選んでもいいと思います」

「そうですか」

ざっと見渡してみると氷川さんが使っているギターに似たものがあった。手に持って見るとしつくりときた。

「これにします」

「そうですか。ならば自分の買い物があるので」

そのまま氷川さんはギターコーナーに行ってしまった。

セツトにはついていてはいえ何となく自分のピックは持つておきたいと思いピックを見に行く。デザインが違うだけで他の違いがわからなかった。

「何をしているんですかーノ瀬さん」

「氷川さんどうしてここに」

「ピックも買い換えようと思っていたんです」

「そうですか」

さつきから氷川さんがあるピックをチラチラと見ている。それは犬のピックだった。

「もしかして犬好きなんですか？」

「そんな事はありません!!」

ポテトのときといい氷川さんは本当にわかりやすい。

「今日付き合ってくれたお礼としてプレゼントしますよ」

「べ、別にそんな必要はありません」

「遠慮しなくてもいいですよ」

そのままレジに向かつて会計を済ました。

「どうぞ」

「ま、まあ買ってしまったものはしょうがないのでもらってあげます」

氷川さんは緩んだ表情でピックを受け取った。

そのまま二人でギターの話をしながら帰った。

心配事

ギターを買って家に帰って少しやってみたがとても難しい。これをあのレベルまで弾ける氷川さんはやっぱりすごいな。その翌日学校に行ってみると氷川さんの様子が少しおかしい。なんだかいつもよりため息が多いとかかなにか悩んでいるようにも見えた。

それは英語の時間もそうだった。いつもはため息なんかつかない氷川さんがこの時間だけで4回もついている。

「氷川さんどうかしたんですか？」

「一ノ瀬さん。いや何でもありませんよ」

「いや、今日ずっと変じゃないですか。何か悩み事でもあるのかと思っただけですけど」

「……」

すると氷川さんは少し悩んで口を開いた。

「一ノ瀬さん。ひとつ聞いてもいいですか？」

「自分に答えられることであれば大丈夫ですけど」

「一ノ瀬さんは、クールとギャルだったらどちらがタイプですか？」

いきなり何を言っているんだ氷川さんは？もしかしてそんなことで悩んでいたんのか。

「えっと、いきなりどうしたんですか？」

「いいから教えてください」

いつにもなく真剣な顔で聞いてくる。これは冗談を言える空気じゃないな。

「自分のタイプですとやっぱりクールのほうがタイプですね」

「そう。やっぱり男の人はそちらのほうがタイプなのかしら」

「いきなりどうしたんですかこんなことを聞いてきて」

「いえ何でもありません」

「もしかして自分のタイプが気になったとかじゃないですよ」

「はあ。全く一ノ瀬さんは相変わらず勉強ができて肝心なところは抜けているのよね」

このポテト。心配してあげていたのにすぐこれだ。

「まあ一番キラいなタイプは氷川さんみたいな堅物ですけどね」

「あら、私の一番キラいなタイプも一ノ瀬さんみたいなセクハラ野郎ですけどね」

「ふん」

お互いにらみ合い顔をそらす。言わせておけば好き勝手言ってくれてこつちにも思うことはあるんだ。

「はあ」

まただ。これでこの時間だけで5回目だ。

「もうさつきからため息ばかりついて何なんですか。いつもの氷川さんらしくないですよ」

「もう無意識に出してしまうのよ」

「さつきの質問といい今日の氷川さんどこがおかしいですよ。何かあるなら話してくれませんか。これ以上ため息をつかれるのもうんざりするんですよ」

氷川さんは観念したのか口を開いた。

「実はバンドメンバーの一人が男に脅されていてセクハラ。いやそれ以上のことを受けているんです」

「どういうことですか?」

「つい先日です。メンバーの一人ボーカルの人なんですけどその人が男に因縁をつけられて呼びだされたんです。それでいやらしいことをされて今脅されている状態なんです」

「それ普通にやばいことじゃないですか。警察には言ったんですか?」

「いえ。それがどうも口止めをされているらしく、このことを他のやつにいったらどうなるかと、脅されているのです」

「ボーカルの方は大丈夫なんですか?」

「このままじゃいけないと思いメンバーと話し合った結果、今日ベースの人がその男と話し合うことになったんです」

「え!それって結構危ないことですよね」

「はい。私達も行くと言ったのですが今回の件はどうしても自分ひとりではやると言って聞かなかったんです」

「もしかして一人でその男と話し合う気じゃないでしょうね」
「そのましかです」

これが本当だとしたら結構危ないことじゃないのか。氷川さんの話を聞いている限りその男はやばいやつだつてことになる。その男とベースの人が二人つきり出会うことになればその人も危ないかもしれない。

「その二人が合うのって放課後のことですか？」

「はい。学校で呼び出して、放課後話し合うつもりだそうですね」

放課後。男女。二人つきり。これ以上危ない単語もそうないだろう。

「もしですよ。そのベースの人も男の人にやられちゃったらどうなるんですか」

「そのときは」

氷川さんは辛そうな表情で答えた。

「二人のことは諦めてもらって、私一人で満足してもらうしかないと思います」

「本気で言ってますか」

「はい。残りの二人に手を出させないためにも私がそうするしかないと思います」

「氷川さん」

氷川さんがため息を付きたくなる理由もわかる。だいたいなんなんだその男は。女子を脅迫して自分のものにするとか社会のクズじゃないか。そんなクズは早くブタ箱にぶち込まれるべきだ！

「氷川さん。その二人がどこで話し合うとかって決まっているんですか？」

「いや。まだ決まっていらないと思います。できるだけひと目がないところは避けるように言っただけなんです」

「でしたらいい場所があります」

今日自分はバイトが入っている。だからうまいことその場所にしてもらえばなんとかなるかもしれない。マスターに事情を話せば協力してくれるかもしれないしな。

「それはどこですか一ノ瀬さん」

「商店街の中の喫茶店です」

「そこなら大丈夫なんでしょうか？」

「はい。そのマスターと知り合いで事情を話せばきっと協力してくれるはずです」

「わかりました。そこにするように伝えておきます」

「お願いします。氷川さん」

クズ男が待っているよ。そう心に決意してバイトに向かった。

「よしだいたい事情はわかった」

「じゃあここを使っても大丈夫ですか」

「おう。たやすいことだ」

「ありがとうございます」

「よし、なら幸村お前はフロアーでそいつを観察してろ。俺はキツチンから常に目を光らせておく」

「了解しました」

言われた通りフロアーで待機する。やばいなんだか緊張してきた。なんとなく受けてしまったことだけど氷川さんには昨日の感謝としてこのぐらいはしてあげないと。そんな事を考えていたらドアが開

いた。

入ってきたのはいかにも今風のギャルと冴えないイケメンだった。

(この人達だな)

「いらつしやいませー。二名様でよろしかったでしょうか？」

「はい」

「奥のテーブル席にどうぞ」

チラチラと観察してみるがまだこれといって動きはない。するとまたドアが開き一人の女性客が入ってきた。

「いらつしやいませー。おひとりさまでしょうか？」

「ええ」

「カウンターの席にどうぞ」

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「コーヒー。ミルクと砂糖多めで」

「かしこまりました」

すると例のテーブルから大きな声で聞こえてきた。

「……私の体なら好きにしているから、友希那にはもう手を出さないで!!」

やっぱり本性を表してきたか！さてどうすればいい。そんなことを考えているときにカウンターの席の女性客が立ち上がった。

そのまま例のテーブルに向かって行った。

その後の事はとてもじゃないが自分の口からは言えない。ただひとつ言えることがあれば、あれは浮気現場がバレた夫のようだった。

どたばた!?!おかしなお菓子教室

今日はお菓子作り教室だ。そのためにいつもよりはやく家をでてきた。今はその準備中だ。

「それにしても定員ギリギリまで来るなんてなあ」

「あはは、そうですね。昨日の最後の方にも応募があつたみたいですし」

「まあできるだけ頑張ってみるかなあ」

つぐみさんと一緒に準備をしていると続々と人が集まってきた。するとあつという間に人で一杯になった。

「わわ、思ってたよりも人が多いよ」

「落ち着いてつぐみさん。自分たちはあくまでサポートで、わからない人がいたら声をかけていくぐらいでいいと思うから」

「はいーそうですね。昨日夜遅くまで手順も確認したし大丈夫なはずです」

そう言つて胸の前でガッツポーズをとつて気合を入れている。やっぱりつぐみさんは天使だなあ。どこかの堅物ポテトさんとは違つてほんといい子だ。

そのとき店のドアが開き見慣れた人影が視界にはいった。

「なんでここに氷川さんがいるんですか!?!」

「一ノ瀬さんこそなんでここにいますか!?!」

「ここでアルバイトをしているに決まっていますじゃないですか」

「私は今日のお菓子作り教室に参加しにきただけです」

嘘だろ。自分がしる限り氷川さんはお菓子とは最もかけ離れた人だと思ふんだけど。

「氷川さん残念ですが今日はお菓子作り教室であつてポテト作り教室ではないのでお引取りください」

「一ノ瀬さんは私のことを何だと思つているんですか!?!」

「え、だつて氷川さんお菓子なんて興味あつたんですか!?!」

「そ、それは」

「何の目的できたんですか氷川さん!」

ぐいっと氷川さんに詰め寄ると顔を赤くしてそっぽを向く。

「それにしても氷川さんがこんな可愛いことに興味を持つなんて意外でしたね」

どんどんと氷川さんが顔を赤くしていく。さていじめるのはこれぐらいでいいだろうと離れてあたりを見渡して見ると主婦の皆様方がニヤニヤしてこちらを見て、若いっていいわねー、今どき男のほうがガツガツ行くなんてやるわね、なんて会話が聞こえてきて無性に恥ずかしくなった。

「すみませんでした。氷川さん」

「一ノ瀬さんなんて知りません!!」

氷川さんは完璧に怒って行ってしまった。

「おう、幸村。女連れてきたのか」

「違いますよマスター。あの人はずただの知り合いです」

「ええーホントかよー。傍から見ると明らかにカップルの会話だったぜあれは」

「だから違いますよ!!」

「はは、まあ隠したくなる年頃なのはわかる。それが若さだもんな」

マスターは笑いながら背中をバシバシ叩いてくる。

「ほんとに違いますからね!」

「わかったわかった。まあ何にせよ知り合いなんだろう」

「・・・まあ。一応そうですね」

「ならあの子のところに行つてやれ。さつきからあの子戸惑つて何やっていいかわからないみたいだからな」

「ええ、自分ですか」

「おいおい。幸村お前があんなきれいな子のがしたらチャンスは二度と回つて来ないぞ」

「いやだから」

「いいからいけ!」

マスターは無理やり背中を押して氷川さんのところまで押し出した。氷川さんは教室にいるようにポツチスキルを発動してキョロキョロしている。

「氷川さん、どこがわからないんですか?」

「い、一ノ瀬さん!なぜここに!」

「明らかにあたりを見渡してキョロキョロしてたじゃないですか。だから仕方なく教えに来てあげたんです」

「別に何もわからないことなんてないわ。一ノ瀬さんに教えて貰うんですしたら、一人でできます!」

「なら一人で頑張つてください。自分は後ろから見守っていますから」

「そうしてください!」

そう言つて氷川さんはテーブルの上にある材料をボールに入れていく。だけど入れるたびにこちらをチラチラと見てくる。

「もうギブアップしますか?」

「馬鹿なことを言わないでください!これくらい簡単にできます」

「では次は何をするんですか?」

「そ、それは」

そろそろいいだろう。

「次はバターが白くなるまで混ぜるんですよ」
「え」

「ほら、しっかりとボールを抑えて」

「は、はい！」

やっぱり氷川さんは何でも起用にこなすな。バターを混ぜているだけなのに様になっている。

「一ノ瀬さん白くとはどのくらいですか？」

「そうですね」

氷川さんの後ろに回り込んで手を重ねて一緒にかき混ぜる。

「い、一ノ瀬さんなにを!？」

「いいからしつかりとバターを見てください」

「は、はい」

それから2分ほどかき混ぜたらだいぶ白くなってきた。

「このくらいでいいですよ氷川さん。これがバターの白です」

「そ、そうですね。ありがとうございます」

「では次は生地を混ぜます。氷川さんどうかしたんですか？」

「い、いえ何でもありません。次は生地ですね。わかりました」

やけによそよそしいと言おうかどうしたんだろうか。

「このくらいで大丈夫ですか？」

「そのくらいで大丈夫です。そしたら次は冷蔵庫で30分ほど冷やしましょう」

「30分ですね。わかりました。では、冷蔵庫に入れてきます」

そのまま氷川さんはそくそくと冷蔵庫まで行ってしまった。

さてとテーブルの上でも片付けておこうかな。

「ただいま戻りました」

「おかえりなさい氷川さん。次はテーブルの上を片付けてもらっていいですか」

「はい。わかりました」

これと言った会話もなく片付けていく。すると氷川さんの手に少しあたってしまった。

「きゃっ！」

「氷川さん！大丈夫ですか!？」

「な、なんでもありません。ただボールを落としてしまいました」「自分が拾いますよ」

そう言っつてしゃがんだときに滑ってしまい氷川さんの方に倒れこんでしまった。

「いったた。怪我はないですか氷川さん？」

「だ、だだ、大丈夫です」

今、自分は氷川さんに床ドンをしてしまっている状態だ。や、やばいやられる。とっさに目をつぶるがいつまでたつても頬に痛みが来ない。目をゆっくり開けてみると、顔を真っ赤にして見つめられていた。

「す、すみません。すぐどきます」

「は、はい」

先に立ち上がって氷川さんの手を掴み起こしてあげる。

「本当に大丈夫ですか？」

「は、はい。一ノ瀬さんが倒れてきたときはびっくりしましたが大丈夫です」

「なら良かったです」

その気まずい雰囲気のまま30分ほどチラチラと見つめ合っていた。

「一ノ瀬さん持ってきました」

「そうですか」

「それでこのあとはどうすればいいんでしょうか？」

「次はこの生地を伸ばしていきます」

「わかりました」

きき、気まずい。さっきのことがあってからお互いなんとなく顔を合わせづらい。

「一ノ瀬さん。厚さはどのくらいでしょうか？」

「そうですねだいたい5mmほどです」

「5mm・・・？さて、どうしたのか？」

「どうしたんですか？」

「一ノ瀬さん、定規はありますか？」

何を言い出しているんだこの人は。

「なんで定規を？」

「だって定規がないと5mmがわからないじゃない」

「大体で大丈夫ですよ」

「いえだめです！少しでもずれていたら大変じゃないですか!!」

なんだろう最近少しずつ氷川さんがポンコツになってきている気がする。

「自分が見ていますからとりあえずやってみてください」

「はあ、わかりました」

氷川さんは渋々と言った感じで生地を伸ばしていく。

「そのくらいで大丈夫です」

「このくらいが5mmですか。だいたいわかりました。そうしたら次はなにをすればいいのかしら？」

「次は型抜きを使って、生地を切り取っていきます。型はどれにしますか？」

「そうね。これにするわ」

「わかりました。じゃあ切り取ってください」

「はい。わかりました」

氷川さんは真剣な表情で型を切り取っていく。

(それにしても疲れたな)

どんなことに対してでも真面目というか。肩肘が張っているというか。

「……ふう。できました」

「なかなかキレイじゃないですか」

「ありがとうございます」

「次はこのクッキングシートに並べてオーブンで焼きましょう」

「わかりました。では、並べてオーブンで焼いていきますね」

氷川さんはこれまた丁寧に並べてオーブンに持っていった。

「ただいま戻りました」

「ちゃんとセットできましたか?」

「はい。170度で20分、でよかったですでしょうか?」

「はい大丈夫です」

「それじゃあ洗い物でもしましょうか」

「はい、わかりました」

そのまま会話もなく洗い物をしていく。さつきから氷川さんの顔を見るのが妙に恥ずかしい。氷川さんもそうなのかさつきから顔を合わせないし。

(あーもう。なんなんだよこの空気は)

「あの、一ノ瀬さん」

「え、どうかしたんですか氷川さん」

「えっと今日はありがとうございます」

「なんで急にお礼なんか」

「きつと私一人ではここまでこれなかったでしょうから。だから一ノ

瀬さんには感謝しています」

「そ、そうですね。わざわざありがとうございます」

その後は会話もなく過ごした。

「それで最後はどうするんですか？」

「最後は仕上げのアイシングをやりませう」

「アイシングですか。難しそうですね」

「そんな事ないですよ。砂糖と着色料を混ぜたものを使って、このクッキーに絵を描くだけですから」

「わ、わかりました。やってみませう」

「氷川さん調子はどうですか？」

「今は、ギターの詳細な部分を書こうとしているのだけれど……。難しいわね」

「ギターですか。氷川さんらしいですね」

「こつちのは犬と猫ですか？」

「はいそうです。ですが目や鼻のバランスが難しく、少し歪な顔になってしまいました……」

「そうですか？普通によく描けるとは思いますけど」

「あ、ありがとうございます」

「やっぱり犬好きなんですか？」

「ち、違います。たまたま犬の型があったので選んだまでです」

「……そうなんですか」

「誰かに送るつもりですか？」

「ええ、一応バンドの練習中に差し入れとして持っていこうかと」

「もしかして、そのために今日この教室に来たんですか？」

「はい、そうです。練習中にお菓子でもあればリラックス効果がある
と思います、今日ここに習いに来たんです」

「そうだったんですか」

「・・・できた。どうでしょうか」

「うん。いい感じだと思いますよ」

「それじゃ、最後の仕上げにクツキーをラッピングしましょう。袋と
かりボンはここにがあるものを使ってください」

「わかりました。・・・このリボンの色・・・素敵ね」

「ああ、それはこないだ自分が買い出しに行ったときに買ったもので
すね」

「そ、そうですか。これを一ノ瀬さんが」

氷川さんはそのリボンでラッピングをしていった。

「お疲れ様です。なんとか無事に終わりましたね」

「ええ、一ノ瀬さんもありがとうございました。一ノ瀬さんのおかげ
でなんとか作ることができました」

「それじゃあまた明日学校で」

「・・・」

「どうしたんですか。もしかして忘れ物とか」

「い、いえ違います」

「そしたらなにが」

すると氷川さんは顔を赤くしてさつき作っていたギターの形をし
たクツキーを突き出してくる。

「えっとこれは」

「良ければ受け取ってください!!」

「いいんですか？」

「はい。こないだのことや今日の感謝の気持ちです」

「そうですか。ありがとうございます」

「それではまた明日」

そのまま氷川さんは逃げるように帰っていった。平然を装ってい

たが心臓の鼓動が早くなっている。
そのまま袋を開けて食べてみたがとても甘く感じた。

テニス

ひとりぼっちで困ることランキングで圧倒的1位に輝くことはなにか？それは体育でペアを組めを言うことだ。今日はそんな最悪な体育の時間の一部をお見せしよう。

「よし。じゃあ、いま説明したことをペアでやってみて」

「はいー」

先生のその号令でみんながペアを組んでいく。その中で自分は隅っこのほうでぼつんと立っている。そもそもなんで男女一緒に体育をやっているのか。お隣の羽丘では男子の人数が少なくても男女別でやっているらしい。なのにうちは男女一緒にやっている。

おとなしく壁打ちでもしておくか。そう思いテニスコートを出ようとしたら、声をかけられた。

「一ノ瀬さんどこに行こうというのですか？」

「はあ、出ましたね氷川さん」

「出ましたね、じゃありません。どこに行こうとしたんです」

「どこって、外の壁で壁打ちでもしようとしたんですよ」

「さっきの話を聞いていなかったんですか。ペアを組んで練習をしないと言われましたよね」

「ですから、そのペアがないんですよ」

「それならここにいないじゃないですか」

そう言っつて氷川さんは胸を張った。

「いや、氷川さんにそんな迷惑はかけられません。なので自分はおとなしく壁打ちでもしてますね」

「だめです！一ノ瀬さんは私と組むことは確定です」

「いや、だからなんで自分が氷川さんと、いやもしかして氷川さん組む相手がいなくて余りたくないから自分と組もうとしているんですか？」

「そ、そんなわけないじゃないですか。それこそ一ノ瀬さんの妄想に過ぎません」

「素直に認めたら組んであげてもいいですよ」

「だから私は別に」

「なら自分は行きますね」

「待ってください!!」

「なんですか本当に氷川さんは」

「なんでいつもそんな意地悪するんですか」

下を向きポツポツと言った。

「いや別にいじめてなんか」

「嘘です。そうやって一ノ瀬さんは毎回毎回私のことをいじめて楽しんでいます」

「そんなことは」

「最低です。一ノ瀬さんは」

氷川さんは下を向いて顔を覆ってしまった。心なしか肩も震えている気がする。まさか泣いている。いや氷川さんに限ってそんな事はないはず、だと思いたい。

「まあ自分もこのまま授業に参加しないのは心もとないので組んであげますよ」

「本当ですね」

「本当ですよ」

「では、行きましょう!!」
「は?」

氷川さんはさっきのことがなかったかのようなとびきりの笑顔で自分の手を掴み引つ張って行く。

「ちよ、ちよっと待ってください。氷川さん泣いていたんじゃないんですか?」

「私が泣くことなんてありません。いつもいじめてくることに対するほんの仕返しですよ」

この堅物ポテトはほんとになんなんだ。でも最近は氷川さんといてもそんなに悪い気分にならなくなってきた自分が出た。

「いきますよー。一ノ瀬さん」

「はい。いつでもいいですよ」

そうやって氷川さんはボールを打ってくる。ボールの着地点に入りラケットを振りかぶる。だがいつまでたってもボールを打った感触はこない。

不思議に思い後ろを見るとボールがテニスコートの後ろでバウンドしていた。

「なにやっているんですか一ノ瀬さん」

「いや打ったはずだと思っただけですけど」

「次は一ノ瀬さんが打ってください」

「いきますよー」

おもいつきり打つがボールが氷川さんのところまで届くのもまでツバウンドしてしまった。

すると氷川さんはこちらの方までボールを持ってやってきた。

「一ノ瀬さんもしかしてなんですけど運動できませんね」

指摘されたとき心臓がどきりと跳ねた。

「そ、そ、そんなことあるはずないですよ」

「一ノ瀬さんあなた勉強以外は点でダメなんですか」

「・・・そうですよ。自分は勉強以外できませんよ」

「ふふ、そうですね。一ノ瀬さんも可愛いところがあるわね」

バカにされている。絶対に馬鹿にされている。

「まあ、勉強は氷川さんに負けませんが」

「そうですね。私は一ノ瀬さんに勉強はまだ勝てません。けどスポーツは負けません」

「クツキーも作れない人が何を言っているんですか」

「クツキーぐらいもう作れます」

「怪しいですね。氷川さんのことですからもう作り方も忘れていないんですか」

「ふん」

そのまま言い合っていると先生からの号令がかかり集合となった。

「じゃあ、今組んでいたペアと一緒にダブルスをしてねー」

試合だと。無理だ。さっきのでわかったと思うが自分ではてんで運動ができない。なのに氷川さんと組んで試合をしろだと。

「いきますよ一ノ瀬さん」

氷川さんは自信満々といった感じで張り切っている。

ああ、なんでボッチの体育はこんなに時間が経つのが遅く感じるのだろうか。

「ほら一ノ瀬さん早く来てください」

「はいはい。わかりましたよ」

対戦相手は自分と氷川さんと同じで男女のペアだった。その男子

はクラスで自分以外の唯一の男子生徒だった。

(いやこの人絶対に自分と違って運動バリバリできるタイプじゃん。身長も高いし)

「よろしくおねがいますね。白金さん」

「は、はい。こちらこそお願いします氷川さん」

「えっとお願いしますね」

「ふん。バカップルが。せめて見えないところでいちゃついてろ」

「バ、バカップル」

な、なんだと。誰がバカップルだ！いいかげんにしろよ。なんて言えるはずもなく試合は始まった。

「いいですか一ノ瀬さんははつきり言って戦力外なのであなたは前の方でラケットを構えているだけでいいです」

「わかりましたよ」

ここで反論するほど馬鹿じゃない。ここはおとなしく氷川さんの支持に従う。すると向こうも同じなのか女子のほうがネットの前に立っていた。

「……………」

き、気まずい。直感でわかった。この人もボッチなのだ。おそろく向こうの人もわかっているはずだ。

仕掛けるか。

「えっと、お互い大変ですね」

まずは軽いジャブを仕掛けてみる。どう出てくる。

「は、はい。……………そうですね」

「……………」

なん……………だと。まさか軽く受け流されるとは。

それにしてもこの人どこかで見ることがある気がする。じつと顔を見つめていると向こうも視線に気がついたのかさつと目をそらされた。そうだこの人はたしか。

「えっと、もしかしてバンドとかやってたりしますか？」

「！」

ステルスを見つけられたかのような勢いで驚かれた気がした。

「それも氷川さんと同じバンドとかですよね？」

「は、はい。そうです。キーボードをやっています」

「ホントですか！いやーまさかこんな近くにRoseliaのメンバーがいるなんて。あ、こないだのライブ行きましたよ。キーボードの全体をまとめる力って言うんですかね。とにかくすごかったです！」

「あ、ありがとうございます」

そのとき頭に強い衝撃が走った。そのまま意識がおちるように倒れた。

ラケットをしつかりと握り直す。さて相手の方も白金さんを前衛に配置しましたか。まあ普通ならそうでしょう。これは事実上私とあの方との一騎打ちというわけですか。

「ふっ」

速い。なんとか打ち返す。だけど甘く入ってしまいチャンスボールになってしまう。そのスキを逃さず逆サイドに決められる。

「ここまでやるなんて。さすがは男子と言ったところでしょうか」

「あんたもやるな。俺の本気のサーブを女子で返すやつなんて初めて

だ」

「そうですか」

「悪いが本気でいかせてもらう」

「ええ、こちらにも本気でいきます」

それから壮絶なラリー合戦となった。取られては取り返す。その繰り返しだった。

「よしー！」

なんとかこのゲームを奪いこちらのサーブゲームとなる。

「ハッ」

渾身の力でサーブを打つ。だけれどそれすらも対応されて軽々と打ち返される。そこからは先程のようにラリー合戦となる。

(それにしても一ノ瀬さんは何をやっているのかしら)

ふと一ノ瀬さんの方を見ると、白金さんと楽しそうに話していた。

(な!!)

そのスキをつかれて決められる。

「しまったー！」

(落ち着いて氷川紗夜。そうよただ白金さんがしようがなく話に付き合ってくれているだけ)

深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

(よしーいける)

その時ふと、二人の会話が聞こえてきた。

「ホントですか！いやーまさかこんな近くにRoseliaのメンバーがいるなんて。あ、こないだのライブ行きましたよ。キーボードの全体をまとめる力って言うんですかね。とにかくすごかったです！」

は？なにを言っているのかしら一ノ瀬さんは。こないだは私のギターが一番とか言っていたくせに。そう思うと段々とイライラしてきた。

ボールを高く投げおもしろいっつきり打つ。するとそれは一ノ瀬さんに吸い込まれるかのように直撃した。

・・・ハッ！い、いや私は悪くないわ。そうよ一ノ瀬さんが白金さんにセクハラをしないように止めただけ。

そのまま試合は中断となり、そのまま一ノ瀬さんをおんぶして保健室まで運んだ。

学食

「ここは」

あたりを見渡してみるとそこは保健室だった。

「確か体育の授業でテニスをやっていて、それから」

何があったのか思い出そうとすると頭に痛みが走った。

「そもそも今は何時だ」

スマホを取り出し時間を確認する。時間は十二時を少し回ったところだった。

「起きたわね」

するとレースカーテンが開かれた。

「氷川さんなんでここに？」

「一ノ瀬さんが急に倒れたから運んできたんです」

「そうだったんですか。それはありがとうございます。なんで自分は倒れたんでしょうか？」

その質問をすると氷川さんはバツが悪そうな顔をして答えた。

「えっと急に倒れたんですよ。全く一ノ瀬さんは体が弱すぎます」

自分で倒れたか。確かに直前の記憶が無いのであれば氷川さんが言っていることが正しいのだろう。

「えっと重くなかったですか？」

「それについてなんですけど、一ノ瀬さんは体重が軽すぎます。ちゃんと食べているんですか？」

確かに自分は身長割に体重は軽い方だと思う。だけどけして食べていないというわけではない。

「違うんですよ。いくら食べても食べても太らんですよ。太れるなら太りたいもんですよ」

「太れるなら太りたいですって」

氷川さんが震える声で言う。やばいこれは地雷を踏んだ。

「一ノ瀬さんそんなことは女性の前で言うもんじゃないです。いいですか私はライブ前になるといつもあまり食べすぎないように心がけているというのに、なんですか食べて太らない。そんなことを軽々し

く口にしてほしくありませんね」

「は、はい。すみませんでした」

「私じゃなければしばき倒されるところですよ」

「で、でも氷川さんは全然太っているように見えませんよ」

「嫌味ですか」

「いや、本当ですって。ライブのときも見ましたけど氷川さんの体型はモデルさんみたいでキレイですよ」

「お世辞は結構です！」

「お世辞じゃないですよ。氷川さんは本当に魅力的な人だと思いますよ。性格を除けばめっちゃタイプです」

「本当に一ノ瀬さんはいつも一言多いわね」

「それほどでも」

「はあ、もうわかったからいきますよ」

「行くってどこに？」

「このままじや昼休みも終わってしまうわ」

「それはそうですけど」

「いいからついてきなさい!!」

「わかりましたよ」

　　澁々氷川さんのあとについていった。

「ここは」

「何をしているの早く入るわよ」

氷川さんに連れてこられたところ、そこは食堂だった。

「嫌です！ここに入るとか死ぬとおんなじことですよ」

「食堂に入って死ぬなら、私はとつくに死んでいるわよ」

「氷川さんもわかるでしょう。ポッチの食堂がどれだけ辛いことか」

「あら、私は別に平気だけれど」

なん・・・だと。嘘だろ、氷川さんなんていう精神力をしているんだ。

「それじゃあ、一人でごゆっくり」

そのまま回れ右をして逃げようとしたら腕を掴まれる。

「ほら行くわよ」

「わかりましたわかりましたから手を離して」

「離すとどうせ逃げるでしょう」

「逃げませんで！」

氷川さんはわかっていない。そもそもこの花咲川は共学化したばかりだ。そうなると必然的に男子が少ない。だからこんな場所では嫌でも目立つ。恋愛大好きな女子高生の中に手をつないだ男女が突入していく。そうなるとどういう目で見られるかわかるだろう。

「一ノ瀬さん？さっきから黙り込んでどうかしたんですか？」

「氷川さんのアホ」

「ついに頭がいくれましたか」

「もう好きにしてください」

「はあ。ならそうするわ」

そのまま氷川さんはズンズンと券売機の方まで突き進んでいった。

「一ノ瀬さんは何が食べたいですか？」

「もう何でもいいです」

「何でもいいが一番困るんです。早く教えてください」

「じゃあ、日替わり定食Aで」

「わかりました」

氷川さんはそう言うのと券売機に硬貨を入れて日替わり定食Aを2つ押した。

「どうぞ」

「いや受け取れませんよ。今払いますね」

財布を取り出そうとすると遮られた。

「お金は結構です。ほんの私の気持ちです。受け取ってください」

「いやそれは氷川さんといえど悪いですよ」

「いいから受け取りなさい!」

有無も言わせない迫力で食券を渡してきた。

「なんですかなにか後ろめたいことでもあるんですか?」

「そ、そんな事ないわよ。全く一ノ瀬さんは人の好意も素直に受け取れないのかしら」

これは絶対になにか隠しているな。でも直感が知らないほうが幸せだと告げてきている。

「ならありがたくいただきますね」

「最初からもらっておけばいいのよ」

そのまま二人で列に並び定食を受け取る。さて問題はここからだ。昼休みも半分を過ぎている。そんな中で今から空いている席を探すなんてことは不可能だ。

「困ったわね」

「だから言ったじゃないですか。ポッチがむやみに食堂に手を出すとこうなると」

「少し黙っていなさい」

酷い。最近氷川さん自分の扱い雑になってきてないかな。

「あれは」

「何かありました?」

「一ノ瀬さんついてきてください」

氷川さんについていくとそこにいたのはピンク色の髪の人と金髪の人がいた。

「こんにちわ。丸山さん白鷺さん相席しても大丈夫でしょうか?」

「紗夜ちゃんどうしてここに?」

そう言うと金髪の人と目が合った。

「ふーんそうゆうことね。ええ大丈夫よ。一緒でもいいわよね彩ちゃん」

「うん！もちろんだよ。紗夜ちゃん一緒に食べよう」

「ありがとうございます。ほら一ノ瀬さんも挨拶して」

「えっと一ノ瀬幸村です」

「そっか幸村くんかよろしくね!!」

「可愛い」

「えっ」

すると頭に鋭い痛みが走った。

「何するんですか氷川さん!？」

「いきなりセクハラをする人がいますか」

「ただ可愛いと言っただけじゃないですか!」

「それがセクハラだと言っているんです」

「もしかして嫉妬ですか」

「そんなわけないじゃない!!」

「二人は仲がいいのね」

「白鷺さん断じて違いますよ。こんな人とは仲がいいはずありません」

「ふーん。そうなのね」

なんとなくだがこの人はやばい氷川さんとか言う次元じゃなくやばい。きつと逆らったらクビが飛ぶだろう。

「紗夜ちゃんはなんで今日食堂に来たの?」

「いつもと違ってもいいのではないかと思っできてみたんですけどやっぱり疲れますね」

「さながら彼氏と学食で食べようって話じゃないのかしら」

「か、彼氏。だからまだ彼氏ではありません!!」

「まだ、なのね」

「ち、ちがいますよ。こんな人を彼氏にするぐらいだったら一生独身のほうがましです!」

「本人を目の前にしてそこまで言いますか」

「一ノ瀬さんも否定してくださいよ!」

「いや、自分は別に構いませんよ」

「／／／なっ／／／」

「嘘です」

「もう知りません!」

氷川さんは怒ってしまったのか黙々と食べ始めた。

「すみません氷川さん。だから機嫌を直してくださいよ」

「フン!」

こうなった氷川さんはもう時間が経つまで機嫌が治らない。そのまま自分も食べ始めた。

「あれ、氷川さん人参ばっか避けてどうしたんですか?」

「別になんでもないわよ」

「もしかして人参嫌いとか」

「人参くらい食べれます!」

そのまま氷川さんの皿から人参と取り上げる。

「ほら、なら食べさせてあげますよ。あーん」

「な、何をしているのーノ瀬さん!」

「人参くらい食べられるんでしよう。なら食べさせてあげようと思つて」

「一人で食べれます!」

「いいから遠慮しないで。あーん」

「くっ、覚えておきなさい」

氷川さんは涙目になりながら人参を口に入れた。

「どうですか?」

「お、おいしいわ」

「そうですかまだたくさんあるので遠慮しなくてもいいですよ」

「い、いや」

このときの自分はいつもの昼食と違い少しテンションが上がっていた。まさかあんなことになるなんて思いもしなかった。

「じゃあ、一旦休憩ね。各自水分補給をしっかりとすること」

「「はい」」

やっと休憩だよ。スマホを開いてSNSを開く。丸山彩、と調べが特にさつきと同じで変化がなかった。

(それにしても昼休みはすごかったな)

紗夜ちゃんがあんなにうろたえているところ初めてみたかも。

スマホのアルバムを開いてみる。

(これとか完璧だよね)

それは幸村が紗夜に無理やり人参と食べさせている写真だった。

「あくやちゃん何してるの?」

「ひやう」

「あはは、ひやう、だつて変なの〜」

「もう日菜ちゃんびつくりさせないでよ!」

「ごめんごめんそれで何見てたの?」

「な、なんでもないよー」

「ふーんそう」

危ない危ないこんなの日菜ちゃんに見られたらと思うとゾツとする。

「えい」

「あ、まって日菜ちゃん」

「.....」

「日菜ちゃん。ど、どうしたのかな?」

「彩ちゃんなにこれ?」

「ひい」

「答えて彩ちゃん」

「えっと、それは」

「これお姉ちゃんと誰？」

「えっと」

「えっと、じゃなくて教えてよ！」

「・・・れ」

「何？」

「紗夜ちゃんの彼氏じゃないのかなあ」

「嘘でしょ」

「私も詳しいことわからないから」

「本当に？」

「本当だよ」

「ふーんなら自分で確かめてみるしかないね」

「えっと日菜ちゃん？」

「はい！彩ちゃんありがとう」

「えっとどういたしまして？」

久しぶりにるんってこないなあ。

お姉ちゃん待っててね。

胸の違い

「はい。今日はこれで終わりだからみんな気をつけて帰るのよ」
そう言つて先生が教室から出ていくと教室が一斉に騒がしくなる。
さて帰るか。ボツチのやつは早く帰るのは基本中の基本だからな。
すると校門前で見知った顔が見えた。

「帰りますよ」

氷川さんはそう言つて自分の隣に並んでくる。

「そうですね。じゃありませんよ！なんで自然と横に並んでいるんですか!？」

「別に一緒に帰ることぐらい何も問題じゃないでしょ」

たしかにそうだがなんだか釈然としない。

お互い会話もなく夕焼け空の下ならんで歩く。おかしいいつもならお互いの悪口でも言い合っている頃なのに。

「最近バンドの方はどうなんですか？」

氷川さんはそうね、とつぶやきながら答えた。

「最近はずさんの雰囲気少し優しくなった気がするわね」

「湊さん？」

「ボーカルの人よ」

「ああ、あの人ですか」

あの怒らすととんでもなく怖いというイメージしかないのだけけれど。

そんな話しをしていると駅前の方まで来てしまった。

「それじゃあ、自分は本屋にようがあるのでこれで」

「まって」

その言葉と同時に袖を掴まれる。

「どうしたんですか？」

「私も一緒に行つてもいいかしら？」

「え」

「別に構いませんけど、なにか用事でもあつたんですか？」

「用事がないとついていっっちゃいけないのかしら？」

「いやそんなことは」

何だ今日の氷川さんは少しおかしい気がする。

「ならいきましようか」

「ええ」

参考書のコーナーを見て回る。だけど目星をつけていたものはなく特に目を引くものもなかった。別に今日はいいか。そんなことを思い帰ろうと考えていると後ろから声をかけられた。

「目的のものはありませんか?」

「氷川さん。いえ、これと言って特にはなかったです」

「そうですか」

「帰りましようか」

「あ、それならよっていきたい場所があるんですけどいいですか?」

「はあ、最初からそんな気はしていましたよ。それでどこにいきたいんですか?」

「いいからついてきてください」

そのまま氷川さんのあとについていくとそこはゲームセンターだった。

「意外ですね氷川さんがこんなところに連れてくるなんて」

「別にたまにはいいでしょう」

「それで何がしたいんですか」

「そうですね。あ、あれにしましょう」

氷川さんがそう言って指を指したのはホッケーのゲームだった。

「わかりましたよ」

「悪いけど本気でいかせてもらおうわ」

「それはこちらのセリフです。いつもの鬱憤をここではらさせてもらいますよ」

「いくらなんでも弱すぎじゃないですか?」

「はあはあ、自分は決して弱くはないです。はあ、氷川さんが強すぎるだけです」

「別にもう一回してあげても構いませんよ」

「いや結構です」

「あら、逃げるんですか」

「勝ち目がない勝負を挑むよりも少しでも勝率がありそうなものに変えるだけですよ」

「へー、何なら私に勝てるというのですか」

「そうですね」

一通りゲームセンターの中を見渡してみるとちやうどいいいいゲームがあった。

「あれなんてどうでしょ」

そう言って指をさしたのはクイズゲームだった。

「クイズゲームですか。正直に言ってホッケーよりも勝ち目がないと思うんですが」

「一回でも自分にテストで勝ってから言っただけですけどね」

その事を言うと氷川さんは驚いた表情をした。

「へえ、言うじゃないですか。そこまで言うのなら自信はあるのでしょうかね」

「当たり前ですよ」

「後悔しないように」

二人で席に並んで硬貨を入れる。

「ジャンルはどうしますか？」

「別を選ばせてあげるわよ」

「その余裕な顔ひっくり返してあげますよ」

「勝った」

よし！なんとかギリギリだったけれど勝てた。最終問題まで取って取られての繰り返しだったからな。最後に得意な世界史の問題が来たのがラッキーだったな。

「まさかここまでやるとは」

「ふん、伊達に学年一位は名乗っていませんよ」

「どうやらそのようですね」

「どうしますもう一回やりますか？」

「いえこれくらいでいいでしょう」

おかしいな負けず嫌いな氷川さんなら絶対にリベンジしてくると思っただのに。

「さて、そろそろいい時間ですし行きますか」

スマホの時計を見てみると時間は午後六時を回ったところだった。

「そうですね。そろそろいい時間ですし帰りますか」

二人でゲームセンターを出ると太陽がもう少して沈むというところまで差し掛かっていた。

「それじゃあ、このへんで」

「お腹が空きました」

よし面倒になる前に帰ろう。そう思いダツシュを決めようとしたときに肩を掴まれる。

「お腹が空きました」

「そうですね。なら早く帰ってご飯食べなきゃですね。それじゃあ」

「お腹が空きました」

「はあ、わかりましたよ。どこにいきたいんですか？」

「そうですね。あそこなんてどうでしょうか？」

そう言つて氷川さんが示したのはファーストフード店だった。

「なんとなくわかっていましたよ」

「なら話ははやいですね。ほら行きますよ」

「わかりましたからそんなに急がないでくださいよ」

ほんとポテトのことになるとポンコツになるんだから。そんな事を考えながら歩いて行つた。

「おまたせしました」

ドン！とテーブルから聞こえてきそうなぐらいにトレーにポテトが乗っていた。

「相変わらず凄いですね」

「そんな事ありません。普通ですよ」

これが普通なら人類の体重が大変なことになると思うんですけど。

「相変わらずポテト大好きなんですね」

「はい。そうですよ」

「そうですか」

そのまま氷川さんは高速で食べていく。相変わらずどうなっているんだこの人は。

「氷川さんひとつ聞いてもいいですか？」

「別にいいですけど」

「氷川さん。いえ、あなたは誰ですか？」

すると氷川さんの手が止まった。

「何を言っているんですか？」

「そのままの意味です。あなたは誰ですか。」

「私が氷川紗夜ですよ」

「まだいいですか。ならあなたが氷川さんじゃない理由を言ってあげまじょう」

「……」

「1つ目。いつも言い合いをするのに今日はひとつもなかった」

「……」

「2つ目。氷川さんなら絶対に放課後ゲームセンターなんかには寄り

ません」

「……」

「3つ目。クイズゲームに負けたときにリベンジをしてこなかった。負けず嫌いな氷川さんならありえませんが。」

「……」

「4つ目。あなたは自分の目の前でポテトが好きだと言った。これも無駄にプライドがある氷川さんならありえませんが。」

「……」

「5つ目。あなたは今日。自分の名前を一回も呼んでいなかった」

「……」

「そして6つ目。これが一番の理由です。本物の氷川さんはそんなに胸は大きくありません」

「……」

「これらのことをもってしてもまだ違うと言いますか？」
「どうやらここまでかー」

そう言つて眼の前の氷川さん？はかぶっていたウィッグをとった。

「あなたは……誰ですか？」

「氷川日菜。これでわかるかな」

氷川日菜。氷川だとすると妹か姉というわけか。

「なるほど姉妹さんですか」

「あつたりー」

日菜さんはしてやったりといった顔で言ってくる。

「それで変装までして自分に何のようですか」

「むー。まずはあなたの名前を教えてよ」

「そういえばまだ名乗っていませんでしたね。自分は一ノ瀬幸村。氷川さんとはクラスメイトです」

「ふーん。幸村くんかじゃあ、ユツキーて呼ぶね！」

「……好きにしてください」

「それで私がこんな事した理由なんだけど」

「そうですよなんでこんな事したんですか」

するとニコニコしていた雰囲気の日菜さんからなくなり、変わりに

ドス黒いオーラが出てきた。

「ユツキーさ、お姉ちゃんとはどんな関係なの？」

何だこのプレッシャーはとてもじゃないが人が出しているものじゃない。

「えつと、さつきも言いましたけどクラスメイトですよ」

「嘘はつかないで!!」

そう言っただ菜さんは机を殴る。これはまずい。下手をすれば殺られる。

「えつと何が言いたいんですか」

「まだ白を切るんだ」

「だから何のことですか」

すると日菜さんはスマホの中の一枚の写真を見せてきた。それは昨日の食堂で氷川さんが無理やり人参と食べさせられている写真だった。

「どこでこれを」

「知り合いからもらったんだよ」

「お姉ちゃんが人参が嫌いなことは知っているよね」

「……」

「答えて!!」

「は、はい」

「なのになんでこんな事してるの？」

「ここで選択肢を間違えれば終わる。慎重に選ぶ。」

「えつと、それは氷川さんが苦手を克服したいと言ってきてその手伝いをしたんです」

「ふーん。そうなんだ」

よしひとまずセーフ。

「それじゃあもう一回聞くけどお姉ちゃんとはどんな関係なの」

「……」

「氷川さんとは友達ですよ」

「本当に？」

「本当です」

嘘は言っていない。氷川さんから自分のことは友達だと言ってきたからな。

日菜さんはじつと目を見つめてくる。

「嘘は言っていないみたいだね」

セーリー。なんとか一命はとりとめたか。

「今日はここまでにしておいてあげるけど今度お姉ちゃんになにかしたらわかってるね」

「そんな酷いこと自分がするわけないじゃないですか」

「そっかなら安心！」

さつきまでのプレッシャーはどこにいったのかさつきのニコニコした日菜さんに戻った。

「それよりもさ、学校でのお姉ちゃんってどんな感じなの！」

「どんな感じて言われても話してないんですか」

そのことを聞くと日菜さんは明らかに落ち込んだ様子で答えた。

「えっとお姉ちゃんも私も忙しいからさ」

「そうなんですか」

「だからさ学校でのお姉ちゃんの話聞かせてよ！」

「そうですね」

それからは日菜さんに氷川さんの話をした。

「あはは、ユツキーって面白いね」

「そんな事ないと思いますけど」

「お姉ちゃんがユツキーのこと気に入る理由もわかるなあ」

「別に気に入られてないと思いますけど」

「ええー。話を聞いてたら絶対にお姉ちゃんユツキーの事大好きだつて」

「そんなこと、天地がひっくり返ってもありえませんよ」

「そろそろ帰りますか」

「うん。そうだねー」

「それじゃまた」

「うんまたねー。ユツキー」

日菜さんはそう言ってブンブンを手を振ってきた。なんだろう最

後に氷川さんの話をしたら心なしか日菜さんになつかれた気がする。
それにしても氷川さんに妹がいるなんてな。しかも全然似てない。
そんな事を考えながら家に帰った。

制裁

日菜さんと色々あった翌日学校に行くとき校門前で仁王立ちしている人がいた。それは氷川さんだった。何をやってるんだろう。

「おはようございます。氷川さん。朝から何をやっているんですか？」

「あら、ようやく来たわねーノ瀬さん」

そう言つてバキボキと指を鳴らす。

「えつとどうしたんですか？」

「あなた昨日の放課後何をやっていましたか？」

まさか日菜さん昨日のことを話したわけじゃないよな。

「えつと昨日は放課後真つ直ぐに家に帰りましたけど」

「なるほど真つ直ぐに家に帰ったのね」

「はい。もちろんです」

「ならこれはどうゆうことかしら」

そう言つて氷川さんが見せてきたのは昨日の日菜さんと話している時の写真だった。

「ど、どこでこれを」

「それは昨日のバンド練習の帰りのことです」

「それじゃあ私はこっちなので」

「うんまたね〜紗夜」

みんなに別れを告げて一人になる。その瞬間ある目的地の場所まで早足で向かう。

「ポテトLサイズ3つで」

「はい。かしこまりました」

ああ、早くこないかしら。練習帰りのポテトは何よりも楽しみなんだから。

「おまたせしました」

「はい。ありがとうございます！」

ポテトを受け取りいつもの席につく。ここなら誰か来ても見つからないし安全だわ。

「いただきます」

山の中から一本を掴み口まで運ぶ。するとココ最近の一ノ瀬さんへのストレスやその他諸々が解消されていくのがわかる。

（ああ、やっぱりこの時間が一番の至福ですね）

そこからは流れ作業のようにポテトを口に運ぶ。ものの五分で食べ終わった。

そろそろ帰ろうかしらと席を立とうとしたときに店の入口が開いて見知った顔がいた。

（あれは一ノ瀬さん。なぜここにいるのかしら）

しかもその横にいたのはどう見ても日菜だった。

（あの子何やっているのかしら。ウィッグまでつけて）

そして二人は注文を頼むと適当な席につき会話をしだした。

その光景を見たときに何故かイライラした。それは一ノ瀬さんがなぜ日菜といえるかと言うものよりも日菜のことを私だと思っていることに腹がたった。

（絶対一ノ瀬さんのことだから私と日菜の区別なんてついていないわよね）

そつと近づき二人の会話を盗み聞く。

「氷川さん。いえ、あなたは誰ですか？」

え、まさか一ノ瀬さん私じゃないと気がついたの？いつもの一ノ瀬さんなら絶対に気がつくはずなのに。

「まだいいですか。ならあなたが氷川さんじゃない理由を言ってあげましょう」

ぐくくりと喉を鳴らす。

「1つ目。いつも言い合いをするのに今日はひとつもなかった」

「2つ目。氷川さんなら絶対に放課後ゲームセンターなんかには寄りません」

「3つ目。クイズゲームに負けたときにリベンジをしてこなかった。

負けず嫌いな氷川さんならありえませんが」

「4つ目。あなたは自分の目の前でポテトが好きだと言った。これも無駄にプライドがある氷川さんならありえませんが」

「5つ目。あなたは今日。自分の名前を一回も呼んでいなかった」

す、すごい。一ノ瀬さんがまさかこんな注意深く私のことを見ているなんて。そう考えると少し胸がドキドキした。

「そして6つ目。これが一番の理由です。本物の氷川さんはそんなに胸は大きくありません」

あ？

何を言っているのかしら一ノ瀬さんは。さっきまで少しは見直してあげたというのにその一言ですべてが消し飛んだ。明日必ずオハナシをすることにした。

（それにしても何なのよ！確かに私のほうが日菜よりも胸はないと思うけど。それでも日菜よりも身長も高いし、スタイルだって自信がある。それなのに判断材料が胸ってどうゆうことよ！）

その後二人が帰ったあとに店を出て家に帰った。明日一ノ瀬さんに何をしてあげるのか楽しみで仕方がなかった。

「と言うわけです」

「そ、そそ、そうですか」

「あらどうしたのですか一ノ瀬さん。膝が笑っていますけど」

「そ、そんなことな、ないですよ」

「体まで震えてきてしまって、もしかして体調でも悪いんでしょうか？」

そう言っつて氷川さんが近づいてくる。すると体が無意識に後ろに下がった。

「あらあら、どこに行こうと言うのですか」

「すみませんでした!!」

ひと目も気にせず土下座をかます。この際プライドなんてものは無い。今はただ生きて明日を迎えられるようにするんだ。

「顔を上げてください一ノ瀬さん」

「そんな事はできません。自分は氷川さんが心の底から許してくれるまで顔をあげれません!」

「じゃあ、なんでもしてくれらるといふことでもいいのかしら」

「はい。氷川さんが望むならどんなことでもします」

「ふふ、そうですか顔を上げてください」

「は、はい」

「それじゃあ。教室に行きましようか」

「え、ボコらないんですか?」

「あら、私がそんな酷いこと一ノ瀬さんにするはずないじゃない」
よ、よかった。なんとか一命はとりとめた。

このときはまだ自分がとんでもないことを約束しただなんて思いもよらなかった。

あれから時間は立ち昼休みとなった。いつものように自分の机で弁当を広げようとしたら、氷川さんと目があった。そのまま無視して食べようと思ったら。

「一ノ瀬さん。何をしているんですか？早く来てください」「え」

「二度も言わせないでください。早く来てください」

「言われた通りに氷川さんのところまで行く。」

「えっと何のようですか氷川さん？」

「何のようですかじゃありません。早くお弁当を持ってきてください」「い」

「わかりましたよ」

自分の席に戻り弁当を持って氷川さんの机に行く。

「早く座ってください」

早く動けと言わんばかりの目線で指示を出してくる。椅子を持ってきて氷川さんの正面に座る。

「それで何の用事ですか？」

「用事などありません」

「じゃあなんでわざわざ呼び出したのだろうか？」

「えつとそれならどうして」

「はあ。もう朝の出来事を忘れてしまったのですか」

「朝の出来事」

もしかしてあの約束のことか？

「えつとこんなことで使ってしまったてよかったですか？」

すると氷川さんはキョトンとした表情で答えた。

「何を勘違いしているかわかりませんが、その約束は継続してますよ」「え？」

「当たり前じゃないですか。一ノ瀬さんは自分から許してくれるまでと言ったんですよ」

「確かに言いましたが」

「言っておくと私はまだ許したわけじゃないですから」

「それって屁理屈なんじゃ」

「あら、それとも一ノ瀬さんはオシオキのほうが良かったのかしら」

「すみませんでした。氷川さんの気が済むまでこき使ってください」

「ならそうさせてもらうわね」

そう言つて氷川さんは笑顔で弁当を食べ始めた。最近忘れていたが思い出した。氷川さんはやっぱりやばい人だということ。

それから何をするにしても氷川さんが何かを言ってくる。例えば

だ移動教室のときもわざわざ一緒に行くように言ってきたり。ケータイの連絡先を教えろとか。あとは弓道場まで送れとか。あまつさえその部活が終わるまで待つてろだとか。

逆らうこともできず今は図書館で勉強して時間を潰している。そろそろ部活動が終わる時間になつてきた頃にスマホが震えた。確認してみると氷川さんから早く迎えに来いというものだった。

「全く人使いが荒いといふかなんというか」

弓道場の前まで来てみると氷川さんはすでに待っていた。

「遅いですよ。連絡したら3分以内に来てください」

「これでも急いできたんですけどね」

「まあいいです。次からは気をつけてください」

「え！次もあるんですか!?!」

「当たり前でしょう。ほら帰りますよ」

「はあ、わかりましたよ」

二人で並んで歩く。太陽がちやうど地平線に隠れるところに差し掛かったところで話しかけられた。

「それで、昨日はなんで日菜と一緒にいたの？」

「なんて言うか、日菜さんが最近氷川さんと一緒にいる男が誰なのか調べるために近づいて来たらしいですよ」

「あの子何か迷惑かけ無かったでしょうか？」

「まあ色々ありましたけど大丈夫でしたよ。あと日菜さんすごく氷川さん思いなんですね」

そのことを聞くと氷川さんの顔が曇った気がした。その表情は昨日の日菜さんにそっくりだった。

「えっと、氷川さんもしかして日菜さんと何かあったのでしょうか？」

「どうしてそう思ったの？」

「昨日日菜さんも氷川さんの話題を振ったときに同じ表情してましたから」

「そうですか」

よほど触れちゃいけないことだったのか氷川さんはそれつきり話さなくなってしまった。

「それじゃここで」

「まって」

「どうかしました？」

「一ノ瀬さん。このあと時間ありますか？」

「わかりましたよ。あそこでいいですか？」

「はい」

自販機で缶コーヒーを2つ買ってから公園のベンチに座った。

「それでどうしたんですか」

「昨日日菜と一緒にいてどう感じました？」

「どうと言われても」

「一ノ瀬さんの感じたままでもいいです」

「そうですね。自分が感じた事はお姉ちゃん大好きっ子ぐらいですかね」

「それだけですか？」

「まあ、そんなもんですね」

「そうですね」

「それで氷川さんと日菜さんは何があったんですか？」

「それは」

「それを自分に話すために呼び止めたんじゃないですか？」
「……」

「案外話してみるとすっきりするもんですよ」

すると氷川さんはほつりほつりと話しました。

「あの子は昔から何でもできる天才だったんです。それに比べて私は

何をするにしても追い抜かれて。そうしたら自然と周りの人も日菜はすごいすごいって。それでもあの子はお姉ちゃんお姉ちゃんって言って私のことを慕ってくれたんです」

「.....」

「その重圧に耐えきれなくなった私はいつしかあの子のことを避けるようになったんです。ギターを初めたきっかけもあの子に比べられたくないから、そんな理由でした。なのにあの子は最近私の真似をしてギターを初めたんです」

「.....」

「私は中学からギターをはじめました。だけれどその私にすぐに追いつかれた。なぜあの子はいつもいつも私の真似ばかりするのか！憧れるほうがどれだけ負担に感じるか！自分の意志はないの！姉がすることが全てなら自分なんていらなないじゃない!!」

氷川さんは言いたいことを言ったのか肩で息をする。

「氷川さん泣きたいときは泣いたほうがいいです」

「私は別に泣きたくなんて」

「ならどうしてそんな泣きそうな顔してるんですか」

すると氷川さんの目からひとつまたひとつと涙が出てきた。その氷川さんを優しく胸に抱きしめる。

「今は我慢しなくてもいいんです」

「自分はどうやって話を聞くことや胸を貸すことぐらいしかできないですけどそれくらいはさせてください」

そう言うと氷川さんは泣きじやくる子供みたいに泣き続けた。

あれからどのくらい時間が立っただろう。太陽はすっかり沈みあたりは完全に真っ暗になっていた。

「氷川さんそろそろ大丈夫ですか？」

氷川さんは首をブンブンと降る。

「ほら、そろそろいい時間ですし」

胸から氷川さんを引き剥がそうとすると腕を回されて抱きしめられる。

「何してんですか」

「こんな顔一ノ瀬さんには見せられないわ」

「そうですか」

「……………」

まるでここだけが世界から切り離されたようだった。そんな二人だけの空間に冷たい風が差し込んできた。

「氷川さん一っだけ言わせてください」

「何かしら」

「日菜さんがいくら天才で氷川さんのギターの技術を超えたとしても、自分は氷川紗夜のギターが一番好きです」

「……………」

「ただそれだけです」

「……………」

「そろそろ帰りますか」

そう言って立ち上がるが氷川さんが離れてくれない。

「氷川さんこれじゃあ歩けませんよ」

「ならこのまま帰ります」

「いや危ないですよ」

「ならおんぶしてください」

「いやそれはいくらなんでも」

「おんぶしてくれたら、昨日の発言のことは許してあげます」

「はあ、わかりましたよ」

そのまま氷川さんをおんぶして家まで送って今日は家に帰った。なんだか初めて氷川紗夜という人間のことを知れたのかもしれない。そんな一日だった。

種目決め

氷川さんと帰った翌日学校に行くと氷川さんはいつも通りに自分の席にいた。

「おはようございます氷川さん」

「・・・おはようございます。一ノ瀬さん」

昨日のことがあってお互いに顔が合わせづらい。氷川さんの目なんかまだ赤く腫れているし。

「一ノ瀬さん。昨日のことは忘れてください」

「無理ですね」

そう言うのと氷川さんは絶望した顔色に染まった。

「なんでですか！昨日は少し気が動転してしまっただけで、有る事無い事言ってしまっただけです！だから決してあんなこと思っていない！だから忘れてください!!」

「それはできませんね。だって氷川さんが初めて自分に心の底から話してくれたじゃないですか。だから忘れることなんてできません」

「・・・なら勝手にして」

氷川さんは顔を赤くしてそっぽを向いてしまった。

「それじゃあ今日はここまでね」

4限の終了のチャイムが鳴り、みんなが食堂に一斉に走り出す。今

日は月に一回のセールの日だからいつもよりも食堂と購買が混むわけだ。

いつもなら自分の席で食べるところだが今日は違う。弁当を持って目的の場所まで向かう。

「氷川さん。一緒に食べましょう」

「い、一ノ瀬さんどうしてここに？」

「昨日氷川さんが来いと言ったんじゃないですか」

「それは昨日の話です。今日は別にいつも通りでいいです！」

早く自分の席に帰れと言ったふうなジェスチャー付きで言ってくる。

「そうですか。でも自分が氷川さんと一緒に食べたいと思っただけですよ」

「／／／なっ／／／」

「ダメですか？」

「べ、別にダメなんか言ってます。一ノ瀬さんがそうしたいなら勝手にしたら」

「ならここで食べますね」

そう言っただけで氷川さんの机に弁当を広げる。そのまま会話もなくお互い食べている。だけど時折氷川さんがこちらの方をチラチラ見つけてくる。

「どうかしましたか？」

「なにか、今日の一ノ瀬さん少しおかしいわ」

氷川さんは思っていたことをやっと言えたかのような表情で言うてくる。

「そうですか？別にいつも通りだと思いますけど」

そんなことが嘘だとわかっているのよ。といった目で見つめてくる。

「そんなことよりも氷川さんこれ食べますか？」

弁当袋から取り出したそれはいつかのタッパに入ったポテトだった。

「それは」

「ポテトです」

「そんな物見ればわかります」

「氷川さんが食べると思ってた朝から揚げたんですよ。食べませんか？」

「そ、そう朝から揚げてくれたのならもらわなくちゃ失礼よね」

そう言つて氷川さんは光の速さでタッパーを取り上げてポテトを食べ始めた。

「相変わらずポテトのことになるとすごいですね」

「そんな事ないわ。一ノ瀬さんがせっかく作ってくれたものを無下にしたくないから食べているのよ」

「そうですか」

そんなこと言っているがポテトを食べている氷川さんはとても笑顔だった。

あれから大丈夫だったか心配だったけどこの様子なら大丈夫かな。

「それじゃあ今日は前から予告していた通りに体育祭の種目決めだから体育委員は前に出て進行の方よろしくね」

遂に来たかこのときが。そろそろ近づいてきた体育祭の種目決めだ。これだけのために今日学校に来たと言つても過言ではない。

「さて、今年はどうするか」

体育委員の話聞く限りでは今年も去年と変わらず一人最低2種

目は出ないといけないらしい。

(2種目って案外多いんだよな)

さて肝心な種目だがまず絶対に短距離は嫌だ。そもそもクラスの中で下から数えたほうが早いんだから選ばれることはないと思うけど。

そして次に嫌なのは二人三脚だ。なんでかなんてわかるよな。ポッチが二人三脚できると思うなよ!!

「それではこの中から決めたいと思います。少しの間自由に話し合ってください」

するとクラスの大半の連中が動き始める。その時氷川さんと目が合った。そのまま氷川さんは席を立ち上がりこちらの方までやってくる。

「一ノ瀬さんはどれに出るのか決めましたか？」

「短距離と二人三脚じゃなければ最悪なんでもいいです」

「そうですか」

「そう言う氷川さんはどれにするんですか？」

「そうですね。多分出れるものにはほとんど出ると思います」

「あ、そうですよね」

忘れていたが氷川さんは学年の中でもトップクラスの運動神経の持ち主だった。

「それじゃあ、決めた人から黒板に名前を書いてください」

体育委員の声で黒板の前に一斉に人が集まる。まあ早いものがちではないのだけれど先に書いておいたほうが後に人が書きづらくなるのはわかる。

「それじゃあ、書いてきますね」

氷川さんはそう言って黒板に向かって行った。すると黒板の前にいた生徒が氷川さんに気づきさっと場所を開ける。それもそうだろう。氷川さんが出しているプレッシャーがとんでもないことになっているんだから。

日菜さんといい、氷川家は特殊な血筋なのだろうか。

氷川さんは宣言通りに風紀委員の仕事時間がかぶる競技以外は名

前を書き込んでいく。すると二人三脚のところにデカデカと一ノ瀬、氷川と書き込んだ。まるでここに書き込んだらどうなるかわかっているだろうな、と背中から物語っていた。

「ふう。まあこんなものですかね」

氷川さんは清々しい表情で席に戻ってきた。

「いや何やっているんですか!!」

「何ってただ書いてきただけですけど?」

「いや、二人三脚のところですよ。自分は無理って言ったじゃないですか!」

「それは知らない人との話でしょう。私となら大丈夫だと思ったんだけれど」

「いや、それはそうだとしても本人の許可無く普通書きますか!?!」

「もう私と一ノ瀬さんの仲なんだから別にいいでしょ」

「もう好きにしてください」

結局氷川さんと二人三脚に出ることになってしまった。

さてと帰るか。教科書をカバンにしまつて教室を出ようとしたら氷川さんに例のごとく呼び止められる。

「一ノ瀬さん。一緒に帰りましょう」

「氷川さんあなた今日バンド練習があるとか言っていないませんでしたか?」

「だからライブハウスまで送ってください」

まためんどくさいことを言ってきた。

「なんでそんなめんどくさいことしなくちゃいけないんですか」

「いいですか。私と一ノ瀬さんは二人三脚に出ることはわかっていまずよね」

「そうですね。氷川さんのせいで出ることになりました」

「そこで私達の息を合わせるために常に一緒に行動するべきだと思います」

「何を言っているのか理解できませんね」

「これから一ノ瀬さんは常に私と行動してくださいね」

「いやだからなん「わかりましたね」

こうなつた氷川さんはもう誰にも止められない。渋々頭を下げて了承してしまった。

「では行きましょうか」

「わかりましたよ」

二人で並んでライブハウスまで向かう。いや、近くね。心なしか距離が近い気がする。

「氷川さん。なんか距離が近くないですか？」

「二人三脚はこれよりも近い間隔で走るんですよ。だからこれくらいで戸惑っていたら話になりません」

「いや、そういう問題じゃない気がするんですけど」

「一ノ瀬さんは私との距離が近いと迷惑ですか？」

その聞き方はずるいだらう。そんな事言われて断れる男子がこの世に何人いるのか。

「いや、迷惑ではないですけど」

「なら、いいですよね」

「・・・はい」

遠くでカラスの鳴く声が木霊する。なんだか考えられないな。こないだまでは氷川さんと犬猿の仲だったのに一緒に帰るようになるなんて。

「それで一ノ瀬さんはギターの練習はしているんですか？」

「まあ、ちよくちよくやっていますよ」

「少しは弾けるようになりましたか？」

「いや、やって見てわかったんですけど。改めて氷川さんの凄さがわかりましたよ」

「ふふ、そうですね」

氷川さんは嬉しそうに答えた。その後は二人で他愛もない会話をしていた気がする。

「着きましたね」

「そうですね」

「……」

氷川さんがじっと見つめてくる。きっと考えていることは同じなんだろう。もう少し話していたかった。それほどこの時間が心地よかった。

「それじゃあまた明日」

「はい。それじゃあ」

そのまま氷川さんはライブハウスに入って行った。

「帰るか」

一人で歩く帰り道にはなれているはずなのになんだかいつもより寂しく感じた。

対面

それは種目決めから翌日のことだった。

「おはようございます氷川さん」

「……………」

「氷川さん？」

いつもなら挨拶ぐらい返してくれるはずなのに今日に限っては何の反応もない。それどころかずっとスマホとにらめっこしている。氷川さんの顔の前で手を振って見ると体がビクリとなり気がついた。

「い、一ノ瀬さんいつからそこに!？」

「いや、さつきからいたんですけど。氷川さんがポケットとしているから気がついていなかったんですよ」

「そうですか」

そのまま氷川さんはスマホに視線を落とす。

「さつきから何やってるんですか？」

「別に一ノ瀬さんには関係ないことよ」

その発言に少しムツとなる。いつも自分が同じことをやっていたら絶対白状するまで問い詰めてくるくせに。

氷川さんに気が付かれないようにスマホの画面を覗き見る。するとそこに書かれていたのはほんでもないものだった。

ちらつとしか見えなかったが、誘うことができたとか、すごく楽しみ、とか言う文字が見えた気がした。

もしかして氷川さん誰かと出かける約束を取り付けたとか。しかも文面的に推測できるのは男。

いや氷川さんに限ってそんな事あるはずないよな。

「えつと氷川さん。今日も一緒に帰るんですか？」

すると氷川さんは少し申し訳無さそうな表情で答えた。

「すみません一ノ瀬さん。今日も帰りに付き合ってもらうつもりでしたが用事ができてしまっただけです」

「その用事って、誰かとでかけたりとかですか？」

「そうね出かけるといえば出かけるのかしら」

もしかして男ですか。その一言がどうしても聞けなかった。

そして放課後その謎を確かめるべく氷川さんの後を追いかけてきた。決してストーカーなんかじゃない。もしかして氷川さんが何かやばい取引でもするのじゃないかと心配になってついてきただけだ。

(しかしこのまま行くと羽丘だぞ。待ち合わせをしているのはもしかして羽丘の生徒か?)

そして氷川さんは羽丘の正門に寄りかかった。

「わあ!!」

「ひゃあ!!」

いきなり声をかけられて飛び上がる。その声が出たほうを見てみるとそこにいたのは日菜さんだった。

「こないだぶりだねユツキー!」

「びつくりさせないでくださいよ。日菜さん」

「あはは、ごめんごめん。ユツキーがいたからさ。それでこんなところまで何してるの?」

「えっとそれは」

素直に氷川さんを追ってきたなんか言えるはずない。申し訳ない

が日菜さんにはこのままご退場願おう。

「たまたま羽丘に用事があったんですよ。今はその帰りです」

「ふーん。それでどうしてお姉ちゃんを見ていたのかな？」

すると日菜さんはいっしかのオーラで聞いてくる。

「い、いや。氷川さんがいたなんて知らなかったなあ。こんな偶然もあるなんてなあ」

「全然るんってこないよユツキー。それ以上ごまかす気なら」

日菜さんは近づいてきてそっと耳元でつぶやいた。

「ツブスヨ」

いやナニを!? 日菜さんの目は本気と書いてマジの如くだった。

「と言うのは冗談で」

「何だ冗談かあ。もうユツキーの冗談はたちが悪いね!」

そう言つてバシバシと背中を叩いてくる。

「なにやら朝から氷川さんの様子がおかしくてそれで気になってついてきたんです」

「なにがおかしかったの？」

「これは自分の憶測なんですけど」

正直これを日菜さんに話すのは気が引ける。

「どうやら氷川さん男の人と待ち合わせているらしんですよ」

「……もうユツキーは嘘が下手くそだね。どうせお姉ちゃんが用があるのは友希那ちゃんかりサちーだよ」

そう言つて氷川さんの方に目を向けてみると。隣に男がいた。

「はっ。」

日菜さんと並んで氷川さんを尾行する。

「まさか憶測が本当に当たってしまったってしまおうとは」

「お姉ちゃんいつの間にも男の子何かと知り合っていたんだらう。ユツキーわかる?」

「そんなの自分が知りたいぐらいですよ」

それにしてもあの男どつかで見たことがあるような? かすかな記憶をたどって見ると思い出した。

(そうだ確かあいつは前に湊さんにセクハラしてたやろうだ)

今度は標的を変えて氷川さんを狙って来たのか。確かに氷川さんは単純でポテトのことになるとポンコツになって、めんどくさい性格をしているが、顔だけ見れば百点の人だからな。

だが納得がいかない。

(氷川さんに接触したいなら自分にアポとってからにしろよ!)

「ユツキーどうしたの。なんか怖い顔してるけど」

「あ、いえ何でもありません」

すると氷川さんはショッピングモールの中にある。文房具屋さんに入って行った。

「追うよユツキー!」

すると日菜さんは一目散に追いかけていく。

「ちよつと待ってくださいよ」

その後を追うと何やら氷川さんとそいつは何やら楽しそうに話している。

その光景をただただでイライラしてくる。

(なんなんだよ。この感情)

すると氷川さんたちの話し声が聞こえてきた。

「氷川さんは勉強は得意なんですか?」

「そうですね、得意といえば得意ですね。だけど、毎回絶対一人の生徒に勝てないんです」

「そうなんですか」

「ええ、今の目標はその人に勝つことなんです」

「そうなんですか。頑張ってください」

「ええ、必ず勝って見せます」

なんだ氷川さんまだ諦めていなかったのか。その会話を聞いて少しうれしく思った。

「その生徒ってユツキーのことだよ」

「まあ、多分そうですね」

「まさかお姉ちゃんよりユツキーのほうが頭がいいなんてびっくりだよ」

「一応勉強しか取り柄がないんで。そこは氷川さんであろうと負ける気はありません」

「ふーん。そっか」

日菜さんは嬉しそうに話聞いていた。

次に二人が入って行ったのは雑貨屋さんだった。

「ここ初めて来ましたよ」

「ユツキーこういうところはこないの？」

「男はこんなところ一人では入れませんよ」

「なんで？」

「なんでと言われましても、恥ずかしいじゃないですか」

「ふーん。変なの」

いやこれに関しては何に変わったことじゃないよな。男諸君なら納得してくれるはずだよな。

すると氷川さんの声が入った。

「氷川さんは好きな動物とかはいないんですか？」

「そうですね、しいて言えば犬が好きですね」

ちよつとまってくれ。氷川さん確か自分の前だと犬は好きではないとか言ってたよな。

なのになんであいつの前だと犬が好きだって答えてんだよ！

そのまま二人を見ていると犬の置物をプレゼントするだとか言っている。流石に断るだろうと思っていたら氷川さんはそれをありがたく頂いていた。

(本当になんなんだよ！)

そのまま二人は夕ご飯も一緒に食べるつもりなのかそのまま外に出た。

どうせ氷川さんがチョイスするならここだと思ったよ。そこはいつも来ているファーストフード店だった。

「日菜さんここからは自分が見ていますので、帰って大丈夫ですよ」「ええ、ここまで来たんだから私も最後まで見ていく!!」

「お願いします日菜さん今度ポテト好きだけおごってあげますから」

日菜さんはどうしようかなあといった顔で見つめてくる。

「それじゃあ、私だけじゃなくてお姉ちゃんにもおごってあげて！」

「わかりました。氷川さんにもおごりますから」

「ホントに！それじゃあ、約束だよ！」

「わかりましたよ」

「うん。それなら今日のところは帰って上げる」

「ありがとうございます」

日菜さんはそれじゃあねー。と言って帰っていった。

(よし、待つか)

それから段々と暑くなってきた夜の中待っていると勢いよく扉が開いて女の子が泣きながら走り去って行った。

(あれって確か湊さんだよな。だとするとまたあいつが何かやらかしたんだらうか)

湊さんが飛び出して数分後。氷川さんが神妙な顔つきで出てきた。

「氷川さん何やってるんですか」

「一ノ瀬さんどうしてここに？」

「朝の氷川さん様子がおかしかったんでついてきたんです」

「そうですか」

氷川さんの顔色は曇ったままだった。

「それで何があったんですか？」

「それは」

「まあ、あの男が何かやらかしたんでしょう」

「それは」

するとその時店の入口からその男が出てきた。

「氷川さんまだいたんですか？」

「神宮寺さん。先程はすみませんでした。私が軽率なことをしたばかりに」

「そんな氷川さんが謝ることないですよ」

「おいあんだ」

「えつと誰？」

「自分は一ノ瀬幸村。氷川さんとはクラスメイトです」

「そうですか。俺は神宮寺正宗です」

「神宮寺さんあなたと湊さんに何があったのかは知りませんが、彼女泣いていましたよ」

「・・・。そうですか」

「自分からひとつ言わせてもらうことがあるのなら、どんな理由があるろうと女の人を泣かせる男は最低です」

「さて、帰りましょう氷川さん」

そのまま氷川さんの腕を掴んでその場を離れた。

「一ノ瀬さん。彼大丈夫なのかしら」

「さあ。でも彼、最後に何か覚悟を決めた顔でしたよ」

彼がその後どうなったのかはわからないが、きっと大丈夫だろうと思っただ。

体育祭

遂にこの日が来てしまったか。天高く登った太陽がジリジリとグラウンドを照りつけている。

「帰りたい」

「一ノ瀬さん何弱気になっっているんですか！」

いつもより明らかに高いテンションでいる氷川さんが答える。運動ができる人は本当にいいよな。運動ができない人はこの日がどれだけ中止になっただけ欲しいものか。

「なんでそんなにテンションが高いのか自分は理解に苦しみますね」

はあ、と氷川さんはわざとらしくため息をつく。

「いいですか一ノ瀬さん。今日の体育祭は一年で一回の行事なんですよ。その一回で本気を出さないでどこで本気を出すというのですか」

「いや、それは運動ができる人に限った話ですよ」

「そんな事ありません。一ノ瀬さんもやる気があれば必ず勝ってます」

熱い。氷川さんがどこぞのテニスプレイヤーみたいなことを言っている。

「いやまあ、行事は終わればそれでいいんですけどね」

「なら何が嫌なのですか」

ボッチが体育祭が辛い理由はひとつしかないだろう。そう、待ち時間が異様に長いということだ。自分の出番のとき以外は常に応援席にいないてはならない。しかもひなたでだ。木陰がないのがまたつらい。

木陰に行こうとすれば人が大勢たむろしているせいでボッチには行き場がない。

「一人で応援席で何時間も座っていることがどれだけ苦痛か氷川さんもわかるでしょう」

「私は基本的に風紀委員で仕事をしているのでそんな経験はありません」

そう言えばそうだった。氷川さんのことだからから中学から風紀委員をやっているだろうからこの辛さはわからないはずだ。小学校に

至っていえば日菜さんがべったりくっついていたから一人ではなかつたのだろう。

「そうですか」

「では、私はそろそろ時間なので行きますね」

「次はいつ頃帰って来るんですか」

「そうですね」

氷川さんはスマホを取り出してスケジュール表を見て答えた。

「今日は基本的に競技に出るとき以外は風紀委員の仕事なのでここに戻って来ることはないですね」

「……。嘘ですよ」

「本当です」

嘘だろ。氷川さんが戻って来ないとなると、自分は一人でここに何時間も座っていることになるのか。

「それでは一ノ瀬さん午後の二人三脚で会いましょう」

「……はい。わかりました」

そう言つて氷川さんは今度こそ集合場所に行つてしまった。

「借り物競走に参加する生徒は集合場所まで集まってください」

遂にきた。開会式が始まってから二時間ずっと席に座っていたが、ついに椅子から背中を離した。

集合場所に行つて見るとそこにいるのはどこを見渡しても女子ば

かりだった。

(嘘だろ。なんで女子しかないんだよ)

数が少ない男子は大半は運動ができる人ばかりなので借り物競争に出る人はいないってことか。そんなことを冷静に考えていると、体育委員から競技の説明が始まった。

大体はどこも同じようなルールだろう。スタートしたら中間地点にある紙まで一斉に走り出す。そしてそこに書いてあるお題をギャラリーの人から借りてゴールまで走る。それだけだ。

その説明を聞いているときにふと思った。自分のコミュ力じゃ人に話しかけて物を借りるなんて不可能じゃないのかと。

(や、やばい。完全にこれは誤算だった)

このまま列から抜けてどこかに隠れるかそう考えているときに一組目が走り出した。

(やばいやばいやばい。このままじゃ何百人の前で恥を晒すことになってしまう)

もう抜けようそう思っていたときにはもう遅かった。自分の番は次の次だった。

(あ、終わった)

前の人達がスタートした。やばい心臓の鼓動がこれまでになくらい早く感じる。そして最後の人がゴールした。

「よし次の組は並んで」

先生からの指示で列に並ぶ。

(ああ、五分後に自分は生きているのだろうか)

「位置についてよーい」

ピストルの音が勢いよく鳴る。それと同時に地面を蹴り出す。一緒に走っているのは女子生徒なのにどんどんと距離を離される。

中間地点までできたときには残りの紙は一枚しかなかった。

(せめてお題は簡単なものにしてくれ)

そう願う紙をめくるがその思いは無残に打ち砕かれた。

異性。確かに紙にはそう書いてあった。

(ちよつと待て。何だこのお題は)

せめて人じゃなくてもものにしろよ！そんなことを考えても現実には変わらない。周りの人たちはすでに物を借りて走り出している。

(まずいこのままじゃ生き恥を晒すことになる)

(考えろどうすればいい。そもそも友達もない自分に異性の友達なんかいるはずないだろ)

もうリタイアするしかないのかそう思い顔を上げると目が合った。

(もうどうにでもなれ!!)

そのまま震える足で走り出す。

「氷川さんお願いします！」

「一ノ瀬さん何をやっているんですか!?まだレース中でしよう！」

「氷川さんが必要なんです!!」

氷川さんは気がついたのかハツとした顔をする。

「そうですか。何を借せばいいのですか？」

「ものじゃなくて氷川さんが必要なんです」

「何を言っているんですか」

「だから、氷川さんが自分に借りられてください!!」

「お題はなんなんですか」

氷川さんはそう言っただけで紙に手を伸ばしてくる。それを払いのける。

「そんな事している時間はないですよ。他の人達はまだゴールしますよー！」

「はあ、仕方ないわね。一ノ瀬さんしっかりと捕まっていますよ」

そう言っただけで氷川さんは自分を持ち上げる。それは、世間で言うお姫

様抱っこだった。

「ちよっ！何やっているんですか氷川さん!!」

「飛ばすからしっかりと捕まっていますよ！」

そのまま氷川さんはグラウンドに飛び出した。やばいこれ思ったよりも結構揺れる。振り落とされないように氷川さんの首に腕を回す。するとさらに氷川さんは速度を上げた。

そのまま氷川さんは先頭集団を追い抜いてぶっちぎりでゴールした。

「ふう、一ノ瀬さんは相変わらず軽すぎます」

「そんなことより氷川さんそろそろ下ろしてください」
「そうですね」

そう言って氷川さんはゆっくりと下ろしてくれる。

「乗り心地はどうでした。プリンセスさん」

「最悪でしたよ。プリンスさん」

そして午後になった。段々と時間の経過とともに肌が焼けていくのを感じる。

「一ノ瀬さんそろそろ行きますよ」

「ああ、氷川さん。自分はもうだめです」

「何言っているんですか。早く行きますよ」

氷川さんに腕を掴まれて集合場所に引きずられるように連れて行かれた。

「一ノ瀬さんもっと近づいてください」

「ちよつとまっつけてくださいよ」

氷川さんはそう言って足首を固定する。

「いいですか。いちに、で合わせますよ」

「わかりましたよ」

そのままタイミングを合わせて足を動かす。

「あれ、案外簡単じゃないですか」

「そうですね。掛け声無しでやってみましょう」

そのまま掛け声をなしでやって見るが簡単に息が合う。

「……………簡単ね」

「そうですね。…………まあこれも日々の練習のおかげじゃないですか」

「それにしても一ノ瀬さん。あなたもしかしてずっと一人で応援席にいたの?」

「そうですね。一人でずっとあそこに座っていましたよ。おかげで肌が焼けましたよ」

「あら、引きこもっているあなたにはちようどいいじゃないですか」

正直言つて日焼けはしたくない。お風呂に入るときのあのひりひりする感じが痛いんだよなあ。

「さて、そろそろ並ぶわよ」

そのまま列に並ぶ。周りの人たちは掛け声はどうだとか、転ばないようにしようねなど話し合っている。

それにしてもやけに視線を感じる気がする。

「氷川さんなんだか視線を感じませんか」

「そうですね。やけに視線を感じます」

周りを見渡して見るとほとんどの人たちがこちらを見ていた。

「なんでこんなに見られているんでしょうか」

「さあ」

氷川さんはあつとした顔で何かを思い出した。

「そう言えば男女で参加するのは私達だけでしたね」

……………またか。確かに他のペアは女子同士男子同士で組んでいる。その中で男女のペアは自分たちだけだ。

「まあ、そんなことはどうでもいいです。私達の相性を見せつけてあげましょう」

「頼みますから走らないようにしてくださいね」

「そう言う一ノ瀬さんこそ歩かないようにしてくださいね」

その言葉にカチンとくる。

「だいたい氷川さんはいつもそうですね。こんなときは走りがちになる

んで自分が合わせてあげるとは出来ないですよね」

「あら、一ノ瀬さんの方こそ私との距離が近いからと言ってやらしいことでも考えているんじゃないですか」

「それこそありえない話です。そもそも氷川さんになんか興味ないですから」

「そんなんだからぼっちのままなんですよ」

「ぼ、ぼっちじゃないですし」

「あら、一ノ瀬さんみたいな人を相手してくれる物好きなんかいたんですか」

「そんなやつにいつも何かしらやってくる物好きが目の前にいるんですけどね」

「ふん」

最近少し見直したと思ったけど氷川さんはこういう人だ。

そのまま険悪なままスタート位置につく。

「足を引っ張らないでくださいよ」

「それはごっちのセリフです」

ピストルの合図で走り出す。

お互いに顔も声も合わせることもなくただ黙々と走っている。つというか走るに近いスピードだった。

「この程度ですか一ノ瀬さん」

「そんな安い挑発には乗りませんよ」

口ではそう言ったが足の速度を少しだけ上げる。そのまま全速力に近いスピードでゴールした。

後ろを見てみると他のペアはまだスタートに近い場所にいる。

「まあ、私と一ノ瀬さんが組めばこんなもんよね」

「そうですね。正直余裕でした」

「それにしても一ノ瀬さんあんなに早く走れたんですか」

「流石に馬鹿にしすぎですよ」

「それじゃあ、応援席に戻りますね」

そう言って足首の手ぬぐいを取ろうとしたが固くて取れない。

「何をやっているんですか。変わってください」

氷川さんは外そうとしてみるがなかなか取れない。

「このー！」

無理やり外そうと力を入れたら更にきつく絞まる感覚がした。

「何やってるんですか」

「私は悪くありません。この手ぬぐいがわるいのよ」

その後も二人で試行錯誤してみるが結局はずれずにそのまま風紀委員の集まりの時間だとか言うのでしようがなくついていったら席に戻っていいと言われ氷川さんと席に戻った。そのまま二人で座るとんでもない視線を感じて正直生きた心地がしなかった。

結局そのまま最後まで外れずに閉会式のあとに氷川さんのお父さんになんとか外してもらった。

七夕

そろそろ七夕の季節だ。織姫と彦星は年に一回この日にしか会えない。そんな日だ。

「氷川さんどうしたんですかそんな浮かない顔して」

「ああ、一ノ瀬さんいたんですか」

「なんですかその眼中にも入っていない感じは」

「そう、ごめんなさいね」

そう言つて氷川さんはまたため息をつく。なんか前にも同じような事があつたような。

「何か悩み事ですか？」

「悩み事つて言うのかしらね」

「バンドのことですか？」

「バンドは別に関係ないわ」

なら氷川さんが悩むことつてなんだろうか。

「最近ポテト食べていないんですか？」

「ああ、そう言えば最近食べていないわね」

そうは言っているが、氷川さんの顔色は晴れない。後残された選択肢があるならひとつしかない。

「もしかして日菜さんのことですか」

その質問をしたときに少し体が動いた気がした。

「また何かあつたんですか？」

「別に日菜のことじゃないわよ」

「またそんな変な意地を張つて。日菜さんのことになるとすぐにわかりますよ」

「別に一ノ瀬さんには関係のないことよ」

「それで何かあつたんですか」

「それは」

じつと氷川さんの目を見つめる。すると氷川さんは観念したのか渋々話しました。

「そろそろ七夕の時期なのはわかりますよね」

「そうですね。それがどうかしたんですか？」

「実はその七夕の日に商店街でお祭りがあるんです」

「それで」

「そのお祭りに日菜と一緒に行くかと誘われたんです」

「一緒に行けばいいじゃないですか」

「それは」

氷川さんは歯切れの悪い顔をする。

「どうせ氷川さんのことだから日菜さんに私はいかないとか言ってきたく断ったんでしよう」

「・・・ッ」

どうやらそのようだ。

「なんで断ったんですか。せっかく日菜さんが誘ってくれたのに」

「別に。人混みが嫌いなだけよ」

「そんなの行けば大丈夫ですよ。それに祭りならフライドポテトの出店もあるんじゃないですか」

その発言に氷川さんは少し揺れ動いたのかピクリとする。

「だからそんなもの私は好きじゃありません!!」

「そうですか」

本当にそろそろ認めてもいい頃合いだと思うのに。

「それでなんて言って断ったんですか」

「他の友達と行ったほうが楽しいって断りました」

それは考えられる中で一番最悪の断り方じゃないか。きっと日菜さんは他の人じゃなくて氷川さんと一緒に行きたかったんだろうな。

「まあ、氷川さんが行きたくないのなら無理に行かなくてもいいんじゃないですか」

「そうよね」

そう答えた氷川さんの横顔は少し寂しそうに見えた。

それから時は立って週末になった。今日はバイトもないし一日自由だ。贅沢に昼過ぎまで寝直すか。そう思い布団をかぶり直したらスマホがけたたましくなりだした。

「全く。人の休日を邪魔するのは誰だ」

枕元に置いてあるスマホに手を伸ばし見てみると液晶に映し出された文字は日菜だった。無視するか。そのまま放置しておくが一向に鳴り止む気配がない。

「はあ。もしもし」

「あつ、やつと出た。もう！どうせ気がついていたんでしょ!!」

「今気が付きましたよ。それで何のようですか日菜さん」

「あ、そうだった。ユツキー今日暇でしょ」

「なんで人を勝手に暇扱いしてるんですか」

「だってユツキーお姉ちゃん以外に遊ぶ相手いないでしょ」

その一言に心がえぐられる。

「そ、そんな事ないですよ。自分だって遊ぶ相手ぐらいいいますよ」

「ええ、じゃあお姉ちゃん以外で誰か上げてみてよ」

「えつと」

そう言われて考えてみるが氷川さん以外となるとどうも思い浮かばなかった。

(あれもしかして自分氷川さん以外友達いない)

その現実を叩きつけられて更にむなしくなる。

「もう、ユツキーが友達いないのはわかっているから大丈夫だよ!」

「いや、そんな事ないですよ」

「まあそんなことは置いておいて」

そんなことって言われた。

「今すぐいつものお店来て。早くね！」

「えっ、ちよっと待っててくださいよ」

その返事が届くことなく通話がきらられる。ここで無視をしてしまったらあとが怖い。

「はあ、行くか」

しょうがなくベッドから出て着替え始めた。

「あ、おーい。ユツキーここだよー！」

「そんなに大声出さなくてもわかりますよ」

「もう、ユツキー遅いよー！」

「これでも急いできたんですけどね」

本当にこの姉妹は根本的などころでは似てるんだよな。

「それで何の用ですか」

「決まってるじゃん！今日は何の日でしょうか」

「7月7日。七夕の日ですね」

「正解！」

「それで、七夕祭りに付き合えと」

「なんだー。ユツキーわかってたのかあ」

「まあ、なんとなくは」

「なら話は早いね」

「でも良かったんですか？氷川さんは誘わないで」

その質問をしたときに日菜さんは少し寂しそうな顔をした。

「あはは、今日も最後に誘おうとしたんだけどお姉ちゃんギターの練習してたからさ。邪魔しちゃう悪いと思って」

「そうですか」

「……………」

「まあ、氷川さんですしね。それじゃあ氷川さんのぶんまで楽しみましょうか」

「おー。ユツキーわかってるね。それじゃあレッツゴー！」

そのまま日菜さんに腕を掴まれて商店街まで連れて行かれた。……財布の中身足りるよな。

それで商店街についたわけだが人が多いのなんの。

「これは下手をすれば迷子になりますよ」

「まっさかー。もう高校生だよ。迷子になんかなるわけ無いじゃん」

「それが命取りになるんですよ」

「そっかーなら」

そう言っただ菜さんは腕を絡めてくる。

「……………。何してるんですか」

「これなら迷子にならないでしょー！」

「はあ、好きにしてください」

「ここ最近はこの姉妹に振り回されるのにもなれてきた。

「それじゃあ、最初は何をしますか？」

「そうだねー。あ、たこ焼きだ。ユツキー行こー！」

「はいはい。わかりましたよ」

「おじさん。たこ焼きひとつ」

「はいよ。何だ兄ちゃん。可愛い彼女つれて羨ましいこった」

「えへへ、私彼女だって」

「はいはいそうですねー」

「可愛い彼女さんには一個おまけだ」

「わー！おじさんありがとう！」

「おう、祭り楽しめよ！」

店主のおつちゃんから袋を受け取り日菜さんに渡す。日菜さんは早速それを取り出しフーフーしながら食べている。

「あつちち。うーん。おいしー」

「それは良かったです」

「あ、ユツキーにもあげるね」

そう言って日菜さんはたこ焼きを食べさせてくる。

「あつっ!!もう、いきなり口に入れないでくださいよ！」

「あはは、ごめんごめん。でもユツキーってやっぱり面白いね！」

「そうですか」

「ユツキーといるとるんって感じがする。きつとお姉ちゃんも同じだよ」

「前から気になっていたんですけど、るんってなんですか？」

「えー、るんっはるんだよ」

るんはるん。感情から察するに楽しいとかそんな感じなのだろうか。

「それじゃあ次はどこに行きますか？」

「そうだなあ。あ、『短冊に願いを』だって、あれ書こうよ！」

「わかりましたよ」

短冊に願う事か。こんな事するのは小学校以来かもなあ。

「日菜さんは何を書いたんですか？」

「ふふーん、そんなの決まってるじゃん！」

まあどうせ氷川さん関連のことだろう。

「そう言うユツキーは何を書いたの？」

「自分が書いたのは」

言おうとしたときにここ最近嫌というほど聞き慣れた声が聞こえてきた。

「日菜？一ノ瀬さん？」

「おねーちゃん・・・!?」

「氷川さんどうしてここに？」

「二人して何をしているの？」

「あはは・・・おねーちゃんに断られちゃったからユツキーと一緒に七夕まつり回ってたんだけ。おねーちゃんは？」

「私はお母さんから買い物頼まれたから。七夕まつりに用はないわ。二人して何をやっていたの？」

「えつと今は日菜さんに連れられて短冊に願いごとを書いていました」

「そう・・・」

「・・・」

き、気まずい。もしかして二人でいるときもずっとこんな感じなんだろうか。その時日菜さんの持っていた短冊を一匹の鳥が加えて持っていてしまった。

「待ってー!!あたしの短冊ー!!」

そのまま日菜さんはその鳥を追いかけて行ってしまった。

「あ、日菜!!」

「どうするんですか氷川さん!?!」

「とりあえず追いかけるわよ」

そのまま氷川さんと一緒に日菜さんを追いかけていった。

「はあ、はあ、はあ。し、死ぬ。それにしても日菜さん速すぎるだろう。それに負けず劣らず氷川さんも速いし。」

「一ノ瀬さん。大丈夫ですか？」

「はあ、はあ。氷川家は一体どうなっているんですか？」

「ほら呼吸を整えて」

氷川さんが優しく背中を擦ってくれる。

「あ、ありがとうございます」

「それで、一ノ瀬さん。ひとつ聞きたいのだけれど」

「はあ、な、なんですか？」

「あなたさつき商店街にいたとき日菜と腕を組んでいたわよね」

「それは日菜さんが無理やり組んできたんですよ」

「本当に？」

「本当です」

「そう、だけれどもう一つあるわ」

「なんですか？」

「たこ焼き屋で、日菜のことを彼女かと聞かれたときに否定しなかったわね」

「そうでしたっけ？」

「とぼけないで!!」

「は、はい。確かに否定しませんでした」

「いい、一ノ瀬さん。いくらあなたであろうと日菜に手を出したらわかってるわよね」

「は、はい」

「確かに日菜の方が魅力的に見えるのはわかるわ。だけど私の見ている前で日菜にちよつかいかけたらどうなるか覚えておきなさい!!」

「は、はい」

なんだ。結局口ではなんだかんだ言っても。氷川さんは日菜さんが大切なんじゃないか。

「なにをニヤニヤしてるのですか!」

「いやー。なんでもありません」

「ほら、日菜を追いかけますよ!」

「わかりましたよ」

日菜さんを追いかけてみると、そこはいつしかの公園だった。

「はあ、はあ・・・ふたりとも速すぎますよ」

やっと二人に追いついたと思ったら二人して公園のベンチに座っていた。

「なに二人してたそがれているんですか?」

「やっと来たのねーノ瀬さん」

「遅いよー。ユッキー!」

「それでも全力で走って来たんですけどね」

自分が遅すぎるのもあるだろうが二人が速すぎることもあるだろう。

「それじゃあ戻ろっか」

「ええそうね」

「え、もうですか!？」

「うん。早くおねーちゃんとお祭り見て回りたいし!」

「なんだかよくわからないが二人の仲が少し良くなっている?」

「なら、自分はこのへんで帰りますね」

「そう言っただけ帰ろうとしたら肩を掴まれる。」

「あらーノ瀬さんあなたも行くのよ」

「なんでですか!姉妹二人で楽しい時間を過ごせばいいじゃないですか!」

「そのことなんだけれど日菜から報告があるらしいのよ」

「報告?何のことだ。」

「おねーちゃん。あたしあのおとき無理やりユツキーに腕を組まされたんだよ」

「は?」

「何を言っているんだ日菜さんは。」

「あの時は日菜さんが無理やり組んできたんじゃないですか」

「一ノ瀬さん。私はさつき日菜に手を出したらどうなるか忠告したはずよね」

「ちよ、ちよっとまっすぐください氷川さん。日菜さんと自分が言っていることどちらを信じるのですか!!」

「もちろん日菜に決まっているじゃない」

「おねーちゃん。大好き!」

「そう言っただけ日菜さんは氷川さんに抱きつく。」

「氷川さん。自分は無実です!」

「犯罪者の言うことなど信じられないわ」

「信じてください」

「そうねえ」

「氷川さんは顎に手をつけて考えニヤリと笑った。」

「日菜。あなたお腹は空いていない?」

「めーちゃ。空いてるよ!」

「あーあ。なんだかポテトが食べたい気分だわ」

おいおい。まさかこの流れは。

「おねーちゃん。たしか屋台にフライドポテトの屋台があったよ！」

「あら、そう。ならそこで食べていきましようか」

「わーい。そうと決まれば速く行こう！」

そのまま日菜さんは自分と氷川さんの腕をつかみ商店街の方に走り出した。ああ、さようなら今月のバイト代。

その時ポケットから短冊が落ちた気がした。でも、もう拾う気力もなくなっていた。

その落ちた短冊には氷川姉妹が仲良くお腹いっぱいポテトを食べられるように。と書かれていた。

代理戦争

最近どうも調子が悪い。バンド練習にしても勉強の方にしても調子が悪い。

「はあ」

「紗夜。最近調子悪いけど、どうかしたの？」

「湊さん。何でもありません」

「そんな事ないわ。ここ最近明らかに調子が悪いわ」

湊さんにも気が付かれていますか。

「最近何をするにも調子が出ないんです」

「何かあったの？」

確か調子が悪くなったのは一ノ瀬さんに日菜のことを打ち明けた日からだ。

「それは」

「紗夜ー。何あったの？」

「今井さん」

今井さんまで話を聞きつけてきた。

「確かに最近の紗夜は調子が悪い感じがするねー」

まずいこのままじゃめんどくさいことになるわ。

「大丈夫ですよ。今日はもう帰りますね」

そのまま荷物を片付けて帰ろうとしたら今井さんに肩を掴まれる。

「どこに行こうとしているのかな紗夜」

ああ、一ノ瀬さんはいつもこんな気持ちだったのかしら。

「さーて。それじゃあファミレスに行こうか！」

「み、湊さんは反対ですよね」

湊さんはニッコと微笑みうなずいた。

「さて、行くわよ。紗夜」

そのままファミレスまで連行された。

「さて、紗夜。最近のあなたが調子が悪いのはみんな薄々感じていたのよ」

「そうですか」

「それで何があったの？」

「それは」

正直に話すか悩ましくなる。こんな事今までになかったから。

「確か紗夜が調子が悪くなったのは二週間ぐらい前だよ」

二週間前。そうそれはまさしく一ノ瀬さんにおんぶしてもらって帰った日のことだった。

「でも、氷川さん学校にいる時は……別に普段通りですよ」

「そうなの燐子」

「ちよつと白金さん！」

「紗夜は黙ってて」

今井さんに遮られてしまう。

「紗夜さん。ポテト食べますか？」

「ああ、宇田川さん今はあなただけが私の味方よ」

「それで燐子学校での紗夜はどんな感じなの？」

「……それは」

白金さんがこちらを見てくる。

「大丈夫、紗夜なら私がちゃんと見てるって」

「そうですか」

「そうそう。だからさ教えてよ」

全く今井さんの行動力にはいつも驚かされるわ。

「そうですね。学校での氷川さんはいつもより……テンションが

高いといいますが。・・・ニコニコしている気がします」

「へえ、それってどんなとき？」

「ある、生徒と話している時は・・・いつもより楽しそうです」

「ある生徒ねえ」

今井さんがこちらを見てニヤニヤしてくる。

「なんですか。その目は」

「いやー。なんでもないよ」

「燐子その生徒って男子生徒かしら」

「湊さんそれは！白金さんも答えなくて大丈夫です！」

「ええ別に答えなくてもいいわよ燐子。今の紗夜の反応でわかったかしら」

湊さんまでニヤニヤした顔で見ってくる。

「ここまでの話を聞いてほしいわかったわ」

「何がわかったんですか？」

湊さんが自信満々に答える。

「紗夜あなたは今その生徒に恋をしているのよ!!」

「恋ですか？」

恋とは、特定の相手のことを好きだと感じ、大切に思ったり、一緒にいたいと思う感情。辞書的に言えばそんな感じだろう。

私が一ノ瀬さんにそんな事を思うはずないわ。別に好きでもないし。でも、彼は大切な友達で一緒にいたいとは思う。

「そんなことはありえませんかよ湊さん。だいたい彼とはただの友達です」

「私も確かに最初は戸惑ったわ。でも一度自覚してしまったら、もうそうとしか考えられなくなっちゃったわ」

「それは湊さんに限った話です。私は別に」

「でも、こんなに楽しそうな表情してるよ」

今井さんがそう言って見せてきたのは体育祭で私が一ノ瀬さんを抱っこしている写真だった。

「こ、これをどこで!!」

「あはは、紗夜はわからないかもしれないけどだいたい今じやみんな

知ってるよ」

「どれ」

湊さんが今井さんのスマホを覗く。

「あら、なかなかかっこいいじゃない。まあ、正宗ほどじゃないけれど」

その一言にムツとする。

「あら湊さんそんなはありえませんが。どう考えても神宮寺さんよりも一ノ瀬さんのほうがかっこいいです」

「紗夜こそおかしなことを言うのね。どこをどう見ても正宗のほうがかっこいいわ。それに彼紗夜に抱っこされている時点でどうなのかしら」

「彼は運動こそできませんが勉強は常に学年一位でトップです。いつか彼に大差をつけて勝つために勉強だって根気強く続けられます」

「別に勉強はそこまでできなくてもいいわ。それに紗夜じゃわからないと思うけれど勉強は競い合うよりも教えてもらったほうがお互い有意義な時間だわ。それに正宗は顔だけじゃなくて性格も優しいのよ」

「確かに一ノ瀬さんは性格は最悪ですが顔に至っては最高の人です。ですが私のお願いもちゃんと聞いてくれますし、何よりも一ノ瀬さんが作ったポテトはこの世の何よりも美味しいです!」

「あら、それを言うなら正宗は料理が得意だわ。特に手作りのオムライスの世界で一番美味しいわ!」

「あと湊さんはわからないと思いますが、一ノ瀬さんは私のギターを聞いてギターを初めてくれました。いつか彼が弾けるようになったら彼とセッションすることが今の目標です!!」

「私だって正宗とデュエットをする予定よ。それに歌うことだったらギターと違ってすぐにできるわ!!」

「はあ、はあ、はあ」

全く湊さんはわかっていません。絶対に神宮寺さんよりも一ノ瀬さんのほうがかっこいいです。

「えーと、ふたりともちよつと落ち着いて。お互いの主張はわかった

から」

「なら、今井さんに聞きますが。今の話しを聞いてどちらのほうが魅力的に聞こえましたか」

「え、えーっとそれは」

「そうね第三者からの意見のほうがわかりやすい。リサはどっちほうがいいかしら」

「えっと私は、世話を焼ける人がいいなあ。なんて」

「そう。なら、燐子はどちらのほうがいいかしら」

「え！わ、私ですか。私は優しく守ってくれる人が・・・いいです」

「なら、あこはどう」

「はい！あこはかっこいい人がいいです!!」

「そう。まあ自分のタイプなんてバラバラだから一概には言えないわね」

「そうですね」

「それで話を戻すけど紗夜はその人が好きなんだよね」

「そ、そんなはずありません！私が一ノ瀬さんの事を好きなんて」

「好きじゃないならさつき言ったことみたいにポンポン出てこないよ」

私が一ノ瀬さんの事が好き？そんな事あるはずがない。

「まあ、紗夜が認められない気もわかるわ。最初は誰でもそんなものよ。でも紗夜はその人のことを自然と目で追っているんじゃないかしら」

確かに最近は一ノ瀬さんのことを自然と見ていることが多い気がします。ですがそれとこれは別問題です。

「でもね紗夜。いつか必ず彼のことを意識してしまうときがかならず来るから」

「・・・そんな日は絶対に来ません」

私が一ノ瀬さんのことを好きになるなんてあるはずないんだから。

「紗夜はさ、この人のことまだ名字で呼んでるの？」

「何を言っているんですか今井さん。当たり前でしょう」

「ならさ、名前で呼んで見れば？」

「なぜ、私がそんな事を」

「ええ。だって友達なんですよ。普通友達どうしなら名前で呼び合うって」

「別に名前で呼びあうことだけが友達の定義ではないでしょう」

「ふーん紗夜がそれでいいならいいんだけどね。でもさっきの話を聞いている限り紗夜彼にきつくあたってるんですよ」

「そ、そんなことは」

「少しは優しくしてあげないと彼、紗夜のこと嫌いになってどっか行っちゃうかもよ」

一ノ瀬さんが私のことを嫌いになっていなくなってしまう。そんな事はあるはずがない。ここ最近なんか別に厳しくなんか。

そう思い少し思い返してみると、テニスでボールを当てたり、種目も勝手に決め、あまつさえこないだなんかポテトを日菜と一緒に山程おごってもらった。

(もしかして私一ノ瀬さんに迷惑ばかりかけているかしら)

「肝に銘じておきます」

明日から少しは優しく接してあげようかしら。そんな事を考えながらやっときたポテトをつまみながら考えていた。

変化

おかしい。何かとは言わないがおかしい。氷川さんの様子が朝から変な感じだ。例えるなら妙に優しいと言うか、親切というか、とにかくいつもの氷川さんじゃない。

「一ノ瀬さん。どうかしたんですか？」

「い、いや何でもありませんよ」

「そうですか。もし体調が悪かったら言ってくださいね。保健室に連れて行きますから」

「大丈夫ですよ。それよりも氷川さん何かありました？」

「別に特になにもないけれど。それがどうかしたの？」

「いや、何もなければいいんですけど」

嘘だ。絶対に何かあったに違いない。そもそもいつもの氷川さんなら体調の心配なんか絶対にしてこないはずだ。

もしかして日菜さんが入れ替わっているとか。そうじゃなければこのおかしい状況が説明できない。

「もしかして日菜さんですか？」

「何を言っているの。一ノ瀬さん。本当に具合が悪いの？」

そう言っつて氷川さんはおでこに手を当ててくる。案外氷川さんの手っつて小さいんだな。じゃなくて!!

「顔が赤いですよ。一ノ瀬さん。大丈夫ですか？」

「氷川さんの距離が近いんですよ。いくら氷川さんであろうとこの距離はいやでも意識してしまいます」

「そ、そう。ごめんなさい」

明らかに落ち込んだ様子で氷川さんは離れる。

「あ、いやそんなうざいとかそんな理由じゃなくて」

「いいわよ。私も急にやりすぎたと思うわ」

そう言う氷川さんの表情は少し寂しそうだった。

少しやりすぎたかしら。昨日今井さんに言われた通りに少し優しく接してあげようと思いき急に距離を縮めすぎたかしら。

(嫌われてないかしら)

ちらりと一ノ瀬さんの方を見てみると、教科書を机に広げて勉強していた。その姿に少し苛立つ。私がいかに悩んでいるのに一ノ瀬さんは何事もないように過ごしている。

このままじゃ本格的に嫌われるかもしれない。一度その事を考えてしまうとうとうしようもなく気持ちが落ち込んでしまう。

(はあ、なんなのかしら一体)

結局この胸のモヤモヤが晴れる時は来るのだろうか。一ノ瀬さんを見つめながら考えていた。

視線を感じる。明らかに氷川さんの方からだ。氷川さんが急に距離を縮めてくるから心を無にしようと思いき教科書を開いたがこうも視線を感じたら全く集中できない。

大体どうしたんだ氷川さんは。昨日まではいつも通りだったのに今日になつたら距離感が近い気がする。もしかしてなにかしてしまったのだろうか。なにかしてしまったのか思い返してみるが心当たりがない。

(これは自分で気づけてことなのか)

そもそも氷川さんが近いと心臓に悪い。氷川さんは顔だけはいいだから近づかれるとドキドキする。性格の方も最近はなれてきてそんなに嫌でもなくなってきた。むしろ氷川さんといると楽しいまである。

その氷川さんが急に距離を縮めてきたら誰だつて焦るだろう。

(もしかして自分以外の人にもこんな事をしているのだろうか)

もしそうだとしたら嫌だ。なんとなくだが嫌だ。

顔を上げて氷川さんの方を見てみるとさつと目をそらされる。そのまま問題に目を戻すとその問題で手が止まる。その問題とは現代文の心情問題だった。

(主人公のヒロインに対する感情か)

わからない。主人公がヒロインに対する感情なんて本人でもわからないんだから自分たちがわかるわけ無いだろ。

そんな事を考えながら次の問題に進んだ。

昼を知らせるチャイムが教室に響き渡る。今日は来るかもしれない。ふと顔をあげると氷川さんが眼の前にいた。

「なっ！」

「何をそんなに驚いているんですか氷川さん」

「だっていきなりあなたが顔を上げるからびっくりしたのよ！」

「それは失礼しました」

今日はなんとなく来るかとも思ったが本当に来るなんて。

「それで何のようですか」

「一緒に食べようと思って来たのよ」

そう言って氷川さんは弁当を広げ始める。

「何をしているの」一ノ瀬さん。早く準備しなさいよ」

「自分が断らない前提なんですネ」

すると氷川さんは当たり前だと言わんばかりに答えた。

「一ノ瀬さんが断るはずないじゃない。それとも一ノ瀬さんは私とお昼を一緒に食べるのは嫌かしら」

何だ今日の氷川さんは。いつもなら「別に何でもいいでしょ」とか言って答えるはずなのに。

「別に嫌じゃありませんよ」

そう言ってカバンから弁当を取り出して広げる。いつもなら会話のひとつもないが今日は違った。氷川さんは事あることに何でも質問してきて、自分がそれに答える。その繰り返しだった。

「一ノ瀬さん。今日放課後うちに来ませんか」

「そうですね」

「それじゃあ、放課後お願いしますね」

「そうですね。えっ！」

待て。いまとんでもないことを言わなかったかこの人は。

「えっと氷川さんもう一度聞いてもいいですか？」

「何をですか」

「今日の放課後自分が氷川さんの家に行くんですか？」

「いま一ノ瀬さんが行くと答えたじゃありませんか」

おかしな人ですね。と言わんばかりの返事だった。

「えっとなんのためにですか？」

「はあ。全く一ノ瀬さんは人の話を聞いていたんですか」

「すみませんでした」

「一ノ瀬さんがギターをどのくらい弾けるようになったか私が見ると言ったじゃないですか」

「あ、確かそんな事言っていた気がする」

「気がするじゃありません！」

「す、すみませんでした」

「今後は気をつけてください」

「はい。以後気をつけます」

結局その後はいつもとおりの食事風景になった。

「さて、行きますよ。一ノ瀬さん」

「はいはいわかりましたよ」

そしてやってきた放課後。今から自分は氷川さんの家に連行される。もしかして人体実験でもさせられるんじゃないだろうか。氷川さんの家には日菜さんもいるからあながち間違いじゃないかもしれない。

「一ノ瀬さんそんなに震えてどうしたんですか」

「い、いえ。大丈夫です」

「そうですか。具合が悪くなったら言ってくださいね」

「気遣いありがとうございます」

そのまま氷川さんの後を追うようになっていく。

「ここです」

でかい。それが最初に感じた印象だった。

「何を突っ立っているんですか。入りますよ」

「あ、はい」

そのまま氷川さんの後をついていくと一つの部屋の前で止まった。

「ここで待っていてください」

「わかりましたよ」

氷川さんは部屋に入り何やらやっている。どうせ急いで部屋の片付けでもしているんだろう。氷川さんみみたいなタイプは案外部屋が汚いことが多いからな。

「どうぞ」

部屋の扉から顔を出し手招きしてくる。

「失礼します」

氷川さんの部屋はなんとも氷川さんらしい部屋だった。必要のないもの以外は置いていない。そんなシンプルな部屋だった。

「なんですかその顔は」

「いえ、別になんでもありませんよ」

「そうですか。なら早く初めましょう」

そう言っつて氷川さんはギターを取り出した。

「これは？」

「これは私が昔使っていたものです。一ノ瀬さんはこれでやってください」

「わかりました」

「つ、疲れた」

「お疲れ様です」一ノ瀬さん。いま飲み物でも持ってきてきますね」
「お願いします」

疲れた。とにかく疲れた。氷川さんはギターのことになると思えないからな。細かいミスをしたら最初からやり直しだし。最後なんて氷川さんと簡単な曲ならセッションできたし。

その後の氷川さんの顔はどこか勝ち誇った表情だった。まあ、純粹に成長を喜んでくれたんだろう。・・・多分。

「おまたせしました。一ノ瀬さんはブラックでも大丈夫ですか?」

「ええ、大丈夫です。ありがとうございます」

氷川さんからマグカップを受け取り口につける。おいしい。練習後の一杯は祝福のひとつときだな。その後は氷川さんと今日出された宿題を二人で片付けた。

「そろそろ帰りますね」

「もうこんな時間でしたか。そうですね」

氷川さんの部屋からでたときにその人はいた。これまた厄介なものに目をつけられたな。

「ユツキーじゃん!どうしてうちにいるの!」

「日菜さん。自分は氷川さんの忘れ物を届けに来ただけですよ」

「ふーん。それなのにお姉ちゃん部屋の部屋で何やってたの。何時間も終わった。氷川さんの方を見てみると手で顔を覆っていた。」

「その後一緒に宿題をしていたんですよ」

「・・・おねーちゃんとユツキーは別に一緒にやる必要ないでしょ」

「氷川さんがどうしても一緒にやりたいと言ってきたんですよ」

「・・・本当おねーちゃん?」

氷川さんと一瞬でアイコンタクトをとりうなずく。

「ええ、本当よ日菜。それにもう一ノ瀬さんは帰るところだったから見送りましたよ」

「ええー。あつ、そうだ!せっかく何だからユツキーご飯食べていきなよ!!」

「いや、そんな迷惑かけられませんよ」

「大丈夫だよ。お母さんにも言ってくるから！」

「いや帰ります」

そのまま玄関に急いで向かう。このままここにいたら絶対に厄介なことになる。そのまま靴に手をかけたその時向こう側の腕が掴まれる。

「どこに行くのユツキー」

「ちよっ、離してくださいよ日菜さん」

「ダメだよ。ユツキーがこのままいたほうが絶対になるんってするもん！」

「しませんよ。氷川さん助けてください！」

「日菜！一ノ瀬さんから離れなさい」

「いくらおねーちゃんのお願いでもそれは聞けないなあ」

「行くわよ一ノ瀬さん！」

氷川さんに反対側の腕を掴まれ引っ張られる。

「何やってるんですか氷川さん！」

「いいから帰るわよ！」

そのまま二人に腕を引っ張られる。

「痛いですよ二人とも！」

「ほらユツキー痛がつてるよ。おねーちゃん離してあげなよ！」

「それはこっちのセリフよ日菜。あなたこそ一ノ瀬さんから離れなさいー！」

そのままジリジリと二人が睨み合っていると、玄関の扉が開いた。

「ただいま。ん？」

「お、お邪魔してます」

それは氷川さんのお父さんだった。氷川さんのお父さんは可愛そうなものを見る目で見つめてきた。

「おかえりなさいあなた。あらあら」

そう言っリビングから顔を出してきたのは氷川さんのお母さんだった。氷川さんのお母さんは面白そうなものを見つけたような子供の顔をしていた。

「お、お邪魔しました」

「今日の夕飯一食分増やさないとね」

「さっずがお母さんわかってる！」

そう言っつて日菜さんとお母さんはウキウキのままリビングに向かって行った。

そのまま氷川さんのお父さんはポンつと肩をたたいて言ってきた。

「互いに苦労するな」

そう言った顔から今までの苦労がにじみ出ていた。

氷川家

時間は経ち時刻は午後七時を回ったところだ。今は氷川家のリビングのソファ―に座って、テレビを見ているところだ。すると隣に座っている氷川さんが口を開いた。

「すみませんでした一ノ瀬さん。日菜のせいでこんな事になってしまつて」

「いや、日菜さんに見つかった時点でこうなることぐらいはわかつていましたから。氷川さんは気を落とさないでください」

「それでも」

「まあ、氷川さんと晩御飯も一緒に食べられるんですからいいじゃないですか」

「い、一ノ瀬さんはそんなに私と一緒に御飯を食べたかったですか」
「そうですね。最近は氷川さんと一緒に食べることは楽しいです」

「／／／／／／／／／／／／／／／／」

「ほら紗夜、そこで惚気てないで手伝つて。あ、幸村くんはそこで座つてていいからね」

「もう、お母さん何を言っているんですか!!」

そのまま氷川さんはキッチンに手伝いに行つた。そして入れ替わるように氷川さんのお父さんが隣に座つてきた。

「なんだ、日菜の彼氏かと思つたが紗夜だったか」

「彼氏じゃありませんよ」

氷川さんのお父さんは本当かよ、つとといった目で見てくる。

「あ、そういうえばこないだの体育祭でも二人三脚やら借り物競争やら一緒にやつたよな」

そうだった。そう言えば手ぬぐいだって氷川さんのお父さんに外してもらつたじゃないか。

「それは、人数が余つてしまつて、それで氷川さんと組んだんです」

「にしてはやけに親しい感じに見えたんだが」

「一応友達ですから」

「そうか」

そう言つて片手に持つていたビールを口に流し込んだ。

「ほら、あなた帰つて来ていきなり飲む人がいますか」

「今日ぐらいいいだろ娘が男を連れてきたんだ。飲まなきややつてらんねえよ」

「全く。ほら、幸村くんはその人のことはいいからこつちにいらつしやい」

氷川さんのお母さんに催促されながら席に着く。

「こ、これは」

机の上にはとんでもない量のフライドポテトが並んでいた。隣に座っている氷川さんと目の前の日菜さんはこれと言つてなにも反応していない。もしかして氷川家ではこれが普通なのか。

「それじゃあ、いただきます!」

日菜さんの声とともにいただきますをする。

すると他の三人が一斉にポテトの入った皿に飛びついた。そしてとんでもないスピードでポテトがなくなっていく。

「冗談だろ」

「幸村くんどうかした?」

「あ、いえ。なんでもありません」

ここで、ポテトすごいですなんて野暮な質問をしたらダメな気がする。

「そう、遠慮なく食べてね。男の子なんて初めてだから作りすぎちゃった!」

「は、はい。ありがとうございます」

ポテトの横に申し訳程度に置かれている春巻きをとって食べる。

「あ、美味しい」

「あら、そう。そんなこと言つてくれる人この家にはいないから嬉しいわく。こんな年になつたら誰も言つてくれないから」

「本当に美味しいですよ。それにお母さんは全然若く見えますよ。さすが氷川さんと日菜さんのお母さんです」

「あらあら、こんなに若くて格好いい子に言われたら本気にしちゃう

わよ」

その時みぞおちにドツスと鈍い音がした。

「ひ、氷川さん。何するんですか」

「私が居る前でお母さんを口説くとはいい度胸ですね」

「べ、別にそんなつもりじゃ」

「覚悟は良いですね」

殺られる。そう思つて目をつぶったときに声がした。

「大丈夫よ幸村くん。紗夜のそれは単なるヤキモチだから」

「えっ」

「ちよ、ちよつとお母さん何言ってるの!」

「あら、違つた?」

「別にお母さんにヤキモチなんか焼くわけないわ」

「それなら」

そう言つて氷川さんのお母さんは自分の横に来ると抱きついてきた。

「紗夜の代わりにお母さんが幸村くんの事もらつちやおうかなあ」

「な!お母さん離れてください。一ノ瀬さんもニヤニヤしない!」

す、すごい。何がすごいとは言わないがこれが年上の余裕と言うやつなのか。

「お母さんばつかりずるい。あたしだつてユツキーのこと狙つていたんだから」

そう言つて日菜さんが反対側に抱きついてくる。

「ひ、日菜さん!?!」

「ちよつと日菜まで!ふたりとも離れなさいよ!!」

「ええくだつておねーちゃん、ユツキーに酷いことばつかするから可愛そうだよ。ね、ユツキー」

「えつと、それは」

「そうなのですか一ノ瀬さん。やっぱり一ノ瀬さんにきつく当たってしまう私は嫌いなのでしょうか」

氷川さんは少し潤んだ目で見つめ聞いてくる。

「はあ、氷川さん。別に自分は氷川さんのことは嫌いじゃありません

よ。だからそんな顔をしないでください」

「そんな格好で言われても説得力がありません」

「ああ、若いつていいわね。紗夜ももう少し素直になればいいのに。あ、幸村くん紗夜に飽きたら私はいつでも大歓迎よ」

「お母さんみたいな魅力的な人は自分には釣り合いませんよ」

「あらあら、本当にこの子は」

そう言つて頭をなでなれる。

「ほら日菜これ以上は紗夜が泣いちゃうから離れましょう」

「はい」

その後はみんな席に戻り夕飯を食べた。

「さて、今度こそ帰ります」

「そうですね。玄関まで送りますね」

荷物をまとめて立ち上がったときに声をかけられる。

「おいゆきむらー。風呂はいるぞー」

「えっ！」

「ほら早く着いてこい」

「いやこれから帰るところで」

「なら今日は泊まっていけ」

「えーと」

あの後もだいぶ飲んだのだろう。だいぶ出来上がっていた。氷川さんの方を見てみると大きいため息をついていた。

「お母さんお願い」

「あら、泊まっていけばいいじゃない」

「お母さんまで何言ってるの！大体いつもお母さんは考えがたりないのよー！」

そのまま氷川さんとお母さんは言い合いになってしまった。自分に女兄弟はいないからわからなかったが、女同士の喧嘩はとてつもなく怖いと言うのがわかった気がする。

「ほら、行くぞー！」

「ちよままま、ちよままま、ちよつと待ってちよつと！」

そのまま為す術なく風呂場まで連行された。

なんだこの状況。まるでどこぞの入浴剤のCMみたいだ。どうし

て氷川さんのお父さんと一緒に風呂に入ることになってんだよ!!

「ああ、生き返るなあ。どうだ幸村」

「そうですね」

「それで、紗夜とはどこまでやったんだ」

「ちよ、いきなり何言っているんですか！」

「なんだまだキスのひとつもしてないのか」

「するわけ無いでしょ！付き合っていないんですから！」

「なら、いつ付き合うんだよ」

「なんで付き合う前提なんですか」

「はは、まあいいか」

そのままお父さんは浴槽から出る。お湯だしぶ減ってるんだけど。

「幸村背中洗ってくれ」

「わかりましたよ」

それにしてもすごい体だな。すごい筋肉がついて腕も太い。渡されたボディタオルを泡立てて背中を洗う。

「いいもんだな」

「そうですか」

「ああ、見ての通りうちは女だらけでな男同士で風呂に入れるなんか思わなかった」

お父さんが言いたいこともわかる気がする。ずっと家に男が自分ひとりだと行き場所がなくなる。それに氷川さんも日菜さんも年頃だし、氷川さん達くらい年頃の娘だったら父親は煙たがられるからな。

「あとは、幸村が飲めれば最高だったんだけれどな」

「あと、三年は我慢してください」

「お！なんだ三年後も家にきてくれるのか」

「氷川さん達と仲が良かったらですけどね」

「はは、なら楽しみに待っているか。よしじゃあ今度は俺が洗ってやるよ」

「いや、そんなことさせられませんよ」

「いいから座れ」

そのまま場所を入れ替えられて背中を洗われる。案外人に洗ってもらうと気持ちがいい。

「おい、幸村」

「なんですか」

「紗夜のことよろしく頼んだぞ」

「……はい」

その一言を答えるのにとてつもない勇気が必要だった。

「それで、紗夜は実際に幸村くんのごことはどう思ってるの？」

さつきまで言い合っていたのに、一ノ瀬さんとお父さんがいなくなったらこれだ。

「別にただの友達よ」

「あなたいい加減にもたもたしているとあんない子すぐに取りられちゃうわよ」

「それは大丈夫よ。彼、私以外に友達はいないから」

「あら、もしかしたら紗夜に内緒で本当は他の女の子と仲良くしてるかもしれないわよ」

まさか、一ノ瀬さんに限ってそんなことは。でも、一ノ瀬さんは顔もいいし頭もいい性格だって私以外には優しいし、いや最近は私にも優しい。だとしたらもしかして一ノ瀬さんって優良物件なのでは。

一度考え出すと一気に不安に襲われた。

「ほら、その顔じゃ否定できていないでしょ」

「それは」

「まあ、アドバイスできるとしたらひとつね」

「なに！教えてお母さん」

「これは私がお父さんにやったことなんだけれど」

ゴクリと喉を鳴らす。

「私抜きじゃ生きていけなくすればいいのよ！」

「どういうこと？」

「例えば料理だったら毎日手作り物を食べさせて他の女が作った料理は口に合わせないようにするとか。簡単に言ってしまうばこんなこ

とよ」

「そんなことお父さんにしてたのお母さん」

自分の母親なのに少し引いてしまった。

「まあ何でもいいけど早くすることしちやえばいいのよ。あ、でも避妊はしっかりしてよね！」

「お母さん!!」

「キヤー紗夜ちゃんが怒ったー!」

そのままお母さんは自分の部屋に逃げていった。いつもお母さんと日菜の相手には疲れる。あとお酒を飲んだお父さんも。

その時脱衣所から一ノ瀬さんが出てきた。

「あ、氷川さんすみません先に入ってしまった」

「別にいいわよ。もとはと言えばお父さんに連れて行かれたんだし」

「それもそうですね」

そう言っつて一ノ瀬さんは私の横に座ってくる。お風呂上がりだろうか。一ノ瀬さんがいつもより色っぽく見える。

「どうかしましたか氷川さん?」

「い、いえ別になんでもないわよ。それじゃあ私入って来るわね」

「わかりました」

そう言っつて脱衣所に行く途中にお父さんとすれ違った。

「あ、そうだ紗夜。幸村は紗夜の部屋に泊めてやってくれ」

「えっ」

「じゃあ、お休み〜」

そう言っつてお父さんは寝室に戻って行った。ま、まあ、とりあえずお風呂に入りますよう。

「ふう、さっぱりしました」

「あ、氷川さん。どうぞ」

「ありがとうございます。一ノ瀬さん」

「そのひとつ聞いてもいいですか氷川さん」

「なんですか？」

「今日自分はどこで寝ればいいのですか」

「えっと、それは」

氷川さんの歯切れが悪い気がする。あ、もしかして。

「もしかしてリビングで寝ればいいんですか？」

「違います」

「それならどこで寝ればいいんですか」

「私の部屋で一緒に寝ます!!」

「……はい？」

「だから、私の部屋で一緒に寝ます!!ほら、行きますよ」

そのまま氷川さんに腕を引かれながら部屋に連れて行かれた。

「それじゃあ、自分は床で寝ますね」

「そうしてください。それならせめてこのクッションを使ってください

い」

そうやって氷川さんが渡してきたのは犬のクッションだった。

「それじゃあ、おやすみなさい」

「はい、おやすみなさい氷川さん」

そのまま部屋の電気を消す。やばい寝れない。近くに氷川さんがいると考えるだけで寝れなかった。

そのままゆっくりと目を閉じて闇に意識を委ねた。

その翌目を覚ますと何故か隣に氷川さんがいたときは焦った。

将来

眩しい。朝日がカーテンの隙間から顔を照らす。その光を避けようと体を動かすと、何かに当たる感覚がある。その感覚が何なのか確かめようとゆっくりと目を開ける。

眼の前にいたのは女の人だった。その人は生まれたままの姿で朝日に照らされている。その光景は中世の有名画家が絵に収めたくなるような美しさだった。

「んっ」

その女性はゆっくりと眼を開いた。その顔はこの世の何よりも美しいと感じた。

「もう朝ですか。おはようございます」

「.....」

「どうしたの変な顔をして」

もしかしてこれは夢なのではないだろうか。そもそも昨日自分は氷川さんの部屋で寝たはずだ。この景色には覚えがない。

その時ムツギユツと頬を掴まれた。

「どうしたの。そんなほうけた顔して」

「あ、いえ。なんでもありません」

「そう。ならいいのだけれど」

そのまま枕元にあったスマホで時間を確認すると時刻は8時32分だった。

「もうこんな時間！急がないと！」

そのままベッドから飛び出して部屋をでていった。そのまま置いていかれた自分は何をすることもなく布団をかぶった。どうせ夢ならばいいものを見させてもらった。すると先程部屋から出ていった女性が勢いよく扉を開いた。

「何をしているの早く準備しなさい。幸村」

「えっ」

どうやらこれは夢ではないらしい。

部屋から出てなんとなく隣の部屋のクローゼットを開くと、そこにはメンズ物の服が並んであった。そのまま服を着替え洗面所に向かう。なぜだかこの家の構造がわかっていった。

その目の前にあった鏡に映っていたのはなんともドラマの二枚目をやっていそうな顔をした青年の顔がそこには映し出されていた。

「これが自分か」

なんとも不思議な感じはしたが変に違和感がなかった。

そのまま顔を洗い、髪をセットする。その後ダイニングに行くところトーストの焼けた匂いとコーヒーの香りがたちこめていた。

「全く遅いわよ。早く座って」

「ああ、すみません」

そう言って催促してきたのは先程の女性だった。エプロンを身に着けサラダとスクランブルエッグが載った皿をキッチンから運んでくる。

席に座りトーストをかじる。

「おいしい」

「そう。今日は時間がないから簡単なものしか作れなかったけど」

「いや、すごく美味しいです。このサラダだつてとても新鮮で美味しい」

「ありがとうございます」

「……………」

そのまま会話もなく食事を続ける。あたりに響き渡るのは食器の

音とテレビの音だけだ。

その時不意に顔を上げると眼の前の女性と目があつた。

「どうかしましたか」

「幸村。あなたもしかして具合でも悪いの？」

「いえ、別に特には」

「嘘ばかり。言葉使いだつて昔に戻つていて、それにさつきから全然私の顔を見ないように避けているし」

そんな些細なことで違いがわかるのか。すごい人だな。

そのときテレビの方から気になる音が聞こえてきた。

「なんと遂にあの2つのバンドが対バンを行うとのことですよ！」

やけにテンションが高いニュースキャスターの声がダイニングに響き渡る。

「あら、もう発表したのね」

どうやら目の前にいた女性は何のことだかわかるらしい。

「いやー、遂にこのときが来ましたね。全国のファンはどれほど待ち望んだことでしょうか」

「そうですね。なんとと言っても今の音楽業界で今一番勢いのあるRoseliaとNamelessが遂に対バンを行うとなれば一大ニュースですよ！チケットの倍率の方もすごいことになるでしょう」
「それではここで二組のライブ映像を御覧くださいい！」

そう言つて今度は過去のライブ映像らしきものが流れた。Roseliaならあの喜びようはわかるけれどももう一つのNamelessというバンドは何なのだろうか。

Roseliaのライブ映像を見てみると自分が知っている演奏技術とは比べ物にならないくらいうまく見えた。それにメンバーの顔つきも大人に見えた。

(そうならばあれは氷川さんなのだろうか)

テレビに映し出されたのはギターのソロパートを弾いている氷川さんらしき人だった。どうやらファンの人達からはサッドネスメトロノームという相性で親しまれているらしい。それに男性ファンも多いのだとか。

「やっぱりここのところミスしてたわね」

「えっ」

「どうしたの幸村。そんなに驚いた顔をして」

テレビの氷川さんと目の前の女性の顔が一緒に見える。

「もしかして氷川さん」

「何を言っているの幸村。私はもう氷川さんじゃないわよ」

「何を言ってる」

「はあ、まだ寝ぼけているの。私の名前は一ノ瀬紗夜よ」

一ノ瀬紗夜。確かに目の前の女性はそう言ったのか。どうやら冗談を言っているようには見えない。

「続いてはNamelessのライブ映像です！」

そう言っただけで映し出されたのは先程洗面台で見た顔がギターを弾いていた。テレビのテロップには一ノ瀬幸村と書かれていた。

「嘘・・・だろ」

「何が嘘なのよ」

「いや、だってなんでテレビに自分が」

「当たり前じゃない。Namelessのギターはあなたでしょ。全く本当にどうしたのよ。これから会議があるのに大丈夫？」

どうやらこれは最悪の夢を見ているらしい。

「すみません遅れました」

そう言っただけで氷川さんが会議室2と書かれた扉を開いた。

「あ、もう。紗夜遅刻だぞ」

「すみません今井さん。ちよつと起きるのが遅れてしまつて」

「紗夜が寝坊なんて珍しいね」

「こちらの方をチラリと見られた。」

「ふくんそつかあ。昨晚はお楽しみだったわけね」

「今井さん!!」

「ごめんごめん。そんなに怒らないですよ」

「はあ、全くあなたのそういうところは何年たつても変わらないのね」

その時扉が開きスーツを着た女の人が入ってきた。

「皆さん。そろそろ会議の方を初めますから席に」

そう言い全員が席に着く。

「一ノ瀬さん。どうかしましたか」

いやどこに座ればいいんだよ。

「おい、幸村何突つ立てんだよ。こっち来いよ」

そう言ってきたのはチャライイケメンだった。言われた通りに席に着く。

「どうした幸村。そんなに昨日は激しかったのか」

「何言っているんですか!」

その一言で部屋が静粛に包まれる。

「わ、悪い悪い冗談だよ。でもどうしたんだ急にいつもならお互い様だろと嫌味のひとつで返すところだろ」

「あ、いや。こちらもすみませんでした」

「ごほん!そろそろ初めたいのですがよろしいですか?」

「すみません。二人には後で言っておきますので」

そう答えた男の顔に見覚えがあった。

(神宮寺正宗。どうしてここにいる)

その後の会議は日程や場所などが事細かく話し合われた。

「このような内容で大体は進みますが大丈夫でしょうか。なければ最後は一ノ瀬さんに締めてもらいますか」

そう言つて全員の視線が集まる。

「え、自分ですか?」

「そうですよ。いつも会議の終わりは一ノ瀬さんがまとめて締める
じゃないですか」

「えっと」

どうしよう。こんなことになるなんてわからなかったから何も考
えてなかった。

「すみません。今日の幸村は少し具合が悪いので代わりに私がやりま
すね」

「そうでしたか。それならば紗夜さんお願いします」

そのまま氷川さんが今日のまとめを話し会議は終わった。

「さつきはありがとうございます。氷川さん」

「別にあなたの具合が悪いのはわかっていたから。あといつもみたい
に名前で読んで」

「すみませんでした。紗夜さん」

「はあ、さんをつけるのね。まあいいわ帰るわよ」

「はい」

地下に止めてあった車に乗り込む。もちろん助手席だ。この体の
一ノ瀬幸村が運転できたとしても自分にはできないからな。

「帰りにスーパーに寄って行きたいのだけれど」

「別に大丈夫ですよ」

「そう」

そのまま氷川さんが車を動かす。車の中は静寂でお互いに会話のひとつもなかった。

「……………今日何が食べたいかしら」

「紗夜さんが作るのだったらなんでも美味しいから何でもいいですよ」

「何でもいいが一番困るのよ」

そのままスーパーにより食材を買い込んでいく。氷川さんはさり気なくかごの中に冷凍ポテトを入れている。こういうところは年をとっても変わらないな。

「どうしたの」

「いや。変わらないと思って」

「……………悪い」

その反応も変わらないな。

レジで会計を済ませ食材を車に乗せる。今思ったけれどこの車はいやつじやないのか。それに朝いた高層マンションだつて最上階だったし。

「ほら、早く乗って」

「ああ、ごめん」

そのまま車に乗ろうとしたところでポツポツと雨が降ってきた。

「タイミング良かったわね」

「そうですね」

そのまま家まで車を走らしている途中に氷川さんが口を開いた。

「思い出すわね」

「何をですか」

「あなたが私に告白してきた日よ」

「えっ！」

「まさか忘れたなんて言わないわよね」

「そ、そんなわけないですよ」

「そうよね。忘れてたなんて言ったらどうしようか考えたところよ」

あ、危なかった。それにしても自分から氷川さんに告白するなんて。一体何があったんだ。

「本当にあのときの幸村は今までで二、二番目にかっこよかったわ」
「そうですか」

その時氷川さんは急に車を止めた。
「どうしたんで」

その言葉を言い切る前に口をふさがれた。

「ひ、氷川さん。なにを」

「一ノ瀬さん。私をよろしくお願いしますね」

「何を言って」

段々と目の前が暗くなり意識がなくなった。

「これだけヒントを上げたんだから頑張りなさい」

そう言って頬にキスをされた。

「ほら、いつまで寝ているんですか一ノ瀬さん!!」

「ん。氷川さん」

眼を開けるとそこには氷川さんがいた。

「どうして氷川さんが」

「どうしても何もあなたが昨日私の部屋で寝たんじやない」

「そう言えば」

段々と昨夜の記憶が戻ってきた。

「朝食も準備してますから。早く起きてください」

「わかりました」

やっぱりあれは夢だったのだから。それにしても氷川さんがあんな

なに美人になっているなんて。一体何を考えているんだ自分は。

「どうかしましたか。一ノ瀬さん」

「何でもありませんよ。すぐに行きますね」

「早くしてくださいよ」

そう言つて氷川さんは部屋を出ていった。

将来氷川さんもあんなに美人になっているのだろうか。そんな事を考えながらリビングに向かった。

お出かけ

氷川さんの家に泊まった日から数日がたった。あの日見た夢のことを未だに忘れられない。自分が氷川さんに告白をするか。

大人になった氷川さんがそう言っていたが本当なのだろうか。そもそも自分はともかく氷川さんは自分のことをどう思っているのだろうか。そんな事を移動教室に行く道中に考えていた。

「どうしたんですか一ノ瀬さん。さっきからぼーっとして」

ジーツと、氷川さんの顔を見つめる。

「な、なんですか。私の顔になにかついていますか」

「いや、キレイな顔だなと」

「い、いきなり何を言っているんですか一ノ瀬さん！セクハラですよ！」

ただ容姿を褒めただけなのになぜこんなにも言われなくちやならないんだ。

「いや、思い返してみれば氷川さんの顔をよく見たことがなかったと思ってる」

「だからってなんでいきなりそんな事してくるんですか！」

「なんでと言われましても自分にもわかりません」

お返しとばかりに今度は氷川さんがこちらの顔をじつと覗き込んできくる。こちらも負けじと見つめ返す。すると段々と氷川さんの顔が赤く染まっけいき顔をそらされる。

「そらさないで」

氷川さんの顎を持ち上げ見つめ直す。氷川さんは逃げようとするが壁際まで追い込んで逃げ道を塞ぐ。

「氷川さん。いや、紗夜キレイだよ」

「な、な、何を言ってる。よ、呼び捨てで」

「紗夜が呼び捨てで呼べと言ったじゃないか」

「わ、私はそんなこと……言っていないよ」

「それなら氷川さんのほうがいいですか」

「べ、別に嫌だとは……言っていないわ」

「そうですか」

そのまま氷川さんを見つめながら聞いた。

「紗夜キスしてもいい?」

「い、一ノ瀬さん何を言っているの。正気に戻って」

「自分は正気ですよ。逆に今までがおかしかったんです。こんな近くに魅力的な女性がいるのに何もしないなんて。それよりもイエスカノーで答えてくださいよ」

「……」

「何も答えないと言うことは肯定と同じ意味ですよ」

氷川さんは受け入れたのかゆっくりと目を閉じる。そのままゆっくりと顔を近づけ耳元でささやく。

「まあ、これ全部ウソなんですけどね」

「えっ」

そのまま氷川さんから離れる。

「氷川さん今どんな気持ちですか」

なんでもネットで調べてみたところ、異性にこうしてみると相手が自分のことをどう思っているのかがわかるらしい。

「……」

氷川さんが小さな声で何かをつぶやく。

「氷川さん?」

「こんな事をおきながらどんな気持ちですかって、最悪よ!!」

氷川さんは拳を振り上げ、気がついたときには腹に衝撃が来ていた。

「そこで反省していなさい!!」

そのまま氷川さんは先に行ってしまった。

「やばい完全にやらかった」

ふらつく足取りで教室に向かった。

「氷川さんこれどうぞ」

そう言つて購買から買つてきたポテトを差し出す。氷川さんはそれを光の速さで奪い取りもぐもぐと食べ始める。

「氷川さん先程はすみませんでした」

「……」

氷川さんはこちらを見つめてくる。

「許しません」

「もう一個買つてきます」

「早くして」

そう言つてもう何回目になるかわからないやり取りをして購買に向かう。

「あら、あんたまた来たの」

「すみません。ポテトください」

「あんたねえ、さっきので売り切れちゃったよ」

そ、そんなばかな。ここでポテトを買つていかなきゃもう氷川さんは本気で許してくれなくなるだろう。

なんて言えればいいのかその事を考えながら教室に戻ると氷川さんは遅いっといった目で見てくる。

「遅いわよ」

「すみません」

「それよりも早く頂戴」

「もう売り切れてしまいました」

「そう、それじゃあさようなら」ノ瀬さん

「許してください氷川さん。何でもしますから見捨てないでください」

「ふーん。いまなんでもって言ったわね」

「はい。氷川さんが望むことならどんなことでもします」

「一ノ瀬さん週末は暇よね」

「えっとその日はバイトが」

「さようなら一ノ瀬さん」

「嘘です！暇です」

「そうそれなら週末10時に駅前にきなさい」

「わかりました」

はあ。マスターに週末休むって連絡しなくちゃな。そのあとは氷川さんの機嫌も戻り少しは安心した。

そしてやってきた週末。約束通りに駅前まで来た。しかも集合時間よりも三十分も早くだ。どうせ自分のほうが早くこないと氷川さんはグチグチ言ってくるからな。

集合場所の時計台のしたにはすでに見知った顔があった。嘘だろ。これでも三十分も早く来たのに。

「あ、おはようございます。一ノ瀬さん」

「おはようございます。氷川さん。早いですね」

「どうせ一ノ瀬さんが私よりも早く来るだろうと思って先に来て待っていました」

「そ、そうですか」

ああこれはグチグチ言われるパターンのやつだな。

「それよりも一ノ瀬さんなにか言うことはありませんか」

ほら来た。どうせ自分から先に謝れってことなんだろう。

「すみませんでした」

「どうして謝るんですか」

「え。氷川さんよりも遅く来たことに怒っているんじゃないんですか」

「そんな訳ありません」

それじゃないとしたら何かあったか。すると氷川さんは着てたスカートの裾をパタパタとしている。

「もしかして暑いですか」

「はあ、一ノ瀬さん本当にあなたはデリカシーがないわね。これなら昨日のイケメンモードの方が良かったわ」

「今日の紗夜の服装とても似合ってるよ」

「えー！」

「本当は気がついていたらけれど素直に褒めるのが照れくさくて。すみません」

「い、いや。気がついてくれたのなら別にいいけれど」

「それなら良かった。それじゃあ行きましょか」

「一ノ瀬さんもしかして今日はずっとそのままなの」

「紗夜はこっちのほうが好みでしょ」

「ま、まあいつものデリカシーのない一ノ瀬さんよりはいくらかましよ」

「なるほど。じゃあ戻りますね」

そう言っっていつもの状態に戻る。

「あっ」

「どうかしましたか氷川さん」

「べ、別になんでもないわよ」

「そうですか。なら行きましょうか」

そのまま二人で駅の中に入って行った。

や、やばい。人が多すぎる。休日だからなのか妙に若者が多い気がする。

「氷川さんこれどこに向かっているんですか」

「ネズミーランドよ」

「嘘ですよね」

「本当よ」

本気で行っているのか氷川さんは。ネズミーランドは氷川さんが絶対に行かないである場所ナンバーワン候補だぞ。

「急にどうしたんですか」

「別に何でもいいでしょ」

そう言っつて氷川さんは投げやりに返す。スマホでネズミーランドイベントで検索をかけるとトップに出てきたのはわんわんフェスティバルというイベントだった。

「もしかしてわんわんフェスティバルですか」

そう聞くと氷川さんはびつくとなる。

「なるほど本当は行きたいんですけど一人でネズミーランドに行く度胸はなくて自分を誘ったわけですか」

「そんなわけないじゃない」

そんなこと言っているが顔が明らかに動揺している。

「まあ、今日は氷川さんの言うことは聞きますよ」

「そうして頂戴」

「やっと入れた」

入場券を氷川さんのぶんまで購入してからやっと園内に入れた。それにしてもカップルが多い。正直言って居心地が悪い。

「ほら、行きますよー」ノ瀬さん！

「待ってくださいよ氷川さん」

やばい氷川さんのテンションがいつも異常に高い。氷川さんもこういうところでは女の子なんだな。

「それで最初はどこに行くんですか？」

「まずはあそこです」

事前からどこから回るなどは予め調べてきているらしい。氷川さんの後をついていくとそこはわん助の家という場所だった。

「ここは」

どうやら中にいるわん助と写真を取れるとか。

「一ノ瀬さん早くしてくださいー」

「そんなに急がなくても大丈夫ですよ」

列に並ぶこと20分弱やっと中に入れた。

「はーい。カップルさんですね。どうぞー」

「いや、違います」

「あ、そうでしたか。頑張ってくださいね」

いや、何を頑張ればいいんだよ。

「わん助。かわいい」

氷川さんがポテトを目の前にしたときと同じ顔をしている。

「ほら、彼氏さんも入って入って」

「いや、自分は」

「ほら、一ノ瀬さんも早く来てください。迷惑がかかるでしょう!」

「はあ、わかりましたよ」

言われたとおりに氷川さんと並んで写真をとってもらおう。取り終わった写真を現像してもらおうと顔が死んでいる。それとは対処的に氷川さんはニコニコして差がひどい。

「一ノ瀬さんはもうちよつと笑えないですか」

「パリピの男以外はこんなもんですよ」

「なら、パリピになつてください」

「それだけは無理ですよ」

「それで、次はどこに行きますか」

「そろそろお昼にしましょうか」

時間を確認してみると一時になろうとしているところだった。

「わかりました。どこで食べますか」

「それなら予約していた店があります」

氷川さん準備良すぎるだろう。

「なら、行きましょか」

「ちよつとその前に行きたい場所が」

「どこですか」

「察してください」

「……早く行つて来てください」

「……………遅い」

確かにテーマパークの女性のトイレはアトラクション並みとは聞
くが三十分近くは長すぎるだろう。お腹も減ったし。

「電話かけるか」

スマホを開き氷川さんの番号に電話をかける。だが何コールして
もつながらない。

「はあ。どこ行っただ」

とりあえずメインストリートに戻るか。最悪そこで迷子放送でも
かけてもらえばいいか。

「見つけた」

氷川さんらしき人は見つけたが明らかにめんどくさいことになっ
ている。何やらどこぞのカップルに目をつけられたのか絡まれてい
る。

その時男のほうが氷川さんの腕を掴む。その光景を見た瞬間に走
り出していた。

「人の連れに何やってんだ」

そう言って男の肩を掴む。

「一ノ瀬さん！」

「なんだお前」

「何があったかは知らないけど女に手を出そうとしている時点でお前
は男として終わってるよ」

「何言ってるんだお前」

「しらばっくれんなよ。今紗夜に何しようとしたんだ」

「何を勘違いしているか知らんが彼女には落とし物を拾ってもらった
からそのお礼をしようとしただけだ」

「言い訳もここまで来ると白々しいな。もうちょっと良い言い訳は思

いつかなかったのか」

そのときにおもいつきり後頭部を叩かれる。

「紗夜何して」

「一ノ瀬さんその人たちが言っていることは本当です」

「……嘘ですよね」

「本当です。そちらの彼女さんが財布を落としていたので拾ってあげたんです」

「そ、そのありがとうございました！」

「ふふ、これも何回目のやり取りでしょうね」

「す、すみませんでした!!」

そう言って彼氏さんの方に頭を下げる。

「まあ、良いってことよ。俺も逆の立場だったら同じことしてたと思うしな」

「一ノ瀬さんが迷惑をかけました」

「嬢ちゃんは気にすんなよ。それにこいつはいい男だからちゃんと首根っこ掴んどきな」

そのカップルはそう言うとそのまま行ってしまった。

「はあ。やってしまった」

「遅れてしまってすみませんでした」

「いや、氷川さんが無事で良かったです」

「それにしても一ノ瀬さんさつきはかつこよかったですよ」

「からかうのはやめてください」

「そうですか。それよりもレストランに急ぎますよ」

その後は閉園時間まで氷川さんに園内を連れ回された。

「それじゃあここで」

「はい。また明日」

氷川さんと別れて暗くなった夜道を歩く。それにしても今週はやらかすすぎた。何かと氷川さんにちよつかいをかけては余計なことになって。

あまつさえ今日は公衆の面前で恥かいたし。あれはいくらなんでもないだろ。あれじゃあただのイキリトだよ。

いやあれは氷川さんが遅かったから自分は悪くないし。

「なんなんだよ全く」

今までの氷川さんとの思い出を思い返してみる。

ライブを見に行ったこと、お菓子作りを一緒にしたこと、体育祭で一緒に走ったこと、七夕祭りを一緒に回ったこと、氷川さんの家に泊まったこと、今日遊園地と一緒にいったこと。

それに今日の氷川さんが他の男に掴まれたときにカツとなったこと。

(ああ、そうかやっぱり)

「氷川さんのことが好きなんだなあ」

生まれて十数年。友達さえろくにできたこともなかった自分がまさか人を好きになるなんて。

無意識にスマホを開き天気のアプリを開く。来週の天気は雨だった。

看病

「はあ」

目の前にある鏡を覗き込んでみると、そこにはいつも以上にやつれた顔をした自分が写り込んでいた。こうなつた理由は明白だ。結局昨日あのまま寝付けずに学校に来たらこのざまだ。

顔を洗う。これで少しは見れる顔になっただろうか。そのままトイレを出ると見知つた顔が待ち構えていた。

「氷川さん。どうしたんですかこんなところで？」

氷川さんは大きなため息をつき答えた。

「あのねえ、朝から一ノ瀬さんの様子が悪そうだったからついてきたのよ」

「別に自分は具合が悪いなんてことは」

だが、体の方は限界が来ていたのか軽いめまいがして少しふらつく。

「一ノ瀬さん！」

咄嗟に氷川さんが体を支えてくれる。ち、近い。ただでさえ今日は氷川さんに近づかないように意識していたのにこうも近かつたら嫌でも意識してしまう。

「は、離れてください」

すると氷川さんは強い口調で言ってきた。

「病人はおとなしくしなさい！」

「・・・はい」

これに関しては言い返すことはできなかつた。

「それじゃあ失礼しますね」

そう言つて氷川さんに体を持ち上げられる。それはいつしかのお姫様抱っこだった。

「ひ、氷川さん下ろしてください！」

「良いから黙つていなさい！」

抵抗虚しく保健室に連行された。

保健室に来てみると誰もいなかった。それを確認した氷川さんにベッドまで運ばれる。

「少しここで休んでいてください」

そう言い残し氷川さんは保健室を出て行ってしまった。

「はあ。やつちやたなあ」

結局氷川さんに具合が悪いことがバレてしまった。こんなことになるなら今日は無理せず休めばよかった。それにしてもまた抱っこされるなんて。普通は逆だよな。いや、氷川さんを抱っこできる力なんてないけど。

その時扉が開いて氷川さんが入ってきた。

「どうしたんですか今は授業中のはずですよね？」

「帰りますよ一ノ瀬さん」

「……えっとどういうことですか？」

「言っただままの意味です。早退しますよ」

「いや、でも今日は親もいないのでこのままじゃ帰れませんよ」

「はあ、本当にこういう時は察しが悪いのね」

氷川さんは心底呆れた顔で言ってくる。

「私が一ノ瀬さんと一緒に帰ります。ほら行きますよ」

「でも、氷川さん授業はどうするんですか？」

「授業なんかよりも、今は一ノ瀬さんのほうが大事です」

その一言で心臓の鼓動が早くなるのがわかる。全く人の気持ちも考えてほしいものだ。

「わかりました。それじゃあ行きましようか」

結局氷川さんに付き添われて家まで帰った。

「ここが一ノ瀬さんの家」

「いま鍵出しますね」

カバンから鍵を取り出そうとするが意識が朦朧としてなかなか鍵
が取り出せない。

「貸してください」

それを見かねた氷川さんがカバンと取り上げる。

「これですか？」

「・・・それです」

鍵を開け中に入る。

「一ノ瀬さんの部屋はどこですか」

「・・・二階の一番奥の部屋です」

「わかりました」

そのまま肩を借りて階段をのぼる。やばい結構限界近いかも。

「一ノ瀬さん。もう少しです頑張ってください」

扉に手をかけ部屋に入ると同時に倒れ込んだ。

どうも一ノ瀬さんの様子がおかしい。朝から顔色も悪く見える。それに心なしか避けられている気がしてならない。

ふと、一ノ瀬さんの方を見てみると具合が悪そうな顔で教室を出ていった。気になってその後を追いかけると保健室には向かわずにトイレに入っていた。

それから少し待っているときますます顔色が悪くなって出てきた。

「氷川さん。どうしたんですかこんなところで？」

全く人がどれほど心配しているかもわからずにどうしたんですか、じゃないわよ。思わずため息が出る。

「あのねえ、朝から一ノ瀬さんの様子が悪そうだったからついてきたのよ」

「別に自分は具合が悪いなんてことは」

すると、その時一ノ瀬さんの体が少しふらつく。

「一ノ瀬さん！」

咄嗟に手を伸ばし体を支える。

「は、離れてください」

その一言でムツとなる。人が心配しているのに離れる、だなんて。「病人はおとなしくしなさい！」

「・・・はい」

ようやく理解したのかやっとおとなしくなる。

そのまま一ノ瀬さんを抱っこして保健室まで運んだ。・・・相変わらず軽いと思った。

保健室に一ノ瀬さんを置いて教室に戻り先生に事情を話しカバンを持って教室を出る。

その後はほぼ強引に一緒に帰らせた。一ノ瀬さんを支えやっこの思いで家までたどり着く。鍵を開け中に入る。

「一ノ瀬さんの部屋はどこですか」

「・・・二階の一番奥の部屋です」

「わかりました」

「一ノ瀬さん。もう少しです頑張ってください」

扉に手をかけ部屋に入ると同時に一ノ瀬さんが倒れた。

「一ノ瀬さん！一ノ瀬さん大丈夫ですか！」

声を掛けるが返事がない。

「どうすれば・・・とりあえずベッドに運んで」

なんとか一ノ瀬さんをベッドまで運ぶ。そのまま額に手を当てる
ととても暑かった。

「とりあえず、タオルと飲み物を」

急いで脱衣所に行きタオルを濡らし一ノ瀬さんの額に乗せてあげる。

「後は、冷たい飲み物を」

するとその時腕を掴まれる。振り返って見ると一ノ瀬さんが腕を
掴んでいた。

「一ノ瀬さん。聞こえますか」

だが返事はなく息苦しそうに呼吸をしている。無理やり手を離そ
うとするが力が強くなかなか離してくれない。するとかすかに声が
聞こえる。

「……行かないで」

「……大丈夫ですよ。ノ瀬さん。私はここにいますから」

そう言つて優しく頭を撫でると安心したのか少し柔らかくなつた表情で寝息を立て始めた。

「……暑い」

ゆっくりと目を開けるとそこは見慣れた天井だった。頭の上に乗っている物が滑り落ちてくる。

「これはタオル？」

ふと横を見てみるとそこには氷川さんが手をつないだまま眠っていた。……これはどんな状況だ。もしかして倒れた後に氷川さんが運んでくれたとか。それしか考えられない。

全く今日はどれだけ氷川さんに迷惑かけたんだ。

「氷川さん？起きてください」

体を揺するがまるで起きてくれる気配がない。それにつないでいる手も離してくれない。

それにしても可愛い寝顔だな。好きだと自覚してから今まで以上に氷川さんがキレイに見える。

「紗夜好きだ。……なんてな」

「はあ、こんな簡単に言えば苦労はしないんだけど」

氷川さんも起きないしもう一眠りしよう。掛け布団を氷川さんに掛けてから再度目を閉じた。

「・・・ん」

起きてみるとあたりは真っ暗になっていた。スマホで時間を確認してみると時刻は八時過ぎだった。

部屋の電気をつけてみると氷川さんはもう帰ったのかいなかった。机の上を見てみると達筆な字で書かれた紙が置いてあった。

「しっかり休んで体調を直すこと！」

なんとも氷川さんらしい内容だった。体調の方は昨日の寝不足が原因だったので一眠りしたら、すっかり体の方は良くなった。

「明日はポテトでも作って行こうかな」

そんな事を考えながらリビングまで降りていった。

すっかり暗くなった夜道に一人の少女が歩いていた。その足取り

はどこか少しおぼつかないように見える。

「一ノ瀬さん」

声に出して呼んだ名前はいつもよりしおらしく聞こえる。

「はあ、これからどうやって接していけば良いのかしら」

まるで何かを思い悩むように口にする。

「い、一ノ瀬さんが私のことを好きだなんて」

動揺して思考が鈍くなる。早く帰って今日は寝たほうが良いのかもしれない。おぼつかない足取りで自宅までの道のりを急ぐ。

だが、先程から考えれば考えるほど体が熱くなって行くのを嫌でも感じる。もしかして彼からの風邪が移ってしまったのだろうか。そんな考えが頭によぎる。

なんとか家にたどり着きシャワーを浴びる。普段なら夕ご飯を食べるのだがあいにく今は喉を通る気配がない。そのまま自分のベッドに飛び込んだ。

その邪念を払うかのように布団をかぶる。いつもならばそのまま眠れるのだが今日はなかなか寝付けない。

その時彼との思いでが頭によぎった。

ライブを見に来てくれたこと。お菓子作りをしたこと。テニスで頭にボールをぶつけてしまったこと。体育祭で一緒に走ったこと。七夕祭りを一緒に回ったこと。うちに泊まりに来たこと。遊園地に行ったこと。私の音が好きと言ってくれたこと。

そして、私のことを「好きだ」と囁かれたこと。

その言葉に顔が熱くなる。鼓動が早くなる。背中がむず痒くなる。彼のことを考えれば考えるほど体中が熱くなる。

きつとこの暑さは気温のせいだ。最近は何夜でも暑くなってきている。自分にそう言い聞かせる。だけど胸も鼓動は収まってはくれない。

その時スマホが震えた。それは、今日は有難うございました。と彼からの連絡だった。

その時によく気がついた。いや、無理やり気が付かされた、と言ったほうが正しいのだろうか。

「・・・一ノ瀬さん。私もあなたのことが
好き」

このとき少女は人生初めての恋に落ちたのだった。

悶絶

「もうこんな時間か」

気怠い体を起こして目を擦る。結局昨日はあれからあまり寝付けずにいた。

「はあ、氷川さんにどんな顔して会えばいいんだか」

昨日の夜からアク抜きをしていたポテトをスティック状にカットする。

油を火にかけ、温まったところに先ほどカットしたポテトを入れていく。

(なんだかもう作り慣れたな)

いつの間にか作り慣れてしまった事実に驚かない自分がいた。

「よし、行くぞう」

できたばかりのポテトを鞆に詰め玄関の扉を開く。

「雨か」

もうそんな季節になっていたのか。少し憂鬱になった心に蓋をするように傘を開き雨の中に足を進めた。

ジリリリリリリ!

枕元にある目覚まし時計がけたたましい音を立てて部屋に鳴り響く。

「……うるさいわね」

音の鳴る方に手を伸ばす。

結局はあまり寝れなかった。寝ようと思えば布団を被ったら昨日の一ノ瀬さんの言葉が頭の中に浮かんできた。

「・・・紗夜好きだ」

その言葉を思い出すだけで顔が熱く、心臓の鼓動が早くなる。邪念を振り払うように布団からでる。

そのまま洗面台に行き顔を洗う。そもそもなんで私が一ノ瀬さん如きここまでドキドキさせられなきゃいけないのよ。

そう、落ち着いて考えてみれば別になんでもないわ。一ノ瀬さんなんて。

「・・・紗夜好きだ」

「ああッ！」

膝を抱え込み悶える。

(もうなんなのよなんなのよ!!)

昨日からずっとこの調子だ。考えないようにすればするほどぐるぐると頭の中をかき乱される。

(やっぱり私は一ノ瀬さんのこと)

いや私は風紀委員。その風紀委員自ら風紀を乱すようなことは。

いや、風紀を乱すとは何かしら。そもそも風紀とはなに？

「・・・はあ」

「一ノ瀬さんにどんな顔して会えばいいのよ」

そんなことを考えながら学校に向かった。ふりしきる雨がまるで私の心情を表しているようだった。

「おはようございますー！」

学校に着くとこんな天気だというのに風紀委員が校門に立ち元気に挨拶をしている。

その脇を見えないように通り過ぎようとしたところ目の前に氷川さんがいた。

「ひ、氷川さん。どうしてここに」

「お、おはようございます。一ノ瀬さん」

「ええ、おはようございます。氷川さん」

「昨日はありがとうございます。おかげで体調も良くなりました」

「そう。．．．それならよかったわ」

「．．．．．」

き、気まずすぎる。そもそもなんでここに氷川さんがいる。いつもならど真ん中にいるはずなのに今日に限ってこんな脇の方にいるんだ。

「それじゃあ自分は教室に行きますね」

その沈黙を無理やり破り氷川さんの横を通り抜けようとしたら、腕を掴まれる。

「ひ、氷川さん。どうかしましたか？」

「．．．ですか」

もごもごと口を動かす氷川さんの仕草がなんとも可愛らしく見えた。じゃなくて！

「えっと、聞こえなかったんですけど？」

「昨日．．．ですか？」

「昨日がどうかしましたか？」

ついに聞き取れない自分に嫌気がさしたのか氷川さんは大声で言った。

「ですから昨日の言っていたことは本当なんですか!!」

「昨日？」

昨日言ったこと？昨日は氷川さんに保健室に連れて行かれてから、家まで送ってもらって、看病までしてくれた。思い返してみるが特にこれといったことが思い出せない。

「すみません。昨日は氷川さんに迷惑ばかりかけて、もしかして自分氷川さんに失礼なことでもいつてしまいましたか？」

「覚えていない？・・・いや、たしかにあれは意識がはっきりしている時に言ったはず」

少し考えた仕草をした後に氷川さんは答えた。

「いえ、覚えていないのなら大丈夫です。さ、それよりも早く教室に行ってください」

そう言つて氷川さんは自分の背中を結構な力で押してくる。

「ちよ、ちよつと氷川さんそんなに強く押さないてくださいよ」

「いいから早く！」

そのまま無理やり昇降口まで運ばれた後に氷川さんは自分の持ち場に戻つていった。

「全くなんなんだ？」

氷川さんの態度に疑問を持ちながら教室に向かった。

さて、あれから時間も経ち昼休みになった。今日の氷川さんはどこか少しおかしい。ここ最近なら意味もなく休み時間は自分の席によつてきてなにかしらぐちぐち言ってくるのに今日はそれが一度もなかった。

だけど時折、いや頻繁に視線を感じる。なんだこのむず痒さは。言いたいことがあるならはつきり言う。それが氷川紗夜という人間のはずじゃないのか。

もしかしなくても自分の好意が氷川さんにバレたとか？

いやまさかそんなことはないと思うが。・・・いやもしかしてそれが原因だとしたら。そのことに何かしらの形で氷川さんが気づいたとして、自分との距離を置こうとしているとか。

朝、意味深なことを聞いてきたのもそういうことだったのかもしれない。

(あれなんだか無性に悲しくなってきた)

「はあ」

大きなため息をつき机に突っ伏した。

「そんな大きなため息をついてどうかしたんですか？」

「えっ」

顔を上げると目の前に氷川さんがいた。

「ひ、氷川さん。どうしてここに!？」

「どうしてもなにもいつものことじゃない」

いや、たしかにここ最近は一緒に食べているけど。

「えっと、氷川さんは自分のことが嫌いになっただんじやなかったんですか？」

そう言うとき氷川さんがぼかんとした顔になった。

「一ノ瀬さんあなたなにを言っているの？」

「だって今日の氷川さんの態度おかしかったですし」

はあ。と、大きなため息をつかれた。

「あのねえ一ノ瀬さん私がいきなり理由も無く嫌いになるはずないじゃない」

「そ、そうですか」

氷川さんのその一言が素直に嬉しかった。

「納得したのなら早く食べましょ」

そう言って氷川さんはいそいそとお弁当を広げ始める。

「さつきからなにじろじろ見て？」

ずっとじろじろ見てきたのは氷川さんの方などと言えるはずもなかった。

「なんでもありません」

「全く今日の一ノ瀬さんはどこかおかしいですよ」

それこそ氷川さんの方がおかしいですよ。と言えない情けない自分が恥ずかしかった。

「氷川さんこれ食べます?」

そう言つて朝から揚げてきたフライドポテトを差し出す。

「一ノ瀬さん急にどうしたんですか?なにが目的です」

「いや単純に昨日のお礼のつもりなんですけど」

「・・・見え透いた嘘ですね。大体最近の一ノ瀬さんは私をなんだと思つているんですか。軽々しくいきなり名前で呼んできたり、人のことを可愛いとか簡単に言つてきて」

「いや、そんなことは」

今になつてここ最近の行動を振り返つてみると自分がどれだけのことをしてきたのかわかった。それが今になつてとてつもなく恥ずかしく思えてきた。

「あんな態度私だから別にいいですけど、他の人には絶対にしないでくださいよ。あなたは顔はいいのだからそれで勘違いする人がいてもおかしくないんだから」

氷川さんは顔を赤くして詰め寄ってくる。

「わ、わかつてますよ。大体氷川さん以外にはやる相手なんていませんよ」

「いえ、わからないわ。一ノ瀬さんは目を離すとすぐに女の人を口説くんだから」

「いつ自分が女の人を口説いたんですか。変な言いがかりはやめてください」

「そうですね」

そう言つて氷川さんは少し考えてから答えた。

「体育の時に白金さんをその後には食堂で丸山さんを、そのあとあまつさえ日菜を口説いてたじゃない」

「いや、それはただの世間話程度でしょう」

「その世間話がダメなのです!」

「そんなこと言われても」

「それに他の女性には優しいくせに私は雑な態度で扱って」
「いや、決してそんなことはない」

「いや、決してそんなことはない。」

「一ノ瀬さんは最低です」

「そう言いながらポテトを高速で口に運んでいる。」

「それはすみませんでした」

「……」一ノ瀬さんは私のことどう思っているんですか」

「微かに聞こえる声でそう言ってきた。」

「なんて思っているかだなんて、氷川さんは自分にとって。」

「そこから先は考えるだけでも顔が熱くなってくる。」

「一ノ瀬さんどうしたんですか顔をそんなに赤くして。……もしかしてまだ具合が悪いのですか!?!」

「まあ、これも一種の病みみたいなものですよ」

「そう言っポテトにかじりついた。」

人生で一度は経験するであろう出来事とはなんだろうか。そんなことをどんだん強くなつていく雨を見つめながら考えていた。

「もう一度よく探してみるが見つからない。」

「はあ。なんだか最近ついてない気がする」

季節はもう梅雨に入ったのかここ最近雨が多い。そんな日は気持ちも必然的に暗くなる。そして憂鬱なまま学校や職場まで向かうことだろう。

そこで必要不可欠になってくるのが傘というわけだ。今の季節は嫌でも出番が多くなる。

そして今その傘がなくなっている。これじゃあまた風邪を引くかもしれない。

母さんに迎えにきてもらうか悩んだが、今日は数年ぶりに友達と会ってくるとか朝から言ってたから迎えにきてもらうのは無理だろう。父さんに限って言えば、まだ仕事中的はずだ。

「・・・しょうがない。もう少し待つか」

重い足取りで図書館に向かった。

なんだかここにくるのも久しぶりな気がする。ここ最近は何んだかんだ言って氷川さんにつきまとわれて放課後はそのままダラダラ過ごしていたからな。

あたりを見渡してみると自分と同じで図書館に来ている人はいつもよりも多く感じた。

久しぶりの定位置に座り教科書を開く。そこからひたすら教科書とノートを見つめ問題を解き続けた。

時計を見てみるとあれから90分もたっていた。

なんだか久しぶりに集中してできた気がする。

帰ろうとリュックに教科書を詰めながら窓の外を見てみるとさつきより雨が強くなっていた。

「結局意味なかったな」

近くのコンビニまで走ってそこで傘を買おう。そう決めて昇降口に行くところ氷川さんと白金さんがいた。

「あら、一ノ瀬さんあなたまで残っていたの」

「そうですよ。傘がぱくられましてそれで少し待ってみたんですけどやむ気配がないんでコンビニまで走ろうかと」

「それは災難でしたね」

「それじゃあ」

走ろうとした時に肩を掴まれた。

「少し待ちなさい。近くのコンビニまで行くのなら一緒にいきましよう。私が白金さんと一緒に帰りますから一ノ瀬さんはこれを使ってください」

そう言つて氷川さんは自分の傘を差し出してきた。

「いやそれは悪いですよ」

「いいから受け取りなさい。また風邪でも引かれたら迷惑ですから」

「そうは言われても」

そんなこんなで氷川さんと言い合っていると隣から小さな声が聞こえてきた。

「・・・あ、あの」

「どうしたの白金さん？」

「・・・わ、私用事を思い出したので先に帰ります」

そう言つて白金さんは急ぎ足で外に走って行った。

「ちよ、ちよつと白金さん待つて」

氷川さんが言い切る頃には白金さんの背中はずいぶん遠くまで行つてしまっていた。

「・・・行つちやいましたね」

「・・・そうね」

お互い思っていることは同じなのだろう。けどなかなか言い出せない。勇気を出せ自分昨日まではさらさらと口から出てきただろ。

「ひ、氷川さん良かったら入れてください」

「しよ、しようがないわね一ノ瀬さんは。また風邪を引かれると面倒だし特別に入れてあげるわ」

「ほら、早くしなさい」

「は、はい」

雨は憂鬱になるがたまにはいいなと思いつつ氷川さんと一緒に帰った。

氷の川に幸せを

相変わらず今日も今日とて雨が降り続いている。だがこんな天気も来週から晴れる見込みらしい。傘はパクられ、風邪を引くわこの季節は何一ついいことがない。早く梅雨明けになつて貰いたいものだ。そろそろ夏休みに入ることだし氷川さんとも一ヶ月近く会えないことになる。

確か去年の夏休みはバイトと家に帰つて勉強の往復だった。

一ヶ月。それは人生の中で見てみればとても短い時間だけれど学生の中の三年間でみればとても長く感じる。

もういつそ告白でもした方がいいのではないか。

いや、でももし断られたら今までみたいには接することができのだろうか。もしそのまま話さなくなつてしまふかもしれない。そしてまた一人ぼっちの学園生活を送ることになるかもしれない。

それこそできれば避けたいことだ。だけどいつまでもこの気まずい関係のままでもいいのか。その考えが頭の中でぐるぐると駆け巡っている。

「とりあえずいくか」

わざわざ昨日コンビニで買い直した傘を広げて学校に向かった。

「おはようございます。氷川さん」

最近は恒例となった挨拶を氷川さんにかける。

「……………」

だがいつまで経っても返事がない。

「氷川さん。聞こえてますか？」

「……………はあ」

口が開いたと思ったたら今度は大きなため息をつかれる。

「氷川さん！」

「ツ!!」ノ瀬さん。いつからいたんですか!？」

「いやさつきから声をかけてましたけど氷川さんが全然反応してくれないんじゃないですか」

「そう。それは悪かったわ。ごめんなさい」

「いや、そんな謝らないでくださいよ」

「おかしい。いつもなら絶対にこんな些細な口喧嘩でも氷川さんから謝ってくるはずなのに今日に限って謝ってくるなんて。」

「もしかして、朝ごはん食べてきてないんですか？」

「いきなり何を言っているのあなたは」

「いやだってあきらかにいつもよりも元気がないじゃないですか」

「別に私はいつも通りよ」

絶対嘘だ。こないだ一緒に帰った時はいつも以上に口煩かったのに今日はいきなりこのテンションだ。この土日の間に何かあったに違いない。

「そうですか。氷川さんが話したくなければ別にいいですけど」

「そうして頂戴」

これ以上は聞かないで頂戴と言わんばかりに氷川さんは話を終わらせた。

あきらかにおかしい。今日の氷川さんはどこか調子が悪いのか朝から暗い顔のままだ。授業中に当てられてもボーとしていたし。移動教室の時も気がついていないのか教室に一人で座ったままだし。

普通に心配になってくる。

「氷川さん。もう昼休みですよ」

昼休みに入ったのに一行に動かない氷川さんの机にお弁当を持って隣の席に座る。

「……ああ。もうそんな時間だったのね」

「……本当どうしたんですか。いつもの氷川さんらしくない」

「ねえ、一ノ瀬さん。いつもの私って一体なんなのかしら」

「え？」

一日中ボーとしてたと思っただけいきなり何を言い出してんだこの人は。

「いつもの氷川さんは規則正しくてやたら自分にだけ厳しく接する人じゃないですか」

「なら、日菜は？」

「日菜さんですか。日菜さんはいつもやかましくて周りの人を巻き込んで、それでいてやることなすことなんでも簡単に遂げちゃう人って感じですかね」

「そう」

聞きたいことは聞いたのかそのままお弁当を開けて食べ出す。

「……あの、氷川さん」

「……」

無視。まるでそこに誰もいないかのようにただ黙々とお弁当を食べ続けている氷川さんがなんだか無性に悲しそうな顔をしているように見えた。

「終わった」

ただ今頭の中にある言葉はそれだけだった。あの日から氷川さんに避けられる態度を取られて早3日。もう精神的に苦しくなってきた。もしかして今度こそ何かやらかしたのか。そう思い氷川さんに謝ったら。

「一ノ瀬さんには関係ないでしょ!!もうほつといってください!!」

と、教室のど真ん中で思い切り怒鳴られてしまった。それから言うもの自分も魂が抜けたように過ごしていた気がする。

「おい、幸村。ケータイ鳴ってるぞ」

「・・・」

「幸村!」

「ツ!!すいません別にサボっていたとかじゃなくて」

「そんなことは別にいいからよ。それよりもケータイなってるぞ」

そう言われてケータイを投げ渡される。

ディスプレイに映し出された文字は日菜の二文字だった。

「日菜さん」

「どうしたさつきからずっとなりやまないから早く出た方がいいんじゃないか。今なら誰もいないからよ」

「すみません。ありがとうございます」

一応断りを入れてから画面をタップする。

「もしも「ユツキーやつとでた!」

「いきなり耳元で大声出さないでくださいよ。それでなんの用事ですか」

「あのね。おねーちゃんがいなくなっちゃったの!!」

「・・・は？」

氷川さんがいなくなった？こんな雨の中？今の天気はまるで明日からの晴れに抵抗するかのようによく最近の中で一番の勢いで降り続けている。

「おねーちゃん。今日練習があつたのに傘を持っていかなかったからスタジオまで届けたら友希那ちゃんにおねーちゃんはいないって言われちゃってそれから探してるんだけどどこにもいなくて」
「そんな」

この雨の中傘も持たずにどこに行つたんだ。

「家に帰ったとかは」

「さっきお母さんに聞いたけれどいなくて言われて」

「そうですか」

やっぱりここ最近少し様子がおかしかったのも関係してるかもしれない。

「日菜さん。ここ最近家での氷川さんの様子はどうでしたか？」

「え。いきなりどうしたの？」

「いいから教えてください！」

「実は」

そこから日菜さんはポツリポツリと話し始めた。

「この前おねーちゃんと一緒にテレビ見ようって誘った時にいつもなら部屋でギターの練習してるはずなのに、その日はしてなくて。その後にはギターはもう弾かないって怒鳴られちゃったの」

「いつからそんな態度になつたんですか？」

「えつとこの前の休みの日には一緒にテレビ見てくれたからその時までは普通だったと思うけど」

「・・・そうですか」

こないだまでは一緒にテレビを見ていたのにいきなり日菜さんに強くあたることなんてあり得るのか。

「確かその時は一緒にパスペレのライブ映像を見たっけ」

「ライブ映像？」

「うん！この間やったライブがテレビで一部だけ放送されるから一緒に」

に見たんだよ」

「・・・まさか」

もしかしくなくてもここ最近の氷川さんの様子がおかしくなったのは日菜さんのライブ映像を見たから。いやそんなことありえるのか。でも氷川さんにとっては日菜さんの才能は何よりものコンプレックス。あながち間違いじゃないのかもしれない。

「自分も探しに行きます」

「本当!」

「当たり前です。このままじゃ氷川さんが危ないですよ」

「わかった見つけたら連絡して!」

「わかりました。必ず見つけ出します」

「うん。ユッキーありがとね」

「それじゃあ、後で」

と言ったもののバイトが終わるまではまだまだ時間がある。

「行ってこい。幸村」

「・・・マスター」

「もうすぐつぐみも帰ってくるだろうし、それにこの雨の中彼女一人で待ってんだろ」

「ありがとうございます!!」

急いでロッカールームで着替える。

「おい、幸村」

「なんですか?」

「男になってこい」

「え」

「ほら、行ってこい」

そのままマスターに背中を押されて飛び出した。

「はあはあ、クッソどこにいるんだ」

あれから学校、図書館、楽器店、ファストフード店、など色々回ってみたがどこにも氷川さんはいなかった。

もしかして家に帰ったのではないか。そんな考えが浮かんでくるほどに探し回っていた。こんなに走り回ったのはいつ以来だ。足の感覚がなくなってきた。自販機でコーヒーを買い気持ちを落ち着かせる。

空になった缶をごみ箱に投げ入れるが外れ奥の方まで転がっていった。

「はあ。こんな急いでいる時に限って」

缶を追いかけて路地裏に入るとそこに彼女はいた。なんにもせずただ雨に濡れて立ち尽くしていた。

「……風邪引きますよ」

「……」ノ瀬さん

久しぶりに正面から見た彼女の顔は雨のせいだろうか泣いているように見えた。

「ほら、帰りましょう。みんな心配してますよ」

「やめて!!」

「……氷川さん」

「もう、私のことはほっというと言ったはずでしょう!!」

「今この状態の氷川さんを見てほっとけるはずないでしょう」

「あなたには関係ないことよ」

「……日菜さんですよ」

「……」

「日菜さんから聞きました。こないだ一緒にパスペレのライブ映像を見たって」

「……」

「その日からですよ。氷川さんがおかしくなったのって」

「……日菜は関係ないわ」

「嘘です」

「嘘じゃないわ」

「……ならどうしてさつきよりも泣きそうな顔をしてるんですか」

「……どうして……どうして」

「一ノ瀬さんはこないだ行った七夕まつりを覚えてますか」

「……忘れるわけじゃないじゃないですか」

「……私はあの日短冊に、日菜とまっすぐ話せますように、って書いたんです」

「……」

「その日から少しずつですが日菜と昔のように話すようになったんです」

「でも、日菜の演奏する音を聞くのが怖かった。自分への劣等感、それに……日菜への憎しみが増していつてしまうから」

「そして久しぶりに日菜の演奏を聴いて……日菜の音は、私の譜面通りに弾く音とは違い技術にとられない魅力的な音に聞こえたの」

「あれは『音楽を楽しんでいる』……そんな音に聴こえた。日菜に負けないように、ただひたすら技術を磨いてきたけれど、私の音なんて……その程度の『つまらない音』なのだとはつきりと感じてしまった」

「いくら私が努力したって本物の天才の音には敵わない。勉強も運動だってそう昔から何一つ日菜には勝てなかった。もう……もう全部嫌なのよ、『つまらない音』を奏で続けている自分も、短冊の願いから

遠ざかっている自分も、全部・・・全部！」

「ふざけないでください!!」

「ッ!!」

「前にも言ったじゃないですか！自分は日菜さんが天才でギターの技術が上でも氷川さんの音の方が好きだと!!」

「自分は氷川さんの音が大好きです！こないだ一緒にセッションした時も前よりも、もっと魅力的に聴こえて・・・ずっと一緒に弾いていたいって思わせるような音でした!!」

「人をここまで魅力できる音が『つまらない音』なわけないじゃないですか！あの日氷川さんのライブを見てからこんな音を自分も出せるようになりたいと思って、ギターを始めましたよ！」

「天才には敵わない？ふざけないでください!!自分は氷川紗夜以上の天才を知りませんよ！」

「自分に勉強が敵わないからと言って毎回毎回死ぬ気で勉強して、それでも勝てなかったらまた死ぬ気で勉強し直して。ギターも部活も風紀委員も平行しながらですよ！」

「これを努力の天才って言うんじゃないんですか!!」

「だから・・・ギターを辞めるだなんて絶対に言わないでください!!」

「い、一ノ瀬さん・・・わ、私」

今まで溜まっていたものが溢れ出るように氷川さんの瞳からポツリポツリと涙が溢れ落ちてきた。

そんな氷川さんを優しく抱きしめる。

「氷川さんが今話してくれたことを日菜さんに話してください。きつと自分と同じことを言いますよ」

「・・・」

氷川さんは腕の中でコクリとうなずく。そこから二人で雨の中抱きしめあっていた。

ポテト好きの氷川さん

夏休み前最後の登校日となった朝。何故だかいつも以上に清々しい気持ちで通学路を歩いていた。今日の終業式が終わると明日から夏休みだ。

まあ、どうせ今年の夏休みも家に引きこもって勉強とバイトの往復だな。そんなことを考えながら校門をくぐる。

「おはようございます一ノ瀬さん」

「おはようございます氷川さん」

いつものルーティンとなっている挨拶をする。これも恒例行事も一ヶ月の間のお別れか。

「一ノ瀬さん。今日の学年代表の挨拶は考えてきましたか？」

「ええ、昨日徹夜してバツチり考えてきましたよ」

「そうですか。期待していますよ」

「期待しててください」

そう、この花咲川は終業式ごとに各学年の代表が壇上で一言ずつその学期の反省の振り返りを話すと言うものだ。これも毎回毎回氷川さんと自分が交互にやっていることだ。前は氷川さんだったので今回は自分の番というわけだ。

「それじゃあ先教室に行ってますね。風紀委員頑張ってください」

「はい。頑張りますね」

そのまま昇降口で靴を履き替え教室に向かう。

「結局告白出来なかったな」

あの日のことが頭によぎってきた。

もうどれだけの時間が過ぎたのだろう。傘も投げ捨て二人雨に打たれ続けている。このままだと二人して風邪を引いてしまうかもしれない。そんなことが頭の片隅で浮かんでいた。だが二人して、ただ抱きしめあっているそれだけなのにこの時間がなんとも心地よかった。

「だけどいつまでもこのままでいるわけにはいかない。そろそろ日菜さんに連絡をしよう」とスマホをポケットから取り出して見てみるとこの雨の寒さからか充電が切れていた。

「どうしょ」

とにかく氷川さんを説得して家に帰らないと。

「氷川さんとりあえず帰りましょう。このままだと二人して風邪を引いてしまいます」

「……いや」

「嫌じゃなくて。日菜さんも両親も心配してますよ」

「……いや」

「わかりましたからとりあえず離れてくださいよ」

「……いや」

さつきから子供のように嫌々を繰り返し続ける。これはいつしか見た甘えん坊モードなのか。いやそんなはずはない、と思いたい。

「とりあえず屋根があるところにはいきましようよ」

今度は少し間が空いてからこくりと頷いてくれる。その体制のままで近くの小屋に入る。

「……氷川さんスマホはありますか」

「……家」

「……そうですか」

「とりあえず。公衆電話で連絡してきますね」

氷川さんを引き剥がしてから外に向かおうと思い振り解こうとしたら捕まってくる力がさらに強くなる。

「ちよつと氷川さん離してください」

「……置いてかないで」

これはもうあれだ。今まで溜まっていたストレスとかもろもろが重なって幼児退行してしまっている。

「自分はどこにも行きませんよ」

そのまま氷川さんの頭を撫でる。

「……ん」

なんかいつものギャップが激しくていつも以上に氷川さんが可愛く見える。

「それじゃあ一緒に行きましょう」

氷川さんに抱きつかれたまま公衆電話に向かおうと小屋を出ると先ほどより少し雨が弱まった気がする。傘をさして外に出る。そもそも公衆電話ってどこにある。最近はめつきり見なくなってしまう気がする。

……とりあえず商店街まで行こう。そう思って外に足を踏み出すと聞きなれた声が聴こえてきた。

「おねーちゃん。ユッキーどこー!!」

まるで近所のことなど考えていないような大きな声で自分と氷川さんの名前が呼ばれる。

「日菜さんーこつちです!!」

こちらにも負けじと声を出して呼びかける。するとこちらに気が付いたのか駆け足でこちらに近づいてくる。

「ユッキーーお姉ちゃんは!?!」

「氷川さんなら後ろに」

ふと今気がついたら抱きつかれている感覚がなくなっている。

「あれ?..」

後ろを振り返ってみると氷川さんが腕を組んで立っている。

「おねーちゃん!心配したんだよ」

「・・・ごめんなさい日菜」

「ううん。あたしこそごめんなさい」

「氷川さんさつき自分に言ったこと日菜さんにも話してあげてください」

「・・・ええ」

「それじゃあ自分は帰りますね」

「え！ユツキー帰っちゃうの？」

「・・・あとは二人で家でゆっくり話し合ってください」

そう言い残り帰宅路についた。

先日のことを思い出しながら教室に向かう。その途中にいつしか見た夢を思い出す。

「あなたが私に告白してきた日よ」

大人になっっている氷川さんに言われた言葉を思い出す。

そんなことを考えていると段々とクラスメイトが教室に集まってくる。

「はい。それじゃあみんなそろそろ集合時間だから体育館に時間どおり集合してね」

担任の先生が黒板に大きく集合時間を書き教室を出て行った。時計を見てみるとあと十分近く時間はあまる。・・・氷川さんを待つか。

少し待っていると氷川さんが小走りで教室に入ってくる。

「遅いですよ氷川さん」

「一ノ瀬さんあなたまだいたの!」

「氷川さんを待っていたんですよ」

「もうとつくに集合時間過ぎてるわよ!?!」

「え」

恐る恐る時計を見てみると黒板にデカデカと書かれた時間から五分も過ぎていた。

「ほら、走りますよ!」

「ちよ、待ってくださいよ!」

氷川さんに手を引かれて体育館まで走る。

なんとか氷川さんのペースについて行き中を覗いて見ると、もうすでに全校生徒が整列して座っている状態だった。そんな中学生徒会が並んでいる列まで手を引かれて連れて行かれる。

そう、学年代表生徒はわざわざ生徒会の列の隣に並ばないといけない。そして生徒会の列は最前列の脇にある。そうなると必然的に全校生徒の目に晒されることになる。

いつかの食堂の時のように氷川さんは周りを気にしていないのか平然とした顔で最前列まで進んでいく。その途中で耳を澄ますとヒソヒソとした声が聞こえてくる。

「すみません遅れました。一ノ瀬さんは私の隣に座ってください」

「・・・わかりました」

終業式は最初に校歌を歌い、校長のありがたいお話を聞いてから最後に学年代表の話がある。

「それでは最後に二年生代表一ノ瀬幸村さん壇上に上がってください」

「はい」

氷川さんと呼ばれて壇上まで上がる。

「一学期を振り返って。二年代表一ノ瀬幸村」

私が名前を呼び彼が壇上に上がっていく。

「一学期を振り返って。二年代表一ノ瀬幸村」

一ノ瀬さんと話すようになって一学期が経っている。

(なんだかこの数ヶ月早いようで短かったわね)

ライブに来てもらったり。クツキーと一緒に作ったり。体育祭で一緒に走ったり。七夕祭りを一緒に回ったり。彼が家に来たり。

それから日菜と真っ直ぐ話せたこと。

あの日家に帰ったらお父さんもお母さんもすごく心配していた。その後日菜とゆっくり話し合った。お互いが思っていることを話している内に最後は日菜も一ノ瀬さんと同じことを言ってきた。

そのあとはいつも以上に日菜が甘えてくるようになりその日は私の部屋で一緒に寝てしまった。

(本当一ノ瀬さんには敵わないわね)

結局夏休み前最後のテストはいつも以上に勉強にしたつもりだったがそれは彼もそうだったらしく一点差で負けてしまった。

(一ノ瀬さんはこの一学期の出来事をどう話すのでしょうか)
少し楽しみな気持ちで彼の話を聞き始めた。

「一学期を振り返って。一ノ瀬幸村」

「まず最初に言っておきたいことがあります。自分はこの花咲川に入学して一年間友達がいまませんでした」

「それもそうです。自分たちの代の男子生徒は両手で数えられる程度です。そうなると必然的に友達もできないものです」

「ですが友達もない自分に去年からテストごとに絡んでくる人がいました。その人はテストが終わると毎回毎回必ず絡んできました」

「いつも今回はどのくらい勉強をしたのか、いつ頃からテスト範囲をやり始めたなど、小一時間ほど詰め寄ってくる人でした」

「今年の春クラス名簿を見た時その人の名前を見つけてとてもうんざりした記憶があります」

「案の定彼女はより一層絡んでくるようになりました」

「そこからの今日この日まであつという間に時間が過ぎました」

「彼女のライブに行つてその音に一目惚れしたこと。バイト先で一緒にお菓子を作つたこと。体育祭で一緒に走つたり、七夕祭りに一緒に行つたこと。そのほかもいろんなことがありました」

「そんな日々を過ごしているとなぜだか学校に行くのが少しずつ楽しみになっていきました」

「そして一緒に出掛けた時にその彼女が知らない人に絡まれているのを見てとても不快な気持ちになりました」

「その時に自分の気持ちに気づきました。自分は彼女のことを好きなのだ」と

ここまでやったんだ今更引くわけにはいかない。

すう、と小さく息を吸う。

「2年B組氷川紗夜あなたのことを世界で一番愛しています!!好きです付き合ってください!!!」

体育館が震えた気がした。やってしまった。もしかしたら今までの関係も今日この瞬間終わってしまうかもしれない。

興奮している生徒たちを先生たちが落ち着かせようとしているとマイクを持った彼女がステージ前まで歩いてくる。

すると先ほどまで震えていた体育館がまるで映画館のように音一つ聞こえない空間になる。

そしてゆっくりと口を開いた。

「・・・あなたは勝手な人です。いつもいつも私のことをからかって」
「大体人の気持ちも考えずになんですか。いきなりこんな場で告白なんてしてきて。本当に大馬鹿ものです。だけどそんな大馬鹿ものに惚れてしまった私も大馬鹿ものなのでしょうね」

「私も幸村さんのことが大好きです」

氷川さんのその一言でまたコンサート会場のような空間に戻る。

「ああ、よかった」

震える体育館で誰にも聞こえないような声でそう呟いた。

「失礼しました」

頭を下げたドアを閉める。結局あのあと教室に戻ってから生徒指

導室に連行された。

先生からたつぷりとありがたいお言葉をもらって帰ろうとしたら、逆に先生の愚痴を嫌々と聞かされていつの間にか夕日が顔を見せる時間になっていた。

校門まで行くと彼女がやっと来たのねとした顔で待っていた。

「・・・遅いですよ」

「すみません」

「・・・」

何故だろう氷川さんの顔がまともに見れない。二人して黙っているとなんともかわいらしく空腹を知らせる音が氷川さんのお腹から聞こえてくる。

「・・・ポテト食べに行きますか」

「・・・ええ」

「・・・幸村さん」

「なんです」

「ん」

頭が真っ白になる。

「・・・氷川さん」

「・・・名前で呼んで」

「・・・紗夜」

「ほら、行きますよ」

「ちよつと待ってくださいよ」

そう言つて走つて行く背中を追いかけて走り出す。

最後に見せた夕日に照らされた彼女の顔は何よりも綺麗に見えた。

その後

ポテトの日

あの事件とも言える告白から数ヶ月が経っていた。今では自分たちは学校公式のカップルみたいな扱いになっている。最初は紗夜は風紀委員としてのなんちゃらと言っていたが今となっては開き直っている。

さて、今日はそんな自分と紗夜のアレからの日常を紹介しようと思う。

「幸村」

「はい？」

いつもの様に一緒に下校している時に切羽詰まった顔をしていた。

「えっと、どうかしたんですか？」

「ええっと」

何か言いたい。でも、少し恥ずかしい。紗夜の顔からはそんな表情をしていた。この顔をするときは考えていることはアレのことしかない。

「ポテト関連ですか？」

「んな!?!なんでわかったの!」

「そりゃそのくらいはもうわかりますよ。毎日一緒にいるんですから」

「そ、そう。察しがよくて助かるわ」

少し赤くなった顔を手でパタパタを仰いでいる。

「それで、何があったんですか？」

「これを見て」

そうやって差し出してきたスマホの画面に映し出されているのは

“ポテフェス”と言う祭りの告知だった。

「なんですかこのポテフェスって？」

その言葉を聞いた瞬間に紗夜の目つきが変わる。

「ええ、教えてあげましょう。ポテフェスとは通称ポテトフェスティ

バルの略です。毎月10日の日はアメリカのポテト協会が定めたポテトの日なんです！そして10月10日はポテト好きによるポテト好きのためのポテトの祭り。ポテフェスの開催日なんですよ!!しかも毎年アメリカでしか開催されていなかったのですが、今年はなんと日本で初開催で日本のポテラーは大いに喜んだものです!!」

「へ、へえ。そうなんですか」

本当にポテトのことになると人が変わる。日菜さんもそうだが氷川家はポテトのことになるとおかしくなる。

氷川の才能はポテトの呪いの代償なのではないか。そんなことを興奮している紗夜を尻目に考えていた。

「そしてですね。よかったら」

「わかりましたよ。その日は開けておきます」

「ふふ、ありがとうございます」

ギョツと繋いでいる手が少しばかり強く握られた。

まあ、最近自分もポテトにハマってきてはいるから少し楽しみでもあった。それになんであれ紗夜と二人で出かけられるのは楽しみだと感じた。

「ほら、行きますよ幸村」

「そんなに急いだってポテトは逃げませんよ」

そして祭り当日。会場である場所に来てみるとそこにはたくさん

の出店があった。まるで肉フェスの様だ。なんでもいろいろな店を
食べ歩き最後に一番気に入った店に投票するらしい。

そしてグランプリを決めるのだとか。

「まずはどこから行こうかしら」

「それにしても色々な店がありますね」

ただ塩で味付けされただけのフライドポテト、ポテトチップス、
マッシュ状にしてコロツケに近いポテト、じゃがバター、挙げ句の果
てには焼き芋もある。

「まず最初はあそこですかね」

紗夜が見つめる先にはアメリカでグランプリ受賞と書かれた看板
が掲げてある店だった。ポテトチップスか。

「いきなりあそこですか。すごい人が並んでますよ」

「当たり前です。あそこを最初に食べておかないといつ売り切れにな
るかわかりません。そしてあの店を基準に他を評価していきます」

「わかりましたよ」

いつもならこう言うイベントの時は冷静な紗夜だがポテフェスは
別らしい。

トコナツツパークで見せたあの行動力はどこにも感じられなかつ
た。

「まだかしら」

「まだ並んだばかりですよ」

列に並ぶともう待ちきれないのか少し背伸びをして先頭の確認を
している。本当にポテトのことになると人が変わる。はじめの頃か
らは想像もできないくらいギャップだ。

それから10分後ようやく自分たちの番が回ってきた。

「はい、お待たせいたしました」

「こ、これが伝説の」

震える手で受け取り列から外れる。

「い、いただきます」

ん、確かに今まで食べてきたポテチの中で一番美味しいかもしれな
い。

「紗夜、って」

「お、おいひい」

いつもの仮面はどこかに忘れてきたのかその顔は緩みまくっている。

「よかったですね」

「ええ、これほどまでとは思っても見ませんでした」

もぐもぐとウサギがニンジンを食べる勢いで食べていく。

「ごちそうさまです」

「次はどこにいきますか？」

「はい、次はあそこにいきましょう！」

そこは国産お芋ブースだった。

「これはすごいですね」

日本が初開催と言うこともあるのか日本ブースはとてつもなく気合が入っている。

「行きますよ!!」

「はいはい」

「まずはあそこです」

「サツマイモですか」

鹿児島県産のサツマイモ。確かサツマイモは国内では鹿児島がダントツの収穫量だったことを思い出した。

「へえ、直火で焼いてるんですか」

「そう、これがこのお店のこだわりなんです！」

「なるほど」

この日のためにフライドポテト以外も勉強してきたのか詳しい。

「はい、幸村熱いからから気をつけなさい」

「ありがとうございます」

受け取ったサツマイモは熱々で少し冷まさないととても食べられない。

「フーフー、ではいただきます」

白い湯気が出ている割れ目に息を吹きかけて冷ます。一口かじっただけでも口の中に甘味が広がっていく。さっきのフライドポテト

の塩が甘味によって調和されていく。

「甘くて美味しわあ」

幸せそうな顔でサツマイモを食べている。その顔を見ただけ今日は来てよかったなと思う。

ふう、少しお腹にも溜まつてきた。やっぱりポテトはお腹にたまりやすい。

「ほら、次に行くわよ」

「ちよ、ちよつと休憩しましょうよ」

「何甘えたことを言っているの。早くしないと売り切れてしまうわよ」

「わ、わかりましたよ」

先ほどの幸せそうな顔はどこに行つたのか今度は鬼の形相で睨んでくる。

「次が本命なのよ」

「どこですか」

「ここよ」

「北海道産じゃがいもの王道フライドポテト」

いかにも最後のボスといった感じだ。

「いい、このお店のフライドポテトは、北海道で収穫された新鮮なじゃがいもを厳選された油と長年の職人のわざで作られる絶品の一品なのよ」

「はあ」

正直いもの品種でそこまで味が変わるとは思えない。ましてやフライドポテトは調理工程が簡単だ。

複雑な工程を踏まない料理は食材によって味が変わると新宮寺さんがいつていたが普段料理をしない自分はよくわからない。

ファストフードのフライドポテトとそこまで味が変わるのか。

「何その目は」

「いや、なんでもないですよ」

「食べればわかるわよ」

「そうですか」

お腹が膨れていることもあり味がわかるのか心配だ。紗夜がササッと買ってくる。

「大きくないですか」

「別に普通よ」

やはりいもでもフライドポテトは別格らしい。

「ほら、口を開けなさい」

ポテトを突き出され口に入れる。

「こ、これは。」

「お、美味しい。今まで食べてきたフライドポテトの中でもダントツに美味しいです」

「ふふん、そうでしょ。やっとわかったかしら」

確かにファストフードとは比べものにならないくらいうまい。食材によって味が変わるか。確かにそれがこのポテトによってわかる気がする。

その証拠にさっきまで片手に持っていたポテトがなくなっていた。今までで一番のスピードじゃないか。

「そんなに急いで食べると喉に詰まりますよ」

「わかってるわよ。でも、止まらないの」

もぐもぐもぐもぐ。相変わらず、すごいな。ちなみにこのポテト高速食いは氷川家は全員習得している。お母さん曰く紗夜と日菜さんはまだまだ遅いとのこと。

「ぐ」馳走様でした」

持ってきていたティッシュで口周りの油を拭き取っている。それだけが色つぼく見える。女は唇が一番エロいと言っていた水無瀬さんの真面目な顔を思い出し確かに一理あるなと思った。

「さて、次は」

「ま、まだいくんですか?」

「当たり前よ」

断ることすら許さない顔だ。帰りに胃薬買って行かなきゃな。前を歩く紗夜の背中を見てそんなことを考えていた。

「はあ、至福の1日でした」

「・・・よかったですね」

む、胸がムカムカする。今日だけで一生分の油を摂取したのではないだろうか。胃の感覚がない。でも、最近バンドの練習ばかりで息抜きができていなかった紗夜が今日1日でリフレッシュできたならよかった。

「どれも美味しかったですね」

「はい。そうですね」

「世界は広いことがわかったわ」

「どのジャンルでも世界があることがわかりました」

「さて、帰りますか」

「はい」

電車で揺られて自分たちの街に帰っていく。カバンの中にしまっていた朝比奈さんに紹介してもらった本を読んでいた。今では数少ない男子生徒と言うこともありよき友人だ。さすが、白金さんと同じで読書が趣味と言っているのがわかる。内容も自分の好みに沿っていてもスラスラ頭に入ってくる。

そして最寄りの駅に着くと紗夜とはここでお別れだ。

「それじゃあ、また来週」

「・・・あの、よかったらうちに来ませんか？」

「え」

「え、えっと。お母さんたちも久しぶりに幸村に会いたいらしくて今

日一緒に出かけることを伝えたら夜連れてこいと」

「そうですか」

スマホに今日は帰れないことを親に送信する。

「じゃあ、行きましようか」

「・・・いいんですか?」

「氷川家は敵に回したくないですから」

「ふふ、そうですよ。幸村はもうみんなに気に入られているのだから」

「それはありがたい様な、複雑な様な」

「ほら、行きましよう」

「はい」

差し出された手をしっかりとつなぎ、紗夜の家に向かった。